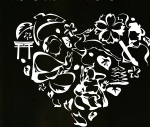


第14回

「好き」を深める。「好き」が広がる。



CROSS OVER

地歴甲子園

全国高校生
歴史
フォーラム

発表集

目 次

ご あ い さ つ 審査委員長・奈良大学学長 清水 哲郎	4
審査結果の講評	5
審査結果 優秀賞	6
審査結果 佳作	7
優秀賞受賞レポート	
埼玉県・昌平中学・高等学校	11
研 究 者 名：社会歴史研究部 松永武大 研究タイトル：戦時下の海南島 —海南海軍警察訓練所と二枚の絵—	
岐阜県立関高等学校	27
研究グループ名：アントロポス研究会 地域研究部・自然科学部合同チーム 研 究 者 名：井上寧々・古田萌恵・神谷杏奈・木村陽向・小森弘貴・岩田悠市 山内虎太郎・永坂知也・熊崎真南風・酒井雄万・拓植幹大・渡邊みき 酒向由芽・山田珠実・小川果枝・竹山 翔 研究タイトル：ナッツ割りから考える700万年の人類史 ～チンパンジー、現代の子ども、飛驒の縄文人を比較する～	
岐阜県立関高等学校	39
研究グループ名：地域研究部 研 究 者 名：那須優花・小林未紗・岩井萌々子・赤羽葉那・山内康誠・藤井大輝 小山政亮・田中莉子・藤村彩須果・小原和也・河路康太・渡邊貫太 研究タイトル：応永年間、関鍛冶に何が起きたのか ～関鍛冶成立期に関する探究～	
兵庫県立加古川東高等学校	51
研究グループ名：自然科学部 地学班 研 究 者 名：井上絢音・竹山悠斗・真野航輔・山野莉緒・高橋侑希・田畑陽彩 研究タイトル：天満大池築造と喜瀬川形成に関する地理学的検討	
長崎県立壱岐高等学校	63
研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース歴史学専攻2年生 研 究 者 名：吉本大悟・竹川 柊・富田悠斗・益中大輝・大島透優 研究タイトル：定光寺前遺跡出土の貿易陶磁器からみた中世壱岐の研究	
佳作ポスター	79
※ポスター発表は任意のため、ポスターを掲載していない研究レポートがあります。	
第14回全国高校生歴史フォーラム 応募タイトル一覧	85

ごあいさつ

審査委員長・奈良大学学長 清水 哲郎

新型コロナウイルス感染への恐怖というだれしも経験したことのない環境下で、高校生の皆さんにとって今年は、大学生以上に大変だっただろうと推察いたします。高校生活では、自宅学習やオンライン授業、また短縮授業、夏休みの大幅短縮、クラスの絆を深める文化祭や体育祭など行事の中止、いずれも初めての経験ばかりされたのではないのでしょうか。その困難な状況の中で、日頃の学習の成果を発揮すべく調査研究を遂行され、本学の歴史フォーラムに応募していただきましたことに心よりお礼申し上げます。

日本で最初の都が築かれ、古代日本の中心として栄えた奈良、1300年以上の歴史が息づくこの地に奈良大学が誕生したのは1969年のことです。本学には、現在文学部（国文学科・史学科・地理学科・文化財学科）と社会学部（心理学科・総合社会学科）、さらに大学院（文学研究科・社会学研究科）および通信教育部が置かれており、学生数は約3900名、全国各地から多くの学生を迎えています。図書館には55万冊以上の蔵書があり、特に15万冊を超える文化財専門書を擁する本学図書館は、日本屈指の歴史・文化財情報に関する知の拠点として国内外から注目されています。

さて、今から13年前の2007年に、奈良大学は、多くの生徒にとっては「暗記科目」という印象が強い歴史や地理に、暗記ではなく、自分たちで調べ、考え、真実を発見するなど、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを導入することで、歴史や地理を探究する醍醐味を実感してほしいとの願いから「全国高校生歴史フォーラム」を企画・開催しました。幸い私達の思いは、全国の高校生と、生徒の皆さんを指導しておられる先生方に届いて、準備期間や周知が十分でなかったにもかかわらず全国の22校から72編の応募がありました。

その後、応募校数は増加し、過去14年間の平均では、参加校が47校、また応募点数では111編となっております。今年度の状況は、参加校が全国37都道府県から80校、応募点数が114編を数え、参加校は昨年より大幅に増加しております。審査委員会による厳正なる審査の結果、全国から選り抜かれた優秀賞に5編が、また佳作として5編が選ばれました。

最後になりますが、全国高校生歴史フォーラムの開催にあたり、ご尽力を賜りました皆さんに心から感謝申し上げますとともに、ご指導にあたられた先生方と熱心に研究して応募された高校生の皆さんに、お礼の言葉を申し上げます。選考の経緯と結果につきましては、講評をご参照ください。

審査結果の講評

2020年は、新型コロナウイルスの感染拡大によって、社会のあらゆる面において大きな変動が引き起こされ、今なお収まっておりません。大学も例外ではありません。前期は学校へ行くことすらできず、課外活動もできませんでした。特に新入生は校内の様子も知らず、友達もできないまま、日々自宅での学習を余儀なくされました。後期に入って対面授業が再開されたとはいえ、いろいろな制約が続いています。

今年で14回目を迎えた全国高校生歴史フォーラムですが、こうした経験のない環境の中で、高校生の皆さんが果たしてどれほど研究活動ができたでしょうか、どれほど先生や仲間と議論ができたでしょうか、思うような研究ができず、断念せざるを得ない人もいるのではないかと、そんな危惧を抱いておりました。

しかし、送られてきたレポートは114編と近5年間の平均レベルとなり、応募校数では80校と、近5年間の平均を30校近く上回りました。時に行き詰まり、悩みながらも、先生や仲間と研究活動を楽しむ高校生の姿を思い浮かべ、巷の沈滞ムードを打ち破るみずみずしい力を感じることができました。

予定していた調査を中止あるいは変更を余儀なくされるなど、コロナの影響を被ったレポートも散見されたものの、全体としては例年とほとんど変わらないレベルでした。応募作品が扱うテーマや時代は幅広く、地質、生物、鉱物など自然科学系、歴史、文学など人文科学系、さらに経済、社会など社会科学系とあらゆる分野に及び、時代は石器時代から現代にわたります。その内容は大きく分けて2つ、即ち、地元の史跡や環境、自分の家に残る歴史的資料などを手掛かりに、課題を見つけて掘り下げてゆくタイプと、歴史上のさまざまな問題を自分なりの視点や方法で解決しようとするタイプに分かれるように思います。また研究方法として前者は文献史料以外に現地調査や地元の人へのインタビューなどの資料収集を行うものが多く、後者は主に先行研究や文献史料を読み込み、新たな方法や解釈を加えて考察を重ねるものが多いようです。

今は何か疑問があれば、インターネットで簡単にそれなりの情報は入手できます。それに関する意見も見ることができます。レポートの中には、そうした情報をまとめたものもありました。しかしそれは「他人」の意見や情報を「紹介」したにすぎません。我々が期待しているのは、課題を見出し、解決方法を考え、資料を集め、分析・考察する、その格闘の過程と果実です。なぜなら、知的欲求と、理論的な思考に支えられ、自らの手で獲得した結果は、その人だけの血肉となるからです。

優秀賞と佳作に選ばれたレポートはそうした観点から高く評価されたものですが、惜しくも選にはもれたものの、大学生の卒論レベルの斬新な視点や思考力を示したものもありました。今回は感染拡大予防の観点から、奈良大学でのフォーラム開催は規模を縮小した残念な形を取らざるを得なくなりましたが、若い皆さんが、コロナなど吹き飛ばして、歴史に社会に、そして人間に興味をもち、大いに楽しく探求されることを願っております。

第14回全国高校生歴史フォーラム審査委員会

(文責 角谷常子)

審査結果

優 秀 賞

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



埼玉県・昌平中学・高等学校

研究者名：社会歴史研究部 松永武大

研究タイトル：戦時下の海南島
—海南海軍警察訓練所と二枚の絵—



岐阜県立関高等学校

研究グループ名：アントロポス研究会 地域研究部・自然科学部合同チーム

研究者名：井上寧々・古田萌恵・神谷杏奈・木村陽向・小森弘貴・岩田悠市
山内虎太郎・永坂知也・熊崎真南風・酒井雄万・拓植幹大
渡邊みき・酒向由芽・山田珠実・小川果枝・竹山 翔

研究タイトル：ナッツ割りから考える700万年の人類史
～チンパンジー、現代の子ども、飛騨の縄文人を比較する～



岐阜県立関高等学校

研究グループ名：地域研究部

研究者名：那須優花・小林未紗・岩井萌々子・赤羽葉那・山内康誠
藤井大輝・小山政亮・田中莉子・藤村彩須果・小原和也
河路康太・渡邊貫太

研究タイトル：応永年間、関鍛冶に何が起きたのか
～関鍛冶成立期に関する探究～



兵庫県立加古川東高等学校

研究グループ名：自然科学部 地学班

研究者名：井上絢音・竹山悠斗・真野航輔・山野莉緒・高橋侑希・田畑陽彩

研究タイトル：天満大池築造と喜瀬川形成に関する地理学的検討



長崎県立壱岐高等学校

研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース歴史学専攻2年生

研究者名：吉本大悟・竹川 柊・富田悠斗・益中大輝・大島透優

研究タイトル：定光寺前遺跡出土の貿易陶磁器からみた中世壱岐の研究

審査結果

佳 作

(高等学校等コード順に掲載、敬称略)



群馬県・伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

研 究 者 名：菊池悠真

研究タイトル：上毛野地域の発展と交通路の関係
～地域内全域の包括的考察～



千葉県・千葉敬愛高等学校

研 究 者 名：中村優希

研究タイトル：安土城天主の平面復元の試案に基づく「天守指図」の史料価値の検討



福井県・福井南高等学校

研 究 者 名：前田遥南・軽部由菜

研究タイトル：福井県の軽部氏と「講」及び伝統文化の存続



愛知県・南山国際高等学校

研 究 者 名：秀 丈瑠

研究タイトル：讃岐高松藩「塩硝製法並びに筒薬調合方」
未解読古文書から考察する幕末高松藩の火薬製造



鹿児島県立鶴翔高等学校

研究グループ名：地域文化研究同好会

研 究 者 名：倉津優奈・入徳舞衣・的場 翔・下平拓真

研究タイトル：二億年前からのたからもの
～光礁（ひかるぜ）と五色浜（ごしきはま）～

優秀賞研究レポート

(高等学校等コード順に掲載)

優秀賞

戦時下の海南島

—海南海軍警察訓練所と二枚の絵—

昌平中学・高等学校 社会歴史研究部 松永武大



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jacar.go.jp/>

はじめに―曾祖父の出征―

「死ぬときに“天皇陛下万歳!!”なんて言って死んだ奴はいなかった。母親に会いたい、故郷に帰りたい、そうやってみんな死んでいったんだ」が、自身の従軍体験をほとんど口にできなかった曾祖父の口癖だったと祖父から聞く。曾祖父は 1940 年に旧制中学を卒業した。その後大学に進学したが、まもなく退学。それから志願兵として海軍にはいり、1942 年 9 月に南シナ海北部に位置する海南島(現中華人民共和国海南省)に入島、敗戦後の 1946 年 3 月に「引揚げ」てくるまでの約三年半を同島で過ごした。

しかし、曾祖父の軍隊生活について祖父の話とは違う印象を与える二つの史料がある。曾祖父が 1943 年 2 月に海南島から妹に送った手紙(資料①)とそれに同封された二枚の絵である(資料②)。資料①の手紙によれば、海南島は「美しい小島が澤山居」て、「豆まき」ができ、「土人の子供」が「馴れ馴れしく遊びに来」るような島だという。また資料②の絵を、「前の所の子供たち」に描いてもらったものとしている。これは自分が以前所属していた部署の子供たちという意味だと推察される。この手紙の約 4 か月前の 9 月 27 日に書かれた手紙では、自分の所属先を「海南海軍警察訓練所」と記していた(資料③)。つまり「前の所の子供たち」は、「海南海軍警察訓練所の子供たち」のことを指すと思われる。

祖父の話からうかがえる悲壮感と、手紙と絵からの牧歌的雰囲気、この二つの印象の違い、違和感はどこからくるのだろうか。戦時下、日本軍の占領地であった海南島で、いったい何が起こっていたのだろうか。その歴史の一端を、「海南海軍警察訓練所」を手掛かりに明らかにしていきたい。

1. 日本軍による海南島占領の目的と支配の概要

海南島占領の目的及び経緯全般については戦史叢書『中国方面海軍作戦(2)―昭和 14 年 3 月以降―』79(以下『戦史叢書』)⁽¹⁾に詳しい。同書によれば日本軍の海南島の占領目的は「封鎖作戦基地取得」とされるが、一方で、「同島が天然資源の宝庫であるという風説に限りない魅力を感じ」ていたとも書かれている⁽²⁾。それでは当時の日本において海南島の資源はどのように見られていたのだろうか。大阪朝日新聞掲載の『寶庫海南島を視察』⁽³⁾や松尾弘の『海南島調査記』⁽⁴⁾では、「敵軍」や「治安」の関係により、一部地域の調査・確認が出来ず、開発も難しいかもしれないが、将来「発展」する可能性は十分にあると結論づけている。これが当時の海南島の資源および同島に対する一般的な認識であり、こうした情報に基づき日本軍は海南島占領に乗り出したと思われる。

日本軍による海南島の支配体制については、『海南警備府戦時日誌』(以下『戦時日誌』)⁽⁵⁾に概要がまとめられている。海南島支配はその多くを日本海軍が担当し、陸軍の支配地域は同島北部の海口(現中華人民共和国海南省海口市)を含む一部地域のみであった。日本海軍は 1942 年 1 月当時、海南島を五つの範囲に区切り、それぞれを第 15 警備隊(以下 15 警)、第 16 警備隊(以下 16 警)、横須賀鎮守府第四特別陸戦隊(以下横四特)、舞鶴鎮守府第一特別陸戦隊(以下舞一特)、佐世保鎮守府第八特別陸戦隊(以下佐八特)の五つの海軍陸戦隊に地域を分担させ、支配していた(資料④)。その後、陸軍の占領支配地域縮小により(資料⑤)、舞一特の支配担当地域が拡大したなど、わずかな変化はあったものの、基本的な占領担当地域は記録に残っている限りでは大きな変化はない。このような支配構造はなぜ定められたのか。次節では日本軍が海南島で対峙していた「敵軍」についてみていく。

2. 占領下海南島の「敵軍」

『戦時日誌』には、1942年6月から、「敵推定兵力及分布状況」という名目で、各陸戦隊の占領担当地区ごとに、ほぼ毎月、推測される抵抗勢力(「敵軍」)を「共産匪」「保安團(守備團)」「遊撃隊」の種類ごとに分けて記した表がある。ここにおける「共産匪」とは1944年3月の『戦時日誌』によれば中国共産党傘下の軍隊のことであり(資料⑥)、「保安團」は1942年4月の同書によれば、蒋介石の命令によって「重慶軍」が編成した軍隊(資料⑦)、すなわち、中華民国軍のことを表していると思われる。海南島全島における「敵軍」の人数は、1942年6月から1944年7月までに、総数で7000人程増加している(資料⑧)。

次に、海南島の「敵軍」の情勢について、『戦時日誌』からわかる限りの各陸戦隊管区の「敵軍」の人数の推移を確認し、「共産匪」や「保安團」などに分類した。次に「共産匪」の推定人数の推移を海南島全体(資料⑨)、15警管区(資料⑩)、佐八特管区(資料⑪)、佐八特管区(資料⑫)、舞一特管区(資料⑬)、横四特管区(資料⑭)に分け、それぞれグラフ化した。ここからは、1942年10月、海南島全体で6000人以上に膨れ上がった「共産匪」の約75%が15警管区に集結していたことがわかる。翌年1月には、15警管区で「共産匪」が5200人から2000人弱まで減じたが、それに対して、佐八特管区では10月の365人から翌2月には1265人へ、舞一特管区では5月に2000人に達するなど周辺地域で「共産匪」が増加していることがわかる。

さらに、「遊撃隊」の推定人数の推移を「共産匪」で行った手法と同じようにグラフ化した(15警:資料⑮、島全体:資料⑯、佐八特:資料⑰、16警:資料⑱、舞一特:資料⑲、横四特:資料⑳)、「保安團」についても同様にグラフ化した(15警:資料㉑、島全体:資料㉒、16警:資料㉓、佐八特:資料㉔、横四特:資料㉕、舞一特:資料㉖)。

これらのグラフから、戦争の長期化とともに増加していった「敵軍」たちが、一致協力して日本軍の占領支配に抵抗していたわけではなかった様子がみえてくる。例えば1942年10月の『戦時日誌』には、「保安第七團ノ一部」と「遊撃隊」が「共匪を討伐していたところ、共産軍に包囲された」として日本軍に救援を要請してきたのでこれを救出したこと、また、日本軍に「共匪」の情報を送るだけでなく、日本軍の共産軍討伐に協力したいと申し出てきたことなどが記されている(資料㉗)。つまり、「共産軍」と「保安團」は当時敵対関係にあったと考えられる。その事実を裏付けるように、佐八特管区における「共産匪」の人数推移(資料⑪)と同管区における「保安團」の人数推移(資料㉔)の間にも相関関係がうかがわれる。1943年3月、佐八特管区における「保安團」の数が前月から500人増加し3480人と推定されたが、「共産匪」は200人程減じ、1045人となっている。またその2か月後の同年5月、同管区の「保安團」が前月から1800人以上減じ700人と推定された時には、逆に「共産匪」は1330人と前月からほぼ倍増している。さらにその翌月、「保安團」が1510人と倍増した時には、「共産匪」の数は500人以上減少している。これらのことから「共産匪」は日本軍だけでなく「保安團」の追跡からも逃れていたと考えられる。

教科書的には日中戦争について、「第二次国共合作により団結した中国 vs 日本」という明瞭な構図で考えがちであるが、少なくとも海南島においては、「中華民国 vs 共産党 vs 日本」という三つ巴の戦いが繰り広げられていたと結論付けられる。さらに海南警備府がしるした『海南警備府部隊作戦及警備概要申告覚書』(以下『申告覚書』)⁽⁶⁾によれば、前述

の「共産匪」、「保安團」、「遊撃隊」の三者いずれもが「其ノ装備ノ劣悪ナルト又訓練不足ノ為」に「良民ニ混ジ」って日本軍をかく乱する「遊撃戦」、いわゆるゲリラ戦法を得意とし、軍用トラックを襲撃したり、電柱を倒したり、道路を構築中の日本軍が雇った「人夫」に紛れて攻撃をしたり、商人に変装して市場に潜入し、日本軍人を襲撃するなどしていたという(資料⑳)。海南島では日本軍による組織的な虐殺が起こっていた(㉑)とされるが、その背景には前述の様な「三つ巴の戦い」や抵抗勢力が「ゲリラ戦法を採用」したことがあったのではないかと推察される。

3. 日本軍の対応―陸戦隊と警察中隊―

前項で記したように、「敵軍」たちは一枚岩ではなかったものの、着々とその数を増やしつつあった(史料㉒)。それでは、日本軍はどのように対処したのだろうか。「敵軍」の増加への対策としては、単純に自軍の兵隊の数を増やす方法が考えられるが、日本軍が実際にとった対応は別の方法であった。

『戦時日誌』には、1941年12月から1943年6月までの島内日本軍の総人数を「海南警備府現員表」としてまとめている。この表に基づき兵、下士官の各管区の合計人数を15警(資料㉓)、16警(資料㉔)、佐八特(資料㉕)、舞一特(資料㉖)、横四特(資料㉗)に分けてそれぞれまとめてみると、管区内の抵抗勢力の数が増加しているのにも関わらず、兵隊の人数はほぼ横ばいで、一部管区の兵員数に至っては、むしろ減少していることがわかる。

それでは、日本軍がとった対応とはどんなものだったのだろうか。『申告覚書』によれば、占領地域の拡大と、第二項で記した「海南島開発」に協力する邦人や会社の増加によって重要性が増した「後方治安迅速確立」のために「各警備隊及特別陸戦隊司令ニ直属スル各二個ノ警察中隊を編成シ」、それぞれを「環島道路警察中隊」(警察第一中隊)、「地区警察中隊」(警察第二中隊)と呼称したという(資料㉘)。これについては『戦史叢書』にも昭和19年には「海軍警察隊が四,〇〇〇人以上も駐在」したことは「海軍の軍政下に在る」海南島の「大きな特徴」との記述がある(㉙)。

この「警察隊」について注意すべきは、『申告覚書』内で「警察官」について、将来の「軍ノ一翼トシテ後方治安維持ヲ擔當」させると表現(資料㉚)されている点である。つまり、当時の「警察隊」は軍隊の部隊とは異なるものと認識されていたのである。

この点をふまえ、「警察中隊」の具体的様子についてみていく。まず「警察第一中隊」に関しては、1942年11月23日付の機密海南警備府命令第四〇號「海南警備府警察中隊編成要綱」において、「環島道路」や「環島道路ノ橋梁」の「保護整備」、「環島道路上ニ於ケル通行人検問ノ実施」、「環島道路沿道両側三軒以内地域ノ住民宣撫指導治安維持会結成戸口調査」や同区域内の「敵匪」を削減することなど、道路周辺の「治安維持」に努めることが任務とされた(資料㉛)。

一方、「警察第二中隊」に関しては警察第一中隊が管轄する「環島道路沿道両側三軒以内」以外の地域すべての区域を担当するとされ、1943年1月20日の機密海南警備府命令第七號「海南警備府地区警察中隊編成要綱」において定められた任務は、「敵情蒐集」や「密偵ノ指導監督」などの情報蒐集に関する事項、「衛生防疫」や「部落ノ清掃整頓」などの宣撫に関する事項までと多岐にわたっていた(資料㉜)。

ここで特筆すべき事項は『申告覚書』において、警察隊の任務はあくまで「比較的治安

良好ナ」後方地域の治安維持であり、軍隊の役割は「奥地未帰順敵匪残在地帯」に進駐することであるとする点である(資料③⑧)。つまり、軍隊である「陸戦隊」と軍隊ではない「警察隊」の棲み分けがはっきりと明記されているのである。1942年11月時点の『戦時日誌』には、「海南海軍警察訓練所」を卒業した「海南島人巡查補」が配備されることが予定されている(資料③⑨)。軍隊ではない「警察隊」であるからこそその記事であると思われる。

ところが1943年9月30日付の機密海南警備府命令五六号「海南警備府警察隊編成並ニ配備要領」においては「治安比較的良好ナル地域ニハ警察隊ヲ單獨駐屯」させて、陸戦部隊の任務を代行させるという従来の「後方治安維持任務」だけでなく、「積極的討伐ヲ要スル地域ニハ駐屯部隊ニ警察隊ヲ編入」させ、陸戦部隊の任務の一部を分担させるとし、警察隊の任務に「陸戦隊とともに最前線で戦うこと」が追加された。これにより『申告覚書』で記された警察隊と陸戦隊の棲み分けが存在しなくなってしまった(資料④⑩)。

その背景には「敵軍」がこのころ活発化したことがあると考えられる。例えば海南島全体及び各管区内の討伐回数を、警察中隊に関する規定が初めて記された1942年11月とそれが改定された1943年9月で比べると、海南島全体では約200回増加しており(資料④⑪)、舞一特管区ではその数は二倍以上になっている(資料④⑫)。

各管区における「傭員」(非正規軍人)の数は15警管区(資料④⑬)、16警管区(資料④⑭)、佐八特管区(資料④⑮)、舞一特管区(資料④⑯)、横四特管区(資料④⑰)のいずれにおいても、規定の改正前である1943年5月頃から増加傾向にあることがわかる。このことから、1943年9月の規定変更より前から陸戦隊に警察隊が「傭員」の一部として編入されていたのではないかと、つまり資料④⑩の規定変更は当時起こっていた状況を追認する形で行われたのではないかと考えられる。規定変更前の『戦時日誌』『作戦経過概要』の中には1943年4月3日、兵隊である「下士官」と警察官である「巡查補」が「合同で村を掃討した」という内容が記されている(資料④⑱)。この事実こそが、裏付けになるのではないだろうか。

4. 海南海軍警察訓練所

最後に改めて「海南海軍警察訓練所」について考えてみたい。1942年9月18日付の機密海南警備府法令第二二號「海南海軍警察訓練所規定」(資料④⑲)によれば、「年齢満二十歳以上三十歳未満ノ日本人」で採用試験を行い、「適當ナル学力ヲ有シ警察職員トシテ見込アル」ものを「普通科訓練生」として採用して、三か月以上の訓練を行うものとしている。

また、将来思想や衛生などの「専務警察職員」や「警察幹部」になるべき存在であると所属長から推薦を受け、「普通科訓練生ノ教程ヲ修業シ」た日から六か月以上実務を経験したものの中から「特修科訓練生」を選抜し、二か月以上訓練を行うと規定されていた。

しかし、1943年4月1日の機密海南警備府法令第五號で改定された「海南海軍警察訓練所規定」(資料④⑳)では、「普通科訓練生」を「年齢満二十歳以上三十歳未満ノ日本人」が入る「甲班」と、「年齢満十七歳以上三十五歳未満ノ海南島人」が入る「乙班」とに分けると記されており、海南島人にも警察訓練所への門戸が開かれることとなった。ただし資料④㉑にある様に、1942年11月には「海軍警察訓練所」から「海南島人巡查補」を卒業させることが、あらかじめ計画されていたと推察できる。また、資料②の絵が記されたのは1942年12月である。その絵を曾祖父は資料①で「こちらの子供の畫」としている。この言葉を信じるなら、1942年12月には、警察訓練所に海南島人が入所していたことになる。

先に、警察中隊の規定変更について「当時起こっていた状況を追認する形で行われたのではないか」としたが、警察訓練所の規定改正についても同様の事が言えるのではないだろうか。事実 1943 年 5 月 8 日の機密海南警備府命令二九號を見れば、「第二回」生の時点で「甲班」が存在していたことがわかる(資料⑥)ので、「乙班」(海南島人)も存在していたと推察される。これらから、資料⑤の「海南海軍警察訓練所」の規定変更も、当時の現状を「追認する形で行われた」ものだったと考えられる。

おわりに

最後に、現時点で推察できる資料②の絵を描いた人物について記しておきたい。この絵の主は自らを「警察訓練生第三回 張夢照」と記している。これは「警察訓練所第三回生」のことを指すと思われる。前項の検討と当時 24 歳の曾祖父が「子供」と表現していたことなどの資料①の手紙の内容を鑑みれば、彼は「17 歳から 24 歳前後の海南島人」だったと推察される。

戦後曾祖父は、従軍体験をほとんど語らぬまま 1974 年に 54 歳の若さでこの世を去った。どうして体験を語らなかったのか？調査を終えた今、私は、曾祖父には二つの理由があったのではなかったか、と考えるようになった。

まず、海南島島内では日本軍と共産軍との激しいゲリラ戦が行われ、結果として日本軍による虐殺行為があった。曾祖父がどのようにかかわっていたかはわからないが、見聞きしたことも含めて思い出し、また、語ったりはしたくない経験だっただろう。

そしてもう一つの考えが、「警察訓練生」の存在だ。曾祖父が訓練所にいたころ、生徒たちの進路は、後方治安維持に努める警察官だった。曾祖父や資料②の絵の主をはじめ、当時そこにいた者全員が、その後の運命を想像もしていなかっただろう。戦う気などまるでなかったら彼らは、戦局の変化によって、陸戦隊とともに「敵軍」との最前線で戦うことになってしまったのだ。ひょっとしたら曾祖父は、そんな「警察訓練生」たちに対して、負い目の様なものを感じていたのかもしれない。訓練所にいたころに、資料②の絵を描いてもらえるほどの関係を彼らと築いていたからこそ、その苦しみは人一倍のものではなかったらうか。

この調査・研究を通じて、兵士にとって最前線での戦いだけが戦争ではないことを痛感した。戦争の多面性、闇の深さ、言葉や記録の輝きの裏にくすぶる一兵士の苦悩の一端を垣間みることができた気がする。

今年 2020 年 8 月で、敗戦から 75 年が過ぎた。私たちが戦争について語る際、戦争体験者の話を聞くという形でのアプローチは、今後ますます難しくなっていくことだろう。私たちがその経験を聞けなくなってしまった後に、どのようにしてあの戦争を忘れずに語り継いでいくべきか。そんな時、遺された言葉や公式資料から語る方法が有効であり、より重要視されるべきであろう。幸いに、IT 環境が整備された現代では、より簡単に、大量の資料の閲覧が可能になった。現に私が引用した資料のほとんどがインターネットで検索・閲覧したものである。

私のささやかな活動が、将来どこかの誰かがアジア・太平洋戦争を語る際にほんの少しでも役立っていたなら、この活動は真に成功したといえるだろう。

注

- (1) 『戦史叢書』とは防衛庁防衛研修所戦史室(現防衛省防衛研究所)により 1966 年から 1980 年にかけて編纂された公判戦史で、海南島については 1939 年 2 月の上陸から 1945 年にかけて、部隊ごとの作戦や、同島占領の目的について記されている。
- 戦史叢書『中国方面海軍作戦(2)―昭和 14 年 3 月以降―』79 (1970) 朝雲新聞社
URL: http://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/SoshoView?kanno=079
- (2) 戦史叢書『中国方面海軍作戦(2)―昭和 14 年 3 月以降―』79 (1970) 朝雲新聞社
URL: http://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/SoshoView?kanno=079
- (3) 大阪朝日新聞 1940 年 2 月 13・14 日掲載記事 神戸大学経済経営研究所「新聞記事文庫・大阪朝日新聞」中国(18-108)
- (4) 松尾弘「海南島調査記」『一橋論叢』5 (1940) 岩波書店
URL: <https://doi.org/10.15057/5150>
- (5) 『海南警備府戦時日誌』は『戦史叢書』と違い、その当時の海南島について「作戦経過」、「人員の現状」、「令達報告」、「作戦経過概要」などに分類し、その他紙媒体で伝達された法令や規定などを「別紙」として記しながら、その情勢を現地を目線から記してあるという点で極めて貴重な一次史料である。現在 1941 年 12 月から 1944 年 7 月までがほぼ欠落なく防衛研究所に保管されており、その全文を「国立公文書館アジア歴史資料センター」の HP(URL: <https://www.jacar.go.jp/>)において閲覧が可能である。
- (6) 防衛省防衛研究所蔵『海南警備府部隊作戦及警備概要申告覚書』1943 年 1 月 3 日付。
- (7) 斎藤日出治「海南島における住民虐殺と統治政策―「Y 作戦」に見られる日本のアジア侵略の構図」『大阪産業大学経済論集』12-1(2010)
- (8) 戦史叢書『中国方面海軍作戦(2)―昭和 14 年 3 月以降―』79 (1970) 朝雲新聞社
URL: http://www.nids.mod.go.jp/military_history_search/SoshoView?kanno=079

主要参考文献

- ・斎藤日出治「海南島における住民虐殺と統治政策 ―「Y 作戦」に見られる日本のアジア侵略の構図」『大阪産業大学経済論集』12-1 (2010)
- ・防衛省防衛研究所蔵『海南警備府戦時日誌』(1941 年 12 月～1944 年 7 月)
- ・松尾弘「海南島調査記」『一橋論叢』5 (1940)
- ・神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫・大阪朝日新聞 中国(18-108)
- ・戦史叢書『中国方面海軍作戦(2)―昭和 14 年 3 月以降―』79 (1970) 朝雲新聞社
- ・防衛省防衛研究所蔵『海南警備府部隊作戦及警備概要申告覚書』(1943)

資料編

- ・資料①



・資料①全文

「昨年十二月二八付の可愛らしい〇〇ちゃんの手紙、貪る様に讀みました。

〇〇ちゃんの手紙、上手だね、誰に文を作ってもらった。

お母さんが一番元気だって・・・ね。僕は嬉しくって飛上るよう様だったよ

兄さんは一昨日夜、節分の豆まきを戦地でやり、一つ年を神様から頂き二四歳に成り

ました。もう一度豆まきを戦地でやれば懐しの日本の地へ飛んで帰れる事に成って居ります。そしたら一緒に餅が食べられますね。米をたくさん作って、帰ったら御馳走を頼むよ。兄さんは体が大きいから五人分位食べるよ。その代りお土産を持って帰って上げるからね。椰子の実を・・・兄さんの唯一のお友達は日本からの手紙だけ。あと土人の子供。だけど土人の子供は、内地乃〇〇ちゃん達の様な可愛らしさがありません。皆鼻っぺたらしだの目くしゃれだの出来物でっかちだのほんとに馴れ馴れしく遊びに来られて困るよ。それから美しい小鳥が澤山居ります。それはそれは見せたい位。こちらの子供の畫を送ります（前の所の子供たちです）。〇〇ちゃんは四年生、きっと素晴らしい画が出来るでせう。今度子供に見せてやるんだ。日本の子供の画を・・・送ってくれよ。一枚で結構。〇〇ちゃん今度五年生に成るんだらう。あまたれないでお母さんの手傳ひをやるんだよ。それから勉強は生徒の職業だから、一生懸命に・・・女學校へ行くんのだらう。せいぜい頑張れ。今日は忙しいから又後で便りを書く。兄さんは元気だ。心配ないぞ。では〇〇ちゃん元気で。さようなら。兄より 昭和 18 年 2 月 5 日」

(適宜句読点を補い、人名は〇〇に変更)

・資料②



・資料③



・資料④：JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C08030537300

『昭和 17 年 1 月 1 日～昭和 17 年 1 月 31 日 海南警備府戦時日誌(1)』



・資料⑤：JACAR：C08030524800

『昭和17年11月1日～昭和17年11月30日
海南警備府戦時日誌(1)』

十月二十四日瑞地陣中陸軍中ノ御傷區城ノ海軍ニ引續ギ之ヲ舞一智ニ受持タシメタリ之ニテ陸軍御傷區城ハ山口ノ中心トスル九軒内ニ精小セシメラレタリ一万射役作戦ト併行シ陸軍部隊及石炭鉱ニ田岡陣ノ御傷區城ハハニ應付セツツアリ

十月二十四日現地陸軍部隊擔當中ノ警備區域ヲ舞一特ニ受持タシメタリ之にて陸軍警備區域は海口ヲ中心トスル九杓圈内ニ縮小セシメラレタリ…（以下略）

・資料⑥：JACAR：C08030537900

『昭和19年3月1日～昭和19年
3月31日 海南警備府戦時日誌(1)』

一 紹興
二 康情
三 山島內康情
四 共產區
五 以陳雲爲首的「左」派在「三三制」中，曾主張要北滿省政府，在東北成立「民主政權委員會」以全國的共產黨組織爲核心，計劃「三三制」。

1. 共產匪(略)全島のニ共産党ノ組織擴大化ヲ計リツツアリ

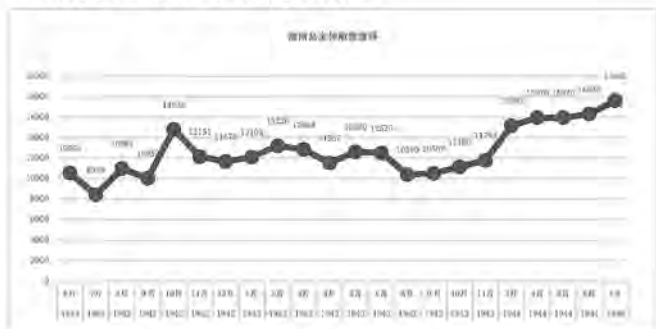
・資料⑦：JACAR：C08030520200

『昭和17年4月1日～昭和17年4月30日
海南警備府戦時日誌(1)』

蔭介石ノ一室助政勢ノ一掃トシテ國權煥發ノ實得集ハ保安第五
ヲ釋放、三月下旬ヨリ四月上旬ニカケテ雷州半島ノ津由海上部隊

蔣介石ノ「春季攻勢」ノ一環トシテ（略）
保安第五團を編成…（以下略）

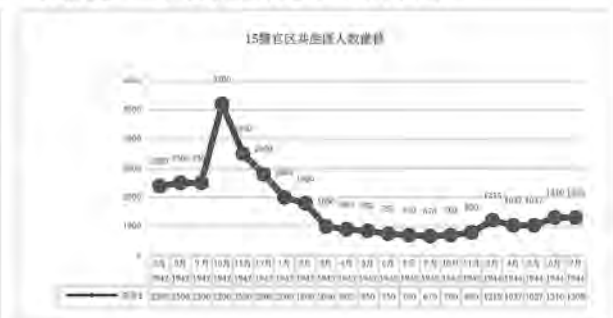
・資料⑧ 海南島全体敵数推移



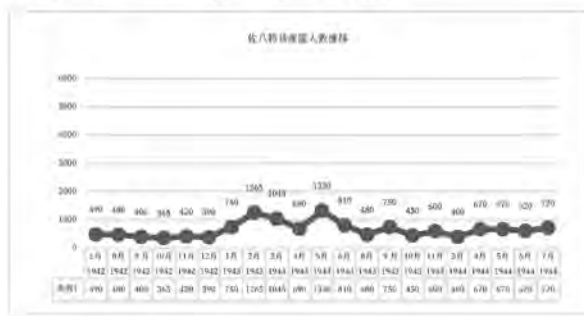
・資料⑨ 海南島全体共匪人数推移



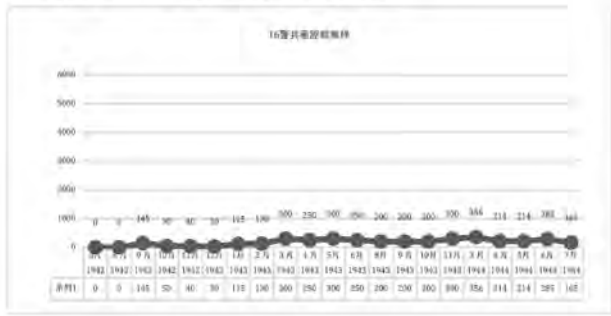
・資料⑩ 15 警管区共產匪人数推移



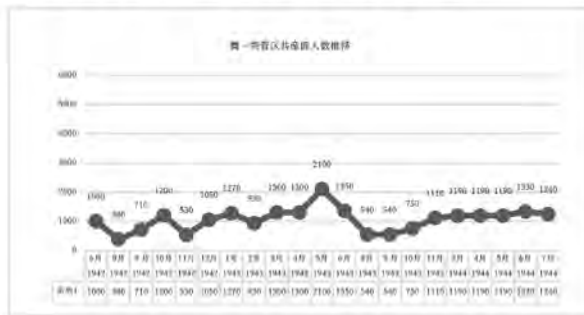
・資料⑪ 佐八特共産匪人数推移



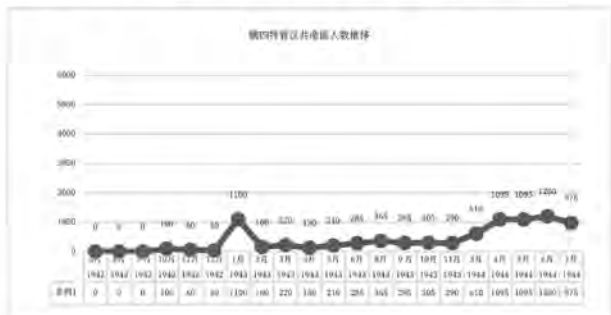
・資料⑫ 16 警共産匪人数推移



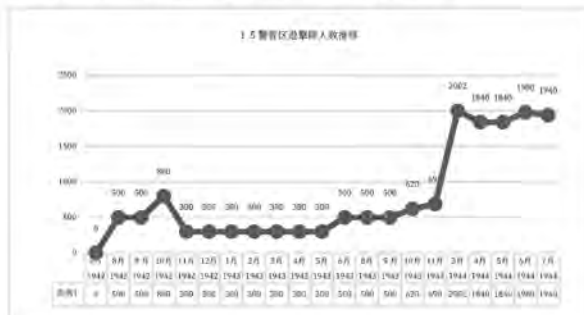
・資料⑬ 舞一特管区共産匪人数推移



・資料⑭ 横四特管区共産匪人数推移



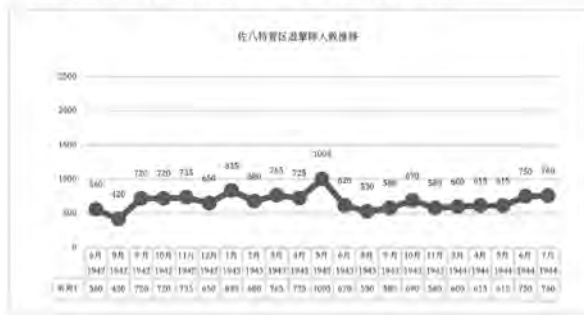
・資料⑮ 15 警管区遊撃隊人数推移



・資料⑯ 海南島全体遊撃隊人数推移



・資料⑰ 佐八特管区遊撃隊人数推移



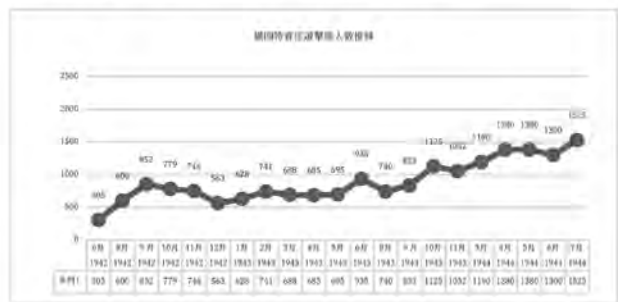
・資料⑱ 16 警管区遊撃隊人数推移



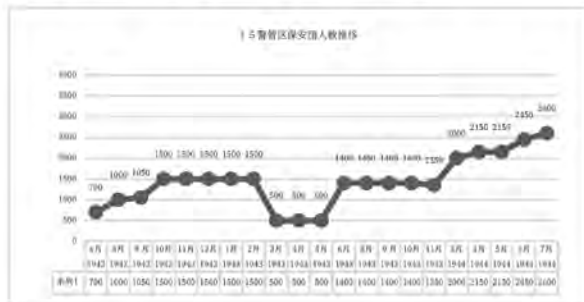
・資料⑱ 舞一特遊撃隊人数推移



・資料⑳ 横四特管区遊撃隊人数推移



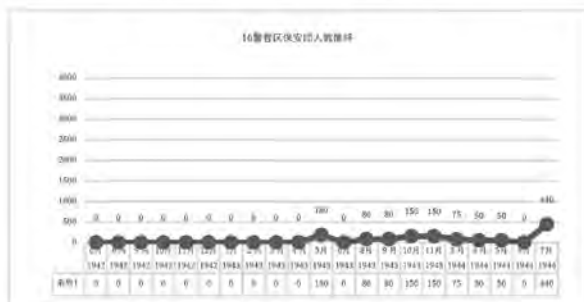
・資料㉑ 15 警管区保安団人数推移



・資料㉒ 海南島全体保安団人数推移



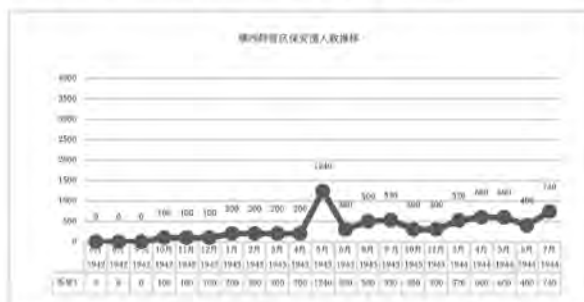
・資料㉓ 16 警管区保安団人数推移



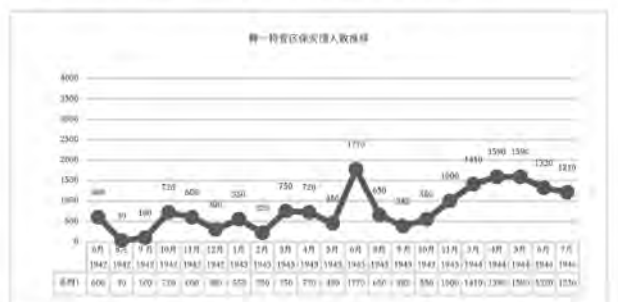
・資料㉔ 佐八特管区保安団人数推移



・資料㉕ 横四特管区保安団人数推移



・資料㉖ 舞一特管区保安団人数推移



・資料③④：JACAR：C14121134400

『海南警備府部隊作戦及警備概要申告覚書』

3. 警備の概要

(ロ) 後方治安迅速確立上我ガ軍ノ
執リツツアル方策
(二) 警察中隊ノ編成配備
各警備隊及特別陸戦隊司令ニ直属
スル各二個ノ警察中隊ヲ(略)一ハ
環島道路警察中隊(以下警察第一中
隊ト稱ス)トシ一ハ地區警察中隊
(以下警察第二中隊ト稱ス)ヲ編成
シ(以下略)

・資料③⑤：JACAR：C14121134400

『海南警備府部隊作戦及警備概要申告
覚書』3. 警備の概要

警察官ハ将来(略)軍ノ一員トシテ
後方治安ノ維持確立ヲ擔當セシム
ベク(以下略)

・資料③⑥：JACAR：C08030525100

『昭和17年11月1日～昭和17年11月30日 海南警備府戦時日誌(4)』

六、警察中隊ノ任務分担
(イ) 環島道路ノ保護修理
(ロ) 環島道路ノ橋梁ノ保護修理
(ハ) 環島道路通信網の確保修理
(略)
(ヘ) 敵匪移動及敵密輸品ノ阻止
遮断
(ト) 環島道路沿道両側三杆以内
地域ノ住民宣撫活動
(チ) 同右地域内ニ於ケル敵匪ノ
削減
(リ) 情報ノ蒐集
(ヌ) 敵匪の誘致と我ガ駐屯部隊
ヲ以テスル之ガ捕捉殲滅ニ協力
(ル) 環島道路上ニ於ケル通行入
検問ノ実施

・資料③⑦：JACAR：C08030527700

『昭和17年11月1日～昭和18年1月31日 海南警備府戦時日誌(4)』

(略)
(ロ) 情報蒐集ニ関スル事項
(一) 敵情蒐集
(二) 一般民情及経済情報蒐集
(三) 密偵ノ指導監督
(四) 帰順工作
(五) 宣撫
(ハ) 宣撫ニ関スル事項
(一) 衛生防疫
(二) 部落ノ清掃整頓
(三) 宣撫物資ノ配給
(略)
五、擔任區域
第一中隊擔任區域ヲ除ク全区域ト
ス
(略)
尚同一地ニ第二中隊關係及第一中
隊關係アル場合ニ於テハ其ノ市街
村落ハ前者ノ其ノ四週三杆圈内ハ
後者ノ擔任トス

・資料③⑧：JACAR：C14121134400

『海南警備府部隊作戦及警備概要
申告覚書』「3.警備の概要」

ハルマ地方
ハルマ地方は、海南島の南東部に位置し、治安良好ナル地帯ニシテ、警察隊ニ擔當セシメ、軍隊ハ奥地未
帰順敵匪残存地帯ニ進駐スルヲ
要ス

治安良好ナル地帯ハ速ニ之ヲ警
察隊ニ擔當セシメ、軍隊ハ奥地未
帰順敵匪残存地帯ニ進駐スルヲ
要ス

・資料③⑨JACAR：C08030525100

『昭和 17 年 11 月 1 日～昭和 17 年 11 月 30 日
海南警備府戦時日誌(4)』

四、列兵ニハ台湾人壯丁團巡查
補及海南島人巡查補(海南警察
訓練所卒業者)ヲ以テ充当ス

四、列兵ニハ台湾人壯丁團巡查
補及海南島人巡查補(海南警察
訓練所卒業者)ヲ以テ充当ス

・資料④⑩JACAR：C08030535400

『昭和 18 年 9 月 1 日～9 月 30 日
海南警備府戦時日誌(5)』

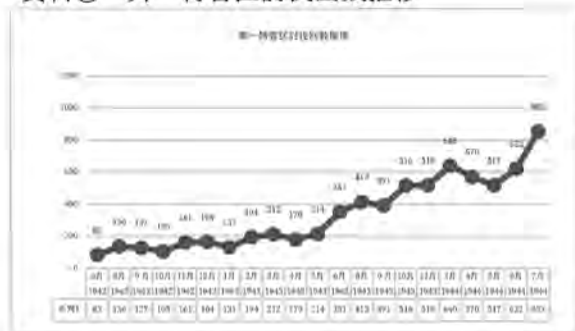
配備標準
一、有力ナル敵部隊ノ活動ナク治安比較的良好ナル地域ニハ警察
隊ヲ單獨駐屯セシメ、任務ヲ代行セシム
二、敵ノ反撃活動ナルカ又ハ敵ノ有力部隊存在シ積極的討伐機
ヲ要スル地域ニハ駐屯部隊ニ加テ、必要ナル部隊ヲ投入セシメ、任務ノ
一部ヲ分擔セシム

配備帰順
(イ)要旨
(1)有力ナル敵部隊ノ活動ナク治安比較的良好ナル地域ニハ警察
隊ヲ單獨駐屯セシメ、任務ヲ代行セシム
(2)敵ノ反撃活動ナルカ又ハ敵ノ有力部隊存在シ積極的討伐機
ヲ要スル地域ニハ駐屯部隊
隊ニ警察隊ヲ編入セシメ、部隊任務ノ一部ヲ分
擔セシム

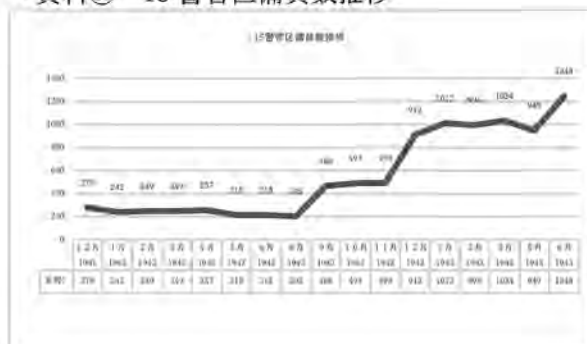
・資料④⑪ 海南島討伐回数推移



・資料④⑫ 舞一特管区討伐回数推移



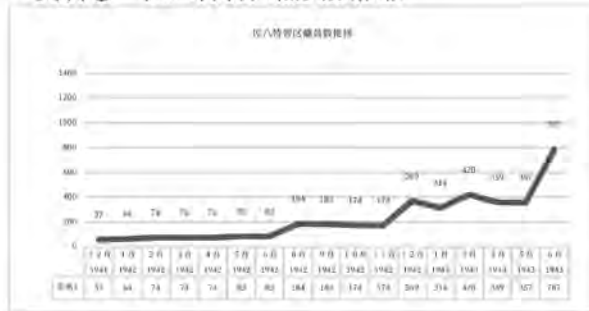
・資料④⑬ 15 警管区備員数推移



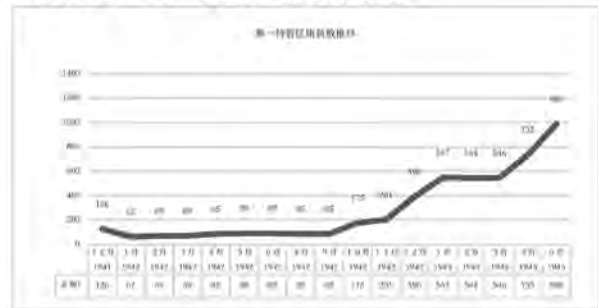
・資料④⑭ 16 警管区備員数推移



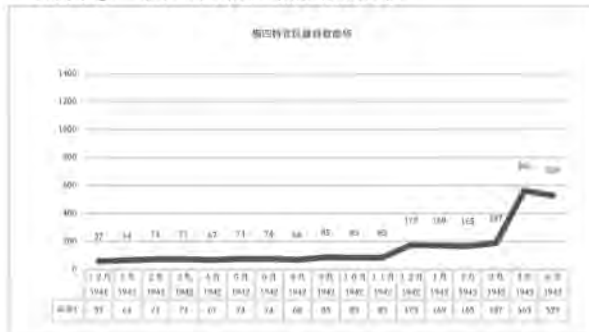
・資料④⑤ 佐八特管区備員数推移



・資料④⑥ 舞一特管区備員数推移



・資料④⑦ 横四特管区備員数推移



・資料④⑧ : JACAR : C08030530200

『昭和18年4月1日～昭和18年
4月30日 海南警備府戦時日誌(3)』

第12師団	第12師団
第13師団	第13師団
第14師団	第14師団
第15師団	第15師団
第16師団	第16師団
第17師団	第17師団
第18師団	第18師団
第19師団	第19師団
第20師団	第20師団
第21師団	第21師団
第22師団	第22師団
第23師団	第23師団
第24師団	第24師団
第25師団	第25師団
第26師団	第26師団
第27師団	第27師団
第28師団	第28師団
第29師団	第29師団
第30師団	第30師団

第12師団	第12師団
第13師団	第13師団
第14師団	第14師団
第15師団	第15師団
第16師団	第16師団
第17師団	第17師団
第18師団	第18師団
第19師団	第19師団
第20師団	第20師団
第21師団	第21師団
第22師団	第22師団
第23師団	第23師団
第24師団	第24師団
第25師団	第25師団
第26師団	第26師団
第27師団	第27師団
第28師団	第28師団
第29師団	第29師団
第30師団	第30師団

清潤隊ハ東郊市分遣隊下士官以下
十名碼頭分遣隊巡查補十名ヲ以テ
林村園馮山村ヲ掃討

・資料④⑨ : JACAR : C08030523700

『昭和17年9月1日～昭和17年9月30日
海南警備府戦時日誌(4)』

「海軍警察訓練所規定」(1942)より抜粋

第12師団 海軍警察訓練所ニ於テ修業スル者ヲ訓練生ト稱ス
第13師団 訓練生ハ左ノ二種ニ別列ス
一 普通科訓練生
二 特別科訓練生
第14師団 特別科訓練生ハ左ノ訓練ニ適合シ警察職員タラントヲ志願
スル者ニ限リ之ヲ行ヒ之ヲ採用ス
一 年齢二十年以上三十才未満ノ日本人
二 志願書實績調査合格ナル者
第15師団 普通科訓練生ハ左ノ訓練ニ適合シ警察職員トシテ見込アル者
一 警察職員又ハ警察訓練所ニ於テ修業スル者ニシテ所屬長ノ推薦アリ、左ノ諸般
ニ適合スル者ノ中ヨリ之ヲ選抜ス
一 如行方止ナル者
一 普通科訓練生ノ訓練ヲ修業シタル日より六月以上實勤ニ服シ
タル者
一 特別科ナル訓練生ヲ有スト部ムル者
第16師団 訓練生ノ修業期間ハ普通科ニ在リテハ三月以上特別科ニ在リテ
ハ三月以上トス但シ時宜ニ出リ多少伸縮セシムルコトヲ得

・資料⑤⑩：JACAR：C08030530400

『昭和18年4月1日～昭和18年4月30日 海南警備府戦時日誌(5)』

「海軍警察訓練所規定」(1943)より抜粋

ニ不従事者
第十三條 普通科訓練生ハ左ノ階級ニ適合シ警察職務ヲランコトヲ志願スル者ヨリ之ヲ採用ス
甲 班
一 年齢満二十歳以上三十歳未満ノ日本人
ニ 志願者ニシテ身軀強健ナル者
三 學力試験ニ合格シ警察職務トシテ見込メル者
四 禁烟以上ノ刑ニ處セラレタルコトナキ者
五 復讐ヲ得ザル家實分散者又ハ破産者ニ非ザル者
乙 班
一 年齢満十七歳以上三十五歳未満ノ海南島人
ニ 反共非日志操堅實ニシテ身軀強健ナル者
三 一丁以上ノ官シ警察職務トシテ見込メル者
第十五條 訓練生ノ修業期間ハ左ノ通トス但シ時宜ニ依リ多少伸縮セムルコトヲ得
一 普通科
甲 班 三月以上
乙 班 六月以上
ニ 特修科
二月以上

・資料⑤⑪：JACAR：C08030532600

『昭和18年5月1日～昭和18年5月31日 海南警備府戦時日誌(7)』

別紙第一六
機密
海南警備府命令第二九號
昭和十八年五月八日
海南警備府司令長官小池四郎
海南警備府命令
海南海軍警察訓練所第二回甲班卒業
生配員區分ヲ左ノ通定ム
一 一丁以上ノ官シ警察職務トシテ見込メル者ハ何レモナ

ナッツ割りから考える 700 万年の人類史

～ チンパンジー、現代の子ども、飛驒の縄文人を比較する ～

岐阜県立関高等学校アントロポス研究会（地域研究部・自然科学部合同チーム）

井上寧々 古田萌恵 神谷杏奈 木村陽向 小森弘貴 岩田悠市 山内虎太郎 永坂知也
熊崎真南風 酒井雄万 柘植幹大 渡邊みき 酒向由芽 山田珠実 小川果枝 竹山翔



上段はチンパンジーの親子（左 ギニア・ボッソウ）とヒトの親子（右 岐阜県・サイエンスワールド）のナッツ割り。
下段は縄文のたたき石・台石（左 飛驒市堂ノ前遺跡）と民具の骨叩き台と木槌（右 飛驒みやがわ考古民俗館）。

目 次

- 1 はじめに
- 2 たたき石と台石の定義
- 3 ヒトの子どもとチンパンジーのナッツ割り行動から考える
- 4 飛驒市宮川下流域におけるたたき石・台石の変遷から考える
- 5 おすびにかえて

1 はじめに

ギニア共和国ボッソウのチンパンジーは、たたき石と台石を使ってアブラヤシの硬い殻を割り中の核を取り出して食べる。ボッソウのチンパンジーは石器を使うが、自ら石器を作ることはない。また、石器使用はすべてのチンパンジーの群れで確認されているわけではなく、現状、ボッソウの群れのみで確認されている⁽¹⁾。

ヒトとチンパンジーの共通先祖からそれぞれが分岐したのは、今から 700 万年前のことと言われる。ヒトはその後、260 万年前（もしくは 330 万年前）にようやく明瞭な石器を製作するようになるが⁽²⁾、それ以前の道具の使用形態についてはまったく不明である。

初期人類はチンパンジーのように自然石を道具として使い、自ら道具を加工することなく進化し続けたのだろうか。あるいは未知の石器がどこかに眠っているのだろうか。

現状、初期人類の道具利用を知る考古学資料はないが、チンパンジー同様、自然石でナッツ割りをしてきた可能性は十分ある⁽³⁾。私たちは初期人類と道具の関わりを考えるため、チンパンジーのナッツ割り動画を繰り返し視聴し関連書籍を読んだ⁽⁴⁾。そして、ヒトの子どものナッツ割り実験を行い、チンパンジーとの比較を試みることにした。なぜ、ヒトの大人ではなく子どもなのかといえ、様々な力を習得していく発達段階にある子どものほうが、チンパンジーとの比較により適していると考えたからである⁽⁵⁾。さらに、チンパンジーの認知発達や親子関係に関心をもったことも理由のひとつである。

私たちはナッツ割り実験を進める一方で、チンパンジー石器と類似した遺物が教科書に掲載されていることを知った。世界史教書（東京書籍）には「石杵・石皿・石臼」、日本史教科書（山川出版社）には「すり石・石皿」の名称で登場し、それぞれ、穀物や木の実をすりつぶした石器と説明されている。加工は施されているが、握った手持ちサイズの石器を使って台状の石の上で作業を行うという点では、チンパンジー石器と共通性がある。

本稿では、チンパンジーや先史人類が使ったこれらの石器を「たたき石」「台石」と総称し、形状や使用痕、用途等を比較し分析を進める。先史人類の石器の事例としては、岐阜県宮川下流域出土の資料を利用することとした。この資料からは、1 万年間（旧石器末～縄文晩期）に及ぶたたき石と台石の変遷を追うことが可能だからである⁽⁶⁾。

今回の研究は、地域研究部と自然科学部霊長類研究班の合同チーム（アントロポス研究会）で実施した。文理双方の視点から、たたき石と台石という、ヒト出現以前にルーツをもつ一組の石器類が人類史の中で果たした役割について総合的に考察することが、今回の研究のねらいのひとつである⁽⁷⁾。

2 たたき石と台石の定義⁽⁸⁾

たたき石とは手のひらサイズの敲打用石器で、一般的に「たたき石」「磨石」「くぼみ石」の用語が併用されている。敲打痕・磨滅痕・くぼみが顕著に残されているかどうかで便宜的名称が使用されており明確な基準はない。本稿では「たたき石」をその総称とする。用途としては「割る」「砕く」「つぶす」「ほぐす」作業を、被加工物には石材・ナッツ類・根茎類・骨肉・顔料・混和剤・繊維を想定し得る。これに対し、作業台に使用されたと考えられる平滑な台状の石器を台石と呼ぶ。日本考古学では類似のものを石皿と呼び習わすが、縁のないものとの用途差は明確ではないので石皿も台石の分類に含めることとする。

3 ヒトの子どもとチンパンジーのナッツ割り行動から考える

(1) チンパンジーのナッツ割り行動

ボッソウのチンパンジーは、両手でたたき石と台石を使い別々の異なる動きをこなす。京都大学霊長類研究所によれば、チンパンジーのナッツ割りは以下の通りである⁽⁹⁾。

- ・自分に合う石を手にとって、慎重に道具を決めることがある。
- ・台が水平になっていないとアブラヤシの種が転がるので、種を何度も置き換えたり台を移動させたりして工夫することがある。
- ・台石の下に別の石をかませ、台石の表面を水平にする工夫をするチンパンジーもいる。
- ・利き手でたたき石をもち、台上の種めがけて振り下ろす。熟練すると1、2回振り下ろすだけで種が割れ核を食べることができる。
- ・5歳までにうまく種割りを学べないと、大人になっても種が割れない。
- ・子どもは大人のしぐさをじっと観察する。大人が子どもに殻割りを教えることはない。子どもが大人の殻割りを邪魔しても怒ることはない。つまり子どもに関与しない。
- ・使用中に台石が割れるとその破片をたたき石に転用することがある。しかしそれ自体を目的に石を割って石器を作ることはない。偶然できたものを利用するだけである。

(2) ヒトの子どもとチンパンジーの比較

私たちは、ヒトの子どものナッツ割りデータ収集のため、2020年2月、子ども対象の科学イベントで以下の実験を行った⁽¹⁰⁾。アブラヤシの代わりに入手が容易なオニグルミを火であぶって割りやすくして使用した。手順は以下の通りである**(写真図版その2)**。

○作業手順

- 1) 参加を呼びかけチンパンジーによるナッツ割りの動画を視聴してもらう。
- 2) 性別・年齢の確認
- 3) 手袋をする。
- 4) たたき石を選ぶ。
- 5) 台石にクルミをのせ、利き手でクルミをたたく。危険なので、もう片方の手でクルミをささえない。使ってよい手は、たたき石を持つ手のみ。
- 6) 親の許可がある場合や支援がある場合は、親の判断でクルミに手を添えてもよい。

当日は、56名分の子どもの実験データを集めることができた。私たちの最大の注目点は親子関係の比較にある。今回、すべての子どもに親が付き添い、子どもの活動を見守った。程度の差はあれ、ヒトの親は子どもを見守り時に手を差し伸べる。言葉を使った支援もする。それに対し、チンパンジーの親は子どもに何かを教えようとしなないし干渉もしない。

次に気づいた点はナッツ割り行動の目的が異なるという点である。チンパンジーにとってナッツ割りは食事の一環である。割りながらその場でつまんで食べる。縄文人も台石とたたき石を使ってナッツ割りを行ったが、調理であって必ずしもそのまま食べるものではなかったと考えられる。では、現代人のこどもにとってはどうか。今回の実験を見る限り、ナッツ割りは紛れもない「遊び」であった。コツを覚えると子どもたちは夢中になってクルミを割る。割ったあともその実を食べようとしない子どもがほとんどで、執拗に殻ごと磨り潰す子どもたちも多くいた。この磨り潰し行為もチンパンジーには見られない⁽¹¹⁾。チンパンジーは殻を割るのみである。磨り潰してしまったら指でつまめなくなる。それに対し縄文人は粉食加工のため、現代の子どもは遊びのためにナッツを磨り潰す。

以上に見た通り、今回は、ナッツ割り行動比較を通じ、親子関係や石器の使用法（磨り潰し行為）において、ヒトとチンパンジーの違いを知ることができた。

(3) 道具を使うチンパンジー、道具を作るヒト

チンパンジーは、石器を組み合わせた協応動作によってナッツを割る。台石の下に別の石を嚙ませ安定を図る。偶然割れた台石をたたき石に転用するが意図的に石器を作ることはない。道具を作らなかった初期人類も、試行錯誤を続けるうちに石器を作るようになったと考えられる。ヒトの出現から道具製作開始までに要した時間は 370～440 万年。気の遠くなるような時間的経過の中で、人類は道具製作技術を習得したことになる。

ヒトの子どもとチンパンジーの比較を行う中で、我々が最も注目した点は大人の関与である。チンパンジーの大人は子どもの行動に干渉しない。ところがヒトの親は見守り支援する。ヒトの場合、より熟達した立場の者が未熟な者に対し情報や技術を伝達するコミュニケーションが発達しているのである⁽¹²⁾。

道具の使用は見よう見まねでできたとしても、道具製作の定着や普及には、熟練者の言語を介した関与が不可欠である。その関与の有無・内容が、道具は使えても作れないチンパンジーや初期人類と、道具を作り出すヒト科ホモ属（及び一部のアウストラロピテクス属）の差異を生み出した。ナッツ割り実験の分析を通じ、私たちは以上のように考えた。

ヒト出現以前の霊長類段階から道具使用が始まっているのであるから、サル類を研究する霊長類学とヒトの物質的痕跡を研究する考古学とを結ぶ分野が必要とされるはずである。私たちは、霊長類学を学ぶと同時に考古学研究も行うことにし、以下に報告する石器研究を着手した。本来であれば、アフリカの旧石器時代から学ぶべきであるが、まずは石器を実際に手に取って観察しようということで、身近な県内資料の検討から始めることにした。チンパンジーと縄文人ではあまりに大きな開きはあるが、縄文人は全時代を通じて、たたき石と台石を使用している。なんらかの成果を期待し、まずは研究を始めることとした。

4 飛騨市宮川下流域におけるたたき石・台石の変遷から考える

本節では、たたき石・台石の 1 万年の系譜を、飛騨市宮川下流域の先史時代遺跡群の資料によりみていきたい。ひとつの河川流域の資料から、旧石器時代末から縄文晩期にかけての変遷を追うことのできる貴重な資料である。飛騨市宮川町（旧吉城郡宮川村）は県最北端の山間地にある。河岸段丘上には旧石器から縄文晩期にいたる遺跡が点在し、開発工事に伴う発掘調査が次々に行われた結果、その概要が把握されるにいたった。以下、調査成果をもとに、たたき石・台石がどのような変遷を遂げたかを記す（写真図版その3・4）。

＜旧石器時代末期＞ 宮ノ前遺跡の旧石器末期包含層から台石とたたき石が出土した。たたき石の平坦面には石材をたたいた際の集中敲打痕が残されている。トウヒ属の球果や木片の大量出土から、遺跡周囲に亜寒帯性針葉樹林が広がっていたことが判明している。

＜縄文時代草創期＞ 宮ノ前遺跡の草創期包含層からは、隆起線文段階、表裏縄文段階の台石とたたき石とがそれぞれ出土している。稜面を利用したたたき石の使用面には細かな敲打痕や磨痕が残されている。早期の特殊磨石の先駆的形態と考えられる。

＜縄文時代早期＞ 宮ノ前遺跡の早期押型文包含層は、沢式段階（前半）と細久保式段階（後半）に分層される。沢式包含層からは、落葉広葉樹の遺存体が大量に出土しており、この時期に亜寒帯性針葉樹林が後退し落葉広葉樹林帯が広がったことがわかる。沢式包含層・細久保式包含層ともに、稜線や平坦面を利用したたたき石、平滑な濃飛流紋岩を利用した台石が出土している。

＜縄文時代前期＞ 堂ノ前遺跡下層の前期中葉（南太閤山 II 式併行期）包含層から、多孔質安山岩製の石皿が出土している。この石材は前期から中期の有縁石皿の石材として多用されている。比較的柔らかな石材で中央部のくぼみを作りやすいこと、多孔質の使用面が堅果類や根茎類の磨り潰しに向いていることが理由であろう。後続の事例としては、宮ノ前遺跡の前期末（諸磯式併行期）包含層上層の多孔質安山岩製の有縁石皿があげられる。

＜縄文時代中期＞ 堂ノ前遺跡（中期中葉）からは多孔質安山岩製の有縁石皿が複数出土した。中には、側縁部に玉抱三叉文の陰刻を有するものもあった。こうした事例は、実具としての石皿の用途とは異なる使われた方がされた可能性を示唆する。このほか、中期後葉の嶋遺跡では、土坑から石棒とともに出土した事例がある。実具であった石皿が祭祀や葬送儀礼に用いられたことを推測し得る⁽¹³⁾。

＜縄文時代後期＞ 後期を迎えると有縁石皿の事例はほぼなくなり、多孔質安山岩へのこだわりも薄れる。後期前葉の金清神社遺跡は、石棒製作址という特異な性格を有するので、出土する台石の中には石棒製作と関わる作業台、あるいは置き砥石であった可能性もある。

＜縄文時代後期・晩期＞ 家ノ下遺跡は出土土器の状況から後期中葉から晩期中葉に限定できる。該期のたたき石の中には刃部を作出したのが見られる。こうした礫器様のたたき石は、石棒・石冠のような石製品の製作など、多様な用途に用いられたと考えられる。

＜たたき石・台石の形態や使用法の変化に関する考察＞

旧石器時代のたたき石・台石の用途に関しては、ナッツ類利用が植生的に有利な南部九州以外、石器製作用と考えるのが一般的である⁽¹⁴⁾。実際、宮ノ前遺跡のたたき石（旧石器末）にも石材をたたいた痕跡が残されていた。旧石器末から縄文初頭の移行期に関しては、気候変動に伴う亜寒帯性樹林の後退と落葉性広葉樹林の拡大が大きく関わる。明らかな摩滅痕を有する縄文草創期・早期のたたき石はナッツ類の利用拡大と関わる現象であろう。

前期を迎えると定住集落が台地上に形成され、台石は大型化し有縁石皿もあらわれる。ナッツ類加工に適した多孔質安山岩の選択も始まる。このような現象は、植物食の利用技術発達と定住生活の本格化と関わるものと考えられる。光沢を帯びるほど使い込まれた石皿の使用面は、ナッツ類を素材とする粉食の盛行を物語る。生活の安定は祭祀の発達を促し、中期には石棒・土偶などの宗教的遺物が増加する。堂ノ前遺跡出土の装飾石皿もその範疇に含まれる。縄文後期の石棒製作址（金清神社遺跡）、晩期の祭祀遺跡（家ノ下遺跡）から出土したたたき石・台石からは、植物食加工以外にも、祭祀系の石製品加工など多様な用途に使用されたことがうかがわれる。

以上、宮川下流域の資料により、更新世から完新世への環境変化、植物食利用と定住化、精神生活の発達などの事情が、石器の形態や用途の変化に関係していることがわかった。

5 むすびにかえて

縄文時代の社会構造や生活技術の変化のスピードは、現代社会の諸事情と比べると随分と緩慢に見える。しかし、ホモ属出現以前の道具の発達史の気の遠くなるほどゆっくりとした歩みから見れば驚異的なスピードとも言える。今回、私たちは、初期人類の道具使用に関し、ヒトの子どもとチンパンジーのナッツ割り行動の比較をもとに考察を加えてみた。

700 万年前の最古の人類出現からホモ属による確実な石器製作が始まるまでには 440 万年を要した。ケニアのトゥルカナ出土の石器が確かな遺物であったとしても、実に 370 万

年かかったこととなる。なぜこのような長い時間が必要だったのか。この件に関し、私たちは仲間同士のコミュニケーションの在り方を指摘した。大人のチンパンジーは子どもの石器使用に関与せず、ヒトの親は積極的に関与しようとする。端的に言えば、その違いがヒトとチンパンジーとの差異をもたらしたと考える。ヒトは、300～400 万年という長い年月をかけ、石器製作とその技術伝達を可能とするコミュニケーションを発達させてきた。他者に関与する共感力や言語能力の発達のためには、相応の時間が必要だったのだろう⁽¹⁵⁾。

その後、更新世から完新世にかけての気候変動と環境適応は、人類文化を加速度的に発展させた。私たちが観察を行った岐阜県宮川下流域のたたき石と台石の変遷からも、その様相をうかがうことができた。

完新世を迎えると、広葉樹林の恵みであるナッツ類加工という作業が加わった。骨や石を敲いて砕くという従来の作業に、ナッツ類の殻を割り実を磨り潰すという新たな動作が加わった経緯は、石器の表面に残る摩滅痕が物語る。ナッツ類に加えて、クズやワラビといった根茎類が食材に加わったことは、前期以降の打製石斧の普及が物語る通りであるし⁽¹⁶⁾、たたき石や台石が根茎類からのデンプン採取に用いられたことは容易に想像できる。

こうした植物食による生活の安定は定住集落の形成を促し、さらには祭祀・儀礼の発達につながった。土器や漆器を美しく飾る赤色顔料の磨り潰しに使われたたたき石、特殊な用途に使われた刻文入り装飾石皿など、たたき石や台石の形態・機能の変化からは、当時の社会の構造的変化が読み取れる。さらに縄文後期・晩期には、飛騨に特徴的な様々な石製品を製作するため、鋭い刃先を付けた礫器のようなたたき石もあらわれるようになった。

おそらくは 700 万年以前のある時期に、アフリカの密林でのナッツ割りに始まったたたき石と台石の組み合わせの使用は、ヒトの進化と拡散、環境適応にともない、形態・素材・用途を変えながら、長期間にわたって人類社会を支えてきた。チンパンジーも使ったたたき石と台石の組み合わせは、素朴であるがゆえに使い勝手がよく、狩猟・採集・遊牧・農耕、様々な生業スタイルの社会でもちいられた。日本や世界の民具類を集めた博物館施設にいけばその実例を多く見出すことができる。粉を引く石臼も、脱穀用の杵と臼も、広い視野でみればみなたたき石と台石の機能を発展させた道具類である。

私たちがお世話になった飛騨みやがわ考古民俗館の展示室には、「ホネタタキダイ（骨叩き台）とキヅチ（木槌）」が展示されていた**（本稿表紙写真）**。鳥獣の肉を骨ごと砕いて食材にするための道具であり戦後まで使われていたと聞く。まさにたたき石と台石の後裔である。チンパンジー石器や縄文石器と類似した原初的な姿かたちや使用法が、近年まで伝えられてきたことに、私たちはとても感動した。

石を使ってたたく作業は、人類以前から近代まで、地球上の各地で繰り返された行為である。今回の研究では、700 万年の人類史の始まり前後と、時間を隔てた縄文 1 万年をとりあげて比較・考察した。通時代的、共時的にヒトと道具の関わりを解き明かすテーマとして、本校では今後も霊長類学・人類学・考古学の領域横断型研究を継続していきたい。特に今回取り上げることができなかった旧石器のたたき石・台石の分析や、各種石器の使用痕比較研究は大きな課題である。

【注釈・引用】

- (1) 松沢哲郎『想像する力』岩波書店 2011
- (2) ケニアのトゥルカナ出土の石器の年代を 330 万年前とする説もあるが異論もある。「誰が作ったのか？ 最古の石器発見で揺らぐ定説」『日経サイエンス』（2017-11）ほか
- (3) スティーヴン・ミズン『心の先史時代』青土社 1998 参照。第三紀鮮新世の「石器」については、かつて「原石器」「曙石器」(eolith) の名称で呼ばれることもあったが、自然破碎の「偽石器」とであると結論付けられた。現状、自然石と判別しがたい未加工石器の存在も含め、研究は進んでいない（角田文衛「西洋通史」『児童百科大辞典』1934 ほか）。
- (4) 「京都大学霊長類研究所チンパンジーアイ 動画集」ウェブサイト
<https://langint.pri.kyoto-u.ac.jp/ai/ja/gallery/videos.html> （掲載許可済）
- (5) 京都大学霊長類研究所『比較認知発達研究部門 研究報告書』（2006-2011）
水野友有氏（中部学院大学准教授・発達心理学）のご教示による。
- (6) 『堂ノ前遺跡発掘調査報告書』岐阜県吉城郡宮川村 1996
『杉原瑞穂遺跡発掘調査報告書』岐阜県吉城郡宮川村 1996
『家ノ下遺跡発掘調査報告書』岐阜県吉城郡宮川村 1997
『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』岐阜県吉城郡宮川村 1998
『塩屋金清神社遺跡 B 地点発掘調査報告書』岐阜県吉城郡宮川村 1999
『宮ノ前遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）』岐阜県吉城郡宮川村 2000
『塩屋金清神社遺跡 A 地点発掘調査報告書』岐阜県吉城郡宮川村 2000
『宮ノ前遺跡（Ⅲ）・塩屋島遺跡発掘調査報告書』岐阜県吉城郡宮川村 2002
『島遺跡（Ⅱ）・塩屋金清神社遺跡（Ⅲ）』岐阜県飛騨市 2012
- (7) 関高校アントロポス研究会は 2016 年に発足し以下のような活動を行っている。
第 1 回アントロポス SEKI シンポジウム「大人になるとはどういうことか」2018.12.16
https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf/h30_sghjoho_55.pdf
第 2 回アントロポス SEKI シンポジウム「自然とヒトの共生を考える」2019.12.15
https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_47.pdf
- (8) 上條信彦「縄文時代石皿・台石類、磨石・敲石類の検討」『人文社会論叢 人文科学篇』弘前大学人文学部 2014
- (9) 京都大学霊長類研究所前掲ウェブサイト
- (10) 『関高 SGH 情報 第 94 号』2019
https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgh/html/pdf//2019/2019_sghjoho_94.pdf
- (11) 大橋岳氏のご教示による。
- (12) 松沢哲郎前掲 2011
- (13) 飛騨市前掲『島遺跡（Ⅱ）・塩屋金清神社遺跡（Ⅲ）』など
- (14) 堤隆氏のご教示による。
- (15) スティーヴン・ミズン前掲 1998
- (16) 藤尾慎一郎「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告 第 48 集』1993

【写真図版 その1】 ヒトの子どもへのナッツ割り実験に使用した石器



左が台石、右がたたき石である。河川敷や林道で採取した自然石を利用した。たたき石の中には、子どもの興味・関心をうかがうため、キューブ状の園芸用レンガ（16・17番）を混ぜてみた。形状や材質から考えて割りにくいのではないかと想定したが、子どもたちはレンガを使って器用に割った。

台石のうち、左下の個体（砂岩製）は、使用過程で破損しふたつに割れた。ボッソウの事例のようなたたき石への転用は起らなかった。

【写真図版 その2】 ヒトの子どもによるナッツ割り実験



左写真： 未就学児には、割りやすい殻付き落花生を用意した。親が付き添って割る様子。ヒトの親は、見守りや声がけも含め、何らかのかたちで子どもの活動に関与しようとする。

右写真： わずかな時間でコツをつかむ小学生。たたき石を水平につかんで真上から打ち下ろすとクルミを逃がすことなく割ることができる。ボッソウにも、このやり方でナッツを割るチンパンジーがいる。



ナッツ割をする際、ヒトの子どもは、片膝立ち、両膝立ち、蹲踞（そんきょ）、尻もちなど様々なスタイルをとる。チンパンジーの場合は必ず尻もちをついた姿勢でナッツ割を行う。それに対し、手で石器を握ってナッツを割る行動は、ヒトもチンパンジーも同様の行動をとっている。

チンパンジー写真提供：京都大学霊長類研究所



左写真： ヒトの子どもによって粉々につぶされたクルミ。殻を割るだけではなく、クルミをつぶすまでたたく行動が見られた（遊び行動）。チンパンジーとも縄文人とも異なるヒトの子どもに特徴的な行動ともいえる。

右写真： ボッソウのチンパンジーも自ら使いやすい石器を選択する。実験に際し、ヒトの子どもにも選択できる環境を用意した。すぐさま石器を選ぶ子ども、じっくり考える子ども、途中で石器を取り換える子ども。ヒトの子どもにみられるこのような行動は、チンパンジーにもみられる。

【写真図版 その3】 宮川下流域におけるたたき石・台石の変遷（旧石器～縄文早期）

宮川下流域の遺跡

飛騨市宮川町（旧吉城郡宮川村）は県最北端に位置し、9割以上を山林が占める（右図：飛騨市提供）。町を北流する宮川沿いに形成された河岸段丘には、旧石器から縄文晩期にいたる遺跡が点在し、90年代以降、開発工事に伴う発掘調査が次々に行われた。

計6遺跡のうち4遺跡の出土品が岐阜県重要文化財に指定され、飛騨みやがわ考古民俗館に展示・収蔵されている。



《旧石器時代》

宮ノ前遺跡の細石刃期包含層から出土。この層からは亜寒帯性針葉樹の球果や葉、木片が検出された。当時の植物相を知るうえで貴重な知見である。たたき石の表面には石材をたたいた痕跡が残る。石器製作のハンマーもしくは作業台に使われたと考えられる。堅果類の乏しい亜寒帯性樹林では、たたき石のおもな用途は石器や骨の加工だったと考えられる。



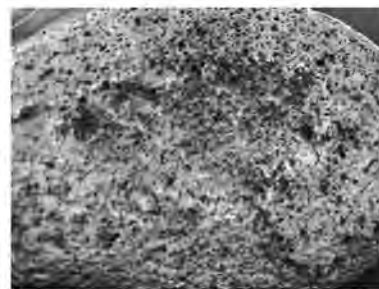
《縄文草創期》

宮ノ前遺跡草創期包含層からは隆起線文土器段階（写真左）、表裏縄文土器段階の台石とたたき石が出土。たたき石には稜線を使用するものが登場（写真右）。敲打痕や摩滅痕が残る。



《縄文早期》

宮ノ前遺跡の早期押型文包含層は沢式と細久保式に分層される。沢式包含層からは礫の縁辺を利用したたたき石が出土（写真左）。細久保式包含層から出土したたたき石には集中敲打痕が見られる（写真右）。



【写真図版 その4】 宮川下流域におけるたたき石・台石の変遷（縄文前期～晩期）

《縄文前期》

堂ノ前遺跡前期中葉包含層出土の板状石皿とたたき石（写真左）と宮ノ前遺跡の前期末包含層出土の有縁石皿（写真右）。使用面に顕著な摩滅痕が残る。



《縄文中期》

堂ノ前遺跡（中期中葉）から多孔質安山岩製の有縁石皿が複数出土した（写真左）。特殊な文様を有するものもある（装飾石皿 写真右）。祭祀の場面で使われたと考えられる。



《縄文後期》

この時期、有縁石皿の事例はなくなり多孔質安山岩へのこだわりも薄れる。後期の石棒製作址・塩屋金清神社遺跡では再び板状台石が増加。金清神社遺跡の台石には石棒製作の作業台や砥石もあると考えられる。



《縄文晩期》

家ノ下遺跡（後期中葉～晩期中葉）では、流紋岩製台石や大型くぼみ石、端部や側縁部に刃部をもつ礫器様たたき石が見られる（写真左右）。石製品製作を含む多様な用途にもちいられたと考えられる。



《たたき石・台石の調査の様子》

今回調査した宮ノ前遺跡、堂ノ前遺跡、塩屋金清神社遺跡、家ノ下遺跡の出土遺物はいずれも岐阜県指定重要文化財である。調査は、飛騨みやがわ考古民俗館に収蔵されている。



【謝 辞】

本研究を行うにあたって、以下の機関・個人より写真資料掲載許可及びご助言をいただいた。

京都大学霊長類研究所 飛騨市教育委員会

湯本貴和氏（京都大学霊長類研究所） 林 美里氏（京都大学霊長類研究所）

高野 智氏（日本モンキーセンター） 三好清超氏（飛騨市教育委員会）

水野友有氏（中部学院大学） 堤 隆氏（浅間縄文ミュージアム）

大橋 岳氏（中部大学）

応永年間、関鍛冶に何が起きたのか

～関鍛冶成立期に関する探究～

岐阜県立関高等学校地域研究部

那須優花 小林未紗 岩井萌々子 赤羽葉那
山内康誠 藤井大輝 小山政亮 田中莉子 藤村彩須果
小原和也 河路康太 渡邊貫太



卸し鉄実験の様子。溶解した鉄塊を平箸で炉底から取り出す。

目 次

1	はじめに	40
2	関鍛冶成立期に関する文献史学の研究	40
3	古町遺跡と重竹遺跡の調査	40
4	たたら吹きによる砂鉄製錬と卸し鉄（おろしがね）精錬の実験	41
	(1) 砂鉄製錬と卸し鉄 (2) 第1回実験 (3) 第2回実験 (4) 鉄素材の活用について	
5	刀剣職人への聞き取り調査	42
	(1) 刀匠（鍛冶師）の仕事 (2) 研師の仕事 (3) 拵えの仕事	
6	ふたつの遺跡をめぐる解釈	42
	(1) 古町遺跡の鍛冶遺構と勢至の鉄座 (2) 重竹遺跡の鍛冶屋敷	
	(3) 古町遺跡・重竹遺跡と「鍛冶座」	
7	まとめにかえて ～関鍛冶成立の背景に関する考察～	43

1 はじめに

美濃国武儀郡鞍智郷関町（岐阜県関市）を本拠とする関鍛冶は、他の刀剣産地、山城・大和・相模・備前より遅れ、応永年間（1394～1428）にようやく成立した。刀剣生産のピークは大永年間から弘治年間（1511～58）のことであり、最盛時には200人を超す職人が技を競った(注1)。本稿の目的は、関鍛冶成立期に注目し、往時の関町の様相を文献史学・考古学・製鉄実験・民族誌の諸分野から検証にすることにある。

関市内では、14～16世紀の鍛冶工房跡（古町遺跡）や、14～17世紀の鍛冶屋敷跡（重竹遺跡）が調査されている。いずれも関鍛冶の成立を探る上で重要な遺跡である。私たちは、ふたつの遺跡の調査成果に学ぶとともに、製鉄実験や刀剣職人の方々への聞き取り調査、文献研究を並行して行い応永年間に焦点を当てた研究を行うことにした。

今回の研究は、関鍛冶の伝統を継ぐ吉田研刀匠とご子息の吉田政也刀匠のご協力によって進めることができた(注2)。伝統技術に関する聞き取りはもちろん製鉄実験に関しても惜しみないご協力をいただいた。なお、刀剣・製鉄の専門用語に関しては添付資料に付した。

2 関鍛冶成立期に関する文献史学の研究

関鍛冶に関する文献史学研究の分野では、元関市史編纂委員の古田憲司氏の論考を軸に研究を進めた(注3)。関鍛冶成立期に関する古田氏の主張の骨子は以下の通りである。

- (1) 応永年間、直江（養老郡養老町）から関への刀工の移住により関鍛冶が成立する。
- (2) 中世の関は刃物の町であると同時に番匠（建築工）の町としても知られていた。番匠の活動の開始も応永年間であり、建築業と刃物産業は当初からセットであった(注4)。
- (3) 関町の支配には、幕府奉公衆として知られる鞍智氏の代官石井氏が関わったが、その支配は緩やかで商工業者の自由な活動が保証されていた。
- (4) 関鍛冶の発展の背景には日明貿易や中世動乱による需要の高まりがあった。
- (5) 主原料である山陰の鉄は、日本海舟運で小浜・敦賀まで運ばれ、近江今津・塩津を経由し湖東の湊から伊勢街道を通して揖斐川・長良川を経て関に運ばれたと考えられる。
- (6) 山陰から運ばれる鉄素材（銑・鋳）は、勢至（養老郡養老町）で包丁鉄や鋼に精錬され関まで運ばれた。手間の省けた鍛冶は鍛造に専念できた。

古田氏の主張のうち、(1)(2)(4)(5)に関しては史料をもとに詳細な検討がされており異論はない。(3)(6)に関しては後述したい。

3 古町遺跡と重竹遺跡の調査 ～中枢の遺跡、周縁の遺跡～

2018・19年、古町遺跡では、鍛冶工房の所在を裏付ける多数の炉跡や柱穴などの遺構とともに、14～16世紀の陶磁器類、羽口・短刀・鍛造剥片・椀形滓・粒状滓・砥石などの鍛冶関連遺物が検出された。重層的に見つかった遺構の状況から、精錬や鍛錬が繰り返し行われた様子がうかがわれる。古町遺跡は関鍛冶の守護神・春日神社に隣接する。関町の中核に位置したと考えられる(注5)。

古町遺跡調査のおよそ30年前、関市街地から離れた重竹遺跡では、土塁と堀で区画された室町～近世初期の鍛冶屋敷跡が見つかった。建物内部からは火床・焼土・木炭・鉄滓・羽口・砥石等が検出された。出土遺物には、14～17世紀初めの陶磁器類、短刀・小柄・鑢・切羽・鉄鑊・槍金具・筭・火打金・鎌・鋏・釘・鋸・留め金具・鉄輪・毛抜き・鉄錘などが含まれる。砥石の中には粗砥から仕上砥まで各種のものがある(注6)。

関町の中核と周縁にそれぞれ位置するふたつの遺跡に関する考察は後述する。

4 たたら吹きによる砂鉄製錬と卸し鉄(おろしがね)精錬の実験

炉跡・火床・焼土・鉄滓といった鍛冶関連の遺構や遺物の理解を深めるために、吉田刀匠の指導の下、砂鉄製錬と卸し鉄の実験を行うことにした。実験は2回に渡って行った。

(1) 砂鉄製錬と卸し鉄

製鉄の工程は、砂鉄を還元し鉄素材をつくる製錬、不純物除去や炭素濃度調整のための精錬(卸し鉄・大鍛冶)、製品に仕上げる鍛造(小鍛冶)とに区別される(注7)。

砂鉄の製錬にはフイゴ(たたら、送風施設)を有する製鉄炉が使われる。たたら製錬(たたら吹き)は古代から近世にかけて発達した製鉄法で、フイゴを用いて鉄を作り出す技法である。炉内に砂鉄と木炭を交互に入れフイゴで燃焼させ、比較的低温で純度の高い鉄を生産する工程を指す。卸し鉄とは、炉内で軟鉄への浸炭もしくは銑鉄からの脱炭を行い炭素濃度を調整して鋼を作る工程を指す。素材の分量が少ない場合には火床で卸し鉄を行う場合もあるが、今回は砂鉄製錬を行う炉を使用して行った。

(2) 第1回実験(2020年6月21日 関高校校庭)(注8)

より高温を必要とする砂鉄製錬を後にまわし、最初に卸し鉄の実験を行った。鉄製の簡易炉を4段に組み上げフイゴ代わりに電動送風機を使用した。木炭が勢いよく燃え上がったから古鉄(江戸期の金具類等)を3キロを投入した。古鉄に炭素が吸着すると融点が下がって半熔融状態になり炉底に少しずつ落ちて堆積する。堆積した鉄塊をテコで掘り出し水に漬けて冷やすと鋤と呼ばれる鉄素材ができる。金槌でたたくと不純物が崩れ、2・5キロほどの鉄素材ができあがった。

次に砂鉄製錬を行った。今回は吉田刀匠が長良川で採取した砂鉄3キロを用いた実験を行った。4段組み簡易炉に木炭を投げ入れて加熱し、炭火が真っ赤になったところで砂鉄を500グラムほど振りかける。炭火が焼き崩れた隙間にさらに新たな木炭を詰め、燃え上がったら砂鉄を再度投げ入れる。この作業を6回繰り返し火勢が収まるのを待つ。テコで掘り出し水に漬けて冷まし金槌で不純物を取り除くと鉄素材500グラムができあがった。

(3) 第2回実験(2020年7月26日 加治田刀剣工房)(注9)

校庭で行った前回とは異なり、今回は加治田刀剣の工房内にある永代炉(据え付け炉)で実験を行った。手法・工程は前回同様である。結果、古鉄3キロを使った卸し鉄では2・2キロの鉄素材を、砂鉄5キロを使った製錬では1キロほどの鉄素材を作り出すことができた。砂鉄のうち2キロ分は本校生徒が長良川で採取した。卸し鉄では原材料の7割、砂鉄製鉄では2割ほどの鉄素材を確保できた。吉田刀匠や山末英嗣教授(立命館大学理工学部、材料工学)のお話では、歩留まりはこの程度かやや良い方だとのことであった。今回は、簡易測定器で炉内の温度を測定し、炉内温度が1000度以上に達したことを確認した。

(4) 鉄素材の活用について

製錬で作られた鉄素材は不均質であり、空孔や不純物が含まれているので再処理が必要である。以下に、再処理に関する吉田研刀匠からの聞き取りを報告する。

卸し鉄でできた鉄素材は、そのまま積み沸かしからの折り返し鍛錬に用いられる。砂鉄を溶かしてできた鋤は、炭素量が「頃合い」であれば通常の鍛錬が可能であるが、炭素濃度が不適切な場合は、ある程度(通常3キロ程度)まとめておいて卸し鉄で再処理を行う。炭素濃度を調整し「頃合い」の材に仕上げて鍛錬にまわすことになる。

「頃合い」とは何か。吉田刀匠に具体的説明を求めると、「数値ではなく身体で覚えるも

の」との説明を受けた。まさに職人仕事を通じて会得される感覚的な表現である。こうした感覚に関し実証科学はいかに対峙するべきか。今回、私たちは研究の方向性すら見出すことができなかった。今後の課題のひとつである(注10)。

5 刀剣職人への聞き取り調査 ～刀剣生産をめぐる民族誌～

関市では刀剣産業に関わる様々な職人が伝統の技を今も継承している。鉄を鍛え、刀に仕上げ、磨き上げ、美しく飾る。このプロセスの基本形は今も受け継がれている。もちろん時間的経緯を重ねる中で変わった部分もあるだろうが、現在の職人仕事との比較を通じ、遺構や遺物の解釈を試みてはどうだろう。そのように考えた私たちは、文化人類学者の青木啓将氏の研究成果に学び、刀剣職人の工房で仕事の実際を直接うかがうことにした(注11)。

(1) 刀匠(鍛冶師)の仕事

たたら製鉄実験に先立って、吉田研刀匠や加藤正文実刀匠の工房を訪ねた。玉鋼の加熱、積み沸かし、折り返し、作り込み、素延べ作り、形成、火造り、センスキ、荒仕上げ、土置き、焼き入れにいたる刀剣鍛錬の諸工程を、道具類や原材料、半製品を実見しながら詳しく学んだ。私たちは、ごく単純に、砥石を用いるのは研師の仕事であろうと考えていたのだが、刀匠も砥石を用いることを知り、刀匠による荒仕上げ工程に関心をもった。

(2) 研師の仕事

伊佐地亨氏及びご子息の昌充氏の工房を訪ねた。大まかに成形された刀を、粗砥に始まり砥石片を和紙に漆付けした砥石を使って仕上げるまでの作業を経て、独特の光沢や刃文を出す諸工程について学んだ。刀剣を武器として使用する場合には粗砥で十分であること、中砥や仕上砥は美術刀に必要であることについても教えていただいた。

(3) 拵えの仕事

鞘師の森隆浩氏、束巻師の遠山康男氏の工房を訪ねた。樋入れ、銘切りの終わった刀身は、研ぎにかけ鉤を取り付けたのち、鞘・柄・鐔などの刀装具をつけて完成する。この間、研師・白銀師・鞘師・塗師・柄巻師が関わる。鞘ひとつとっても、刀剣の反りがそれぞれ異なるので刀身に合わせた鞘を作らねばならない。それぞれの職人の専門性や「こだわり」についても学べた。鞘や柄は有機物であり、遺跡から検出されることはほとんどない。拵えの仕事を学ぶことにより考古学のみでは知り得ない分野の知識を得ることができた。

6 ふたつの遺跡をめぐる解釈

(1) 古町遺跡の鍛冶遺構と勢至の鉄座

今回の製鉄実験により、大量の砂鉄と木炭を使い風を絶やすことなく送って火をおこし続けられ、わずかな量であっても鉄を生産できることを体験できた。実験で使った炉は、移動式簡易炉と永代炉であるが、日本美術刀剣保存協会の古式たたら製錬では、製錬のたびに粘土製の炉を破壊して鉄を取り出している。実験を体験してみて、古町遺跡から炉底や焼土の痕跡、炉底にたまった椀形滓が重層的に検出されている理由がよく分かった。おそらく、炉の構築と稼働、取り壊しと再構築を繰り返した結果であろう。出土陶磁器類の年代観から、鍛冶工房の稼働期間は14世紀末から16世紀にかけてのことと考えられる。

古田憲司氏は、関へ供給された鉄は山陰の鉄であり、勢至の鉄座で精錬された鋼や包丁鉄が持ち込まれたと推定する。しかしながら古町遺跡内から、大量の椀形滓が出土していることから、勢至から持ち運ばれた鋸や銚が古町の炉群で精製された可能性も否定できない。現在進行中の資料整理作業や鉄滓の科学分析の結果が待たれるところである。

（２）重竹遺跡の鍛冶屋敷の性格 ～野鍛冶を兼ねた在郷の刀鍛冶～

鍛冶屋敷を囲む土塁の規模は北辺内径約 39m、南辺内径約 25m、南北間内径約 35m で、面積は約 1,120 m² に達する。屋敷内に礎石建物 3 棟があり、このうち 1 棟から 3 か所の火床が検出された。火床からは焼土・木炭・鉄滓・羽口が出土している。検出された火床を今日の刀剣工房で目にするそれ比べると、用途や外観の基本形を変えていないことがわかる。遺構や遺物の状況からみて、刀鍛冶が行われていたことは間違いないが、多数の鉄製農工具が出土していることから、同時に野鍛冶を兼ねていたとみてよい。出土陶磁器類の年代から、鍛冶屋敷の操業期間は 14 世紀から 17 世紀初頭まで続いたと考えられる。

重竹遺跡の所在地は関市下有知(武儀郡下有知村)であり関町から 3 キロ隔たっている。刀剣の銘文の中に「蜂屋関」「小山関」「坂倉関」とあるように、武儀郡に隣接する加茂郡に関鍛冶を名乗る鍛冶師が工房を構えた事例もある。重竹遺跡の鍛冶屋敷は、野鍛冶を兼ねた在郷の刀鍛冶の実態を知る上で貴重な事例となった。

（３）古町遺跡・重竹遺跡と「鍛冶座」

史料は存在しないが、時代の趨勢から考えて応永期の関鍛冶がすでに組織的な「鍛冶座」を持っていたことは容易に想像できる。関鍛冶には 7 つの流派がありそれぞれの頭領が組織をつくりあげ、16 世紀初頭までには七頭制が成立していたと考えられる。七頭の祖と伝えられる人物の活動期間は、応永・永享期に集中しているので、七頭制の前身となった「鍛冶座」が室町初期には成立していたとみてよい(注 12)。

「鍛冶座」は、鉄素材や製品の流通経路、鉄素材を鍛冶仲間に供給するシステムを統括していたと考えられる。当然、古町遺跡の工房も「鍛冶座」の管理下にあったとみるべきである。運ばれた鉄素材は、古町の「鍛冶座」直営工房で精錬・鍛錬され、さらには重竹のような周縁部に位置する在郷の鍛冶屋敷にも広く供与されたのであろう。周縁を取り込んだ「鍛冶座」のシステムが構築されたことにより量産が可能となり、関は日本最大の刀剣産地へと発展を遂げた。春日神社こそがその「鍛冶座」の本所であり関鍛冶の守護神であった。春日神社に隣接して立地する古町遺跡発掘の意義は大きい。

7 まとめにかえて ～関鍛冶成立の背景に関する考察～

本稿を結ぶにあたって、関鍛冶の歴史を探る中、片時も脳裏を離れなかった問いに関し、私たちなりの考察を述べようと思う。それは、備前のような鉄の一大生産地でもなければ、京都・奈良・鎌倉のような巨大消費地でもない関の地が、応永年間、どうして刀剣の産地として成立できたのか。そしてその形成主体は誰であったのかという問いである。

前者に関しては古田憲司氏の所説に説得力を感じた。古田氏は、①後発地の関で刀剣生産が本格化する室町初期には、流通経済の発展によって鉄生産地や消費地でなくとも刀剣生産地として十分発展し得たこと、②日明貿易や中世動乱を背景に刀剣の需要が伸びたことのふたつを、関町発展の基礎条件として挙げている。その上で、直江鍛冶の関への集団移動が、関鍛冶の成立に寄与したことに言及している。

では、誰が直江鍛冶に関に誘致し受け入れたのか。守護代斎藤氏の関与を指摘する説もあるが(注 13)、古田氏は、応永期の関町が斎藤氏の支配下にはなく、奉公衆鞍智氏の所領であったことをはじめとする様々な疑問点を列挙してこの説を否定する。当然、直江鍛冶の集団移住も商工業者の自主判断によるとみなす。

私たちは古田氏の見解を支持しつつも、鞍智氏が奉公衆であった事実を重視し、武家関

与説を再検討してみた。鞍智氏支配がたとえ緩やかであったにせよ、奉公衆には相応の軍備が必要であるから、鞍智氏が自領への直江鍛冶の集団移住を支援しても不思議ではない。

私たちは、鞍智氏以外の奉公衆として土岐明智氏に着目した。土岐明智氏は美濃守護土岐氏庶流で、美濃国内では土岐郡妻木郷（土岐市）、武儀郡（関市等）、多芸郡（大垣市・養老町）の地頭に任じられた(注 14)。土岐明智氏の所領の中でも、今回注目すべきは多芸郡榛木（養老町飯ノ木）と武儀郡安弘見（関市広見）である。榛木は直江や勢至まで3キロ。同じく広見は長良川を渡れば関町まで4キロ。関鍛冶ゆかりの地に極めて近い。

勢至から関町をめざす場合、牧田川を下り揖斐川に抜けさらに長良川をさかのぼるルートを想定し得る。関町へは長良川支流の津保川・関川を遡上するか、あるいは広見対岸で陸揚げして運ぶか、どちらかのルートが取られたと考えられる。古町遺跡は津保川支流の関川河畔に位置する。関川に関しては関城を囲む惣構として人工的に掘られたとする説があるが(『新修関市史通史編 自然・原始・古代・中世』1996)、鉄素材搬入を目的に、関城築城以前、おそらくは応永年間に整備されたとみなしたほうがよいのではないだろうか。実際、津保川・関川合流点から古町遺跡まではわずか500mほどである。

土岐明智氏の支配下にあった広見は、元来は長講堂領の宇多院（宇陀弘見荘・広見荘とも）であり、応永期の領家は鷹司家であった。鎌倉期には二階堂氏が地頭職を務め、康正2年（1456）には広橋氏の知行地であったことが知られている。伝領の経緯は不明だが、南北朝期から応永年間までは土岐明智領であった(注 15)。広見の地は長良川支流の武儀川流域に広がる肥沃な地で和紙生産が盛んな地であり、和紙を都方面に運ぶ河川交通が発達していた。在京奉公衆の土岐明智氏は、当然、美濃と京都を結ぶ河川交通にも関与していたはずであり、鉄素材搬入にはこの河川のルートが使われた可能性が考えられる。

商工業者の自主的経済活動の一環として直江鍛冶の移住が図られたとしても、直江と関町、双方の隣接地域に所領を持っていた土岐明智氏がその動向と無縁であったとは考え難い。同じく奉公衆であり関町の領主鞍智氏ならばなおさらである。

土岐明智所領のひとつ土岐郡妻木郷には、15世紀中葉から後葉にかけての一定期間のみ稼働した古瀬戸系施釉陶器窯が確認されている。論拠となる文献史料はなく、あくまで推論ではあるが、わずか数十年で操業停止となるこの窯に関し、土岐明智氏との関わりを指摘する三宅唯美氏の見解がある(注 16)。三宅氏の指摘通り、土岐明智氏が土岐郡内で産業振興に努めたとするならば、武儀郡内での刀剣生産に関わっていても不自然ではない。

以上、私たちは、様々な角度からアプローチを加えた上で、関鍛冶成立期の様相に関し古町遺跡と重竹遺跡の解釈を軸に考察を試みた。研究を進めるにあたって、吉田刀匠をはじめとする長年刀鍛冶に携わる職人の方々にお世話になった。刀剣製作の技術は時代とともに変化を遂げたが、「鍛える」「磨く」「飾る」プロセスの基本形に変化はない。この町に、応永年間以来絶えることなく槌音が響き渡っていたことを思う時、伝統のもつ重みや関の地で学ぶ誇りを感じずにはいられない。

末尾になったが、私たちの研究に関わってくださった下記の方々や関係機関に、感謝とともに敬意を表したい。

吉田研氏・政也氏、加藤正文実氏（刀匠） 伊佐地亨氏・昌充氏（研師） 森隆浩氏（鞆師）
遠山康男氏（束巻師） 山末英嗣氏（立命館大学） 関市文化財保護センター 関市商工課

【刀剣・製鉄関連用語】

筭（こうがい）：鞘の差表にさしておく箸状の工芸品。髪をなでつけるために用いる。

小柄（こづか）：鞘の差表（さしおもて）にさす小刀の柄。

切羽（せっぱ）：刀の鐔の表裏がそれぞれ柄と鞘に接する部分に添える薄い金具。

束巻（つかまき）：柄を鮫皮（実際はエイ皮）で包み巻いた部分。

鰭（はばき）：刀身が鞘から抜け落ちないようにするための金具。

製錬・精錬：鉱物を還元し金属を取り出す工程が製錬。さらに純度を高める工程が精錬。

鋤（けら）：たたら吹きによって砂鉄からつくられる海綿状の粗鋼。

のろ：精錬の際に生じる鉱物由来の不純物。

銑（ずく）：たたら吹きで還元して取り出した鉄。3～4%の炭素と少量の珪素・硫黄・燐などの不純物を含み硬くてもろい。

玉鋼（たまはがね）：炭素濃度が低い鋼（1.03～1.7%）の中での最上級品を指す用語。

包丁鉄（ほうちょうてつ）：錬鉄・割鉄・延鉄とも。低炭素（0.08～0.26%）で不純物が少ない。銑（ずく）や歩鋤（ぶけら、玉鋼と銑の中間）を火床で脱炭してつくる。

【補注】

(1) 『新修関市史 刃物産業編』1999

(2) 加治田刀剣 web <https://www.kajita-token.com/>

(3) 補注（1）参照

(4) 応永年間是比较的安定した時代として知られ、全国的に社寺建築・再建が進められた。岐阜県内でも関の番匠が手掛けた下呂市久津八幡神社本殿が知られている。

(5) 『関市遺跡発掘情報』関市文化財保護センター2019、古町遺跡現地説明会資料2018

(6) 『重竹遺跡Ⅰ 岐阜県関市下有知土地改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（関市文化財調査報告5号）1979

(7) 日本刀鍛錬や製鉄に関する理化学的研究に関しては以下の2編の論文を参考にした。

齋藤努・坂本稔・高塚秀治「刀匠が継承する伝統技術の自然科学的調査」「大鍛冶の炉内反応に関する実験的再現」『国立歴史民俗博物館報告 第177集』2012

(8) 「関高FRH情報 第8号」2020 第1回製鉄実験

https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020_frhjoho_08.pdf

(9) 「2020関高FRH情報 第15号」2020 第2回製鉄実験

https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/frh/pdf/joho/r02/2020_frhjoho_15.pdf

(10) 「頃合い」の語にみられるような「職人技」に関しては補注（7）でも検討されている。

(11) 調査にあたっては故・青木啓将氏の『現代日本刀の生成—物質性をめぐる人類学的研究』（言叢社2019）を参照にした。概要は「2019関高SGH情報 第92号」にまとめた。

https://school.gifu-net.ed.jp/seki-hs/sgsh/html/pdf/2019/2019_sghjoho_92.pdf

(12) 補注（1）参照。呼称を示す史料がないので「鍛冶座」とカッコ付き表記とした。

(13) 尾関章「なぜ『関に』なのか あるいはなぜ『九州』からなのか」『関鍛冶の起源をさぐる』1995

(14) 『岐阜県史 通史編中世』1969、『岐阜県史 史料編古代・中世四』1973

(15) 補注（14）を参照。

(16) 三宅唯美「室町幕府奉公衆土岐明智氏の基礎的整理」『織豊大名の研究 8 明智光秀』2019

【写真図版 その1】 第1回製鉄実験 卸し鉄(古鉄の精錬)の様子



簡易炉に木炭を入れ着火



4段に積んだ簡易炉一杯に木炭を詰める



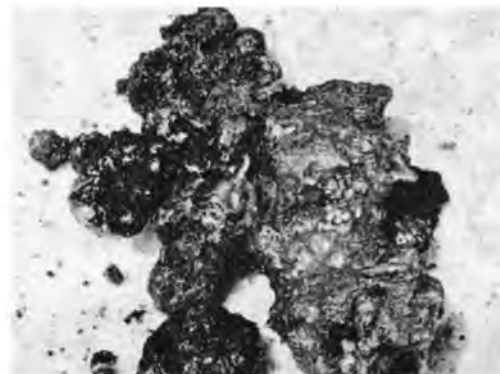
木炭の補充



木炭が燃え落ちたあとの簡易炉底部の状態



炉底から溶解した鉄を取り出す



砂鉄からできた鉄素材

第1回実験(2020年6月21日)は、コロナ禍の下、外部との接触をなるべく少なくするために関高等学校の中庭で実施した。写真で示した卸し鉄による精錬に加え、砂鉄製錬も行った。製鉄には大量の木炭を使用する。アカマツ製の松炭は火付きがよく燃焼性が高いので、たたら吹きによる製錬・精錬、鍛造に適しているといわれる。加治田刀剣では岩手県産アカマツを使用している。木炭を燃えやすくするためナタを使って小さく切る「炭切り」の作業も行った。

【写真図版 その2】 第2回製鉄実験 「せきの未来・社会貢献プロジェクト」



永代炉で砂鉄製錬開始



長良川で採取した砂鉄



炉底から鋳を探す作業



約1キログラムの鋳



実験終了後の山末英嗣氏のセミナー



関市長による「みらプロ」認定式

第2回実験（2020年7月26日）は加治田刀剣工房で永代炉を使って実施した。実験終了後、山末英嗣教授（立命館大学理工学部）によるセミナーを受講し、材料工学の観点からたたら製鉄の仕組みを学んだ。なお、加治田刀剣と関高等学校による今回の取り組み（関鍛冶に関する研究及び普及活動）は、「せきの未来・社会貢献プロジェクト」（略称：みらプロ）のひとつとして、関市より認定された（2020年7月28日）。

【写真図版 その3】 刀剣職人をめぐる民族誌



加治田刀剣を訪問



藤原兼房刀剣鍛錬場を訪問



左：仕上砥の説明 右：「和泉守兼定」の銘を確認（研師伊佐地亨氏宅）



鞘材のハウノキ（鞘師森隆浩氏宅）



柄に巻く鮫皮（束巻師遠山康男氏宅）

文化人類学者の青木啓将氏が、関市の刀剣職人に対し民族誌（ethnography）の手法を用いた研究を進めたことを知った（『現代日本刀の生成 物質性をめぐる人類学的研究』言叢社 2019）。偶然にも青木氏は私たちの高校同窓の先輩であった。ぜひお会いし教えを請いたいと願ったが、すでに逝去されていることを知り愕然とした。今回の研究を行うにあたり、一同、青木氏の著作に大いに啓発されたことを記しておく。

【写真図版 その4】 焼き入れ後の刀剣製作工程



左：茎の美観を整えるヤスリ目 右：タガネを使った銘切 ともに刀匠の仕事



地肌や波紋まで調整する研ぎの仕事



絞皮・紐を巻く束巻の仕事



細かな金工細工を施す鐺師の仕事



刀身を固定する釦を作る白銀師の仕事



刀身を収める鞘作りは鞘師の仕事



鞘に漆を塗り仕上げる塗師の仕事

関市は、鐺師以外の刀匠（鍛冶師）・研師・束巻師・鞘師・塗師・白銀師が集住する日本で唯一の地域であるといわれる。遺跡から検出される炉・火床のような遺構や、短刀・小柄・鐺・筭・釦・砥石・切羽・槍金具・鍛造剥片・鉄滓（椀形滓・粒状滓等）といった遺物が、どのように使われ作られるのか。往時を彷彿とさせる手仕事を間近で観察し、説明を聞くことができた。今後さらに継続する予定である。（写真提供：加治田刀剣）

【写真図版 その5】 古町遺跡の出土遺物



- 左： 出土した砥石類。大半が粗砥で受熱痕跡が残る。砥面がなめらかになり過ぎた粗砥は、新たな砥面を作出するため火中に投じて意図的に割ったと考えられる。
- 右： 鍛造剥片と粒状滓。遺跡から持ち帰った土をふるいにかけて検出したもの。現在の日本刀鍛錬の現場でも、同様の鍛造剥片や粒状滓が生成される。



出土した椀形滓の総重量 160 キロに達する（関市文化財保護センター伊藤聡所長の話）。製錬・精錬・鍛造のどの過程に関わる鉄滓なのか。その謎の解明は、現在進行中の資料整理作業、科学分析により明らかにされるはずである。



古町遺跡付近を流れる関川（写真左）。津保川との合流点付近の様子。この合流点から500mほどさかのぼると古町遺跡にいたる。背後の安桜山には、守護代斎藤氏に仕えた長井氏により関城が築かれた（16世紀前半）。右の写真は関川をはさんで古町遺跡の東側に位置する春日神社鐘楼。江戸期までの神仏習合の名残をとどめる。背後は安桜山。



天満大池築造と喜瀬川形成に関する地理学的検討

井上絢音，竹山悠斗，真野航輔，山野莉緒，高橋侑希，田畑陽彩

(兵庫県立加古川東高等学校自然科学部地学班)



1. はじめに

兵庫県播磨南東部を流れる喜瀬川は、天満大池の南を通り播磨灘に注ぐ長さ約 8km の二級河川である。また、天満大池は古代に造られた記録の残る兵庫県最古のため池である。この付近の河川の流れや地形についてはいくつかの疑問がある。まず、喜瀬川は、印南野台地を北東から南西に流れ、谷底平野を形成する。しかし、天満大池の下流で更新世の段丘面を下刻しながら横切っている。また、天満大池の北東側には、河川が無いのにもかかわらず谷底平野が存在する。そのため、このような地形が侵食・運搬・堆積などの河川作用だけでできたとは思えにくい。すなわち、更新世の段丘を横切るように自然に河川が流れるはずはない。また、天満大池より北東に流れる河川がかつてあったと考えざるを得ない。この点について、高橋（1989）においても河道の人為的な付け替えが示唆されている。そこで、喜瀬川流域と天満大池について現地調査・河床断面図の作成・地質図・古地図を用いた調査をおこない、喜瀬川の形成史と天満大池の関わりを解明することを目的とした。

仮説は次のとおりである。

「天満大池より上流の喜瀬川は、かつて北西に向きをかえて曇川と合流していた。現在の喜瀬川は、人為的なきっかけにより西向きに流れが変わり形成された。」

この仮説を図化すると図 1 のようになる。かつては図 1 の①のような流れであったが人為的な要因により図 1 の②のように流れるようになった。この仮説を証明するために 3 つの検証をおこなった。

2. 研究方法

本研究における具体的な研究方法は、次の通りである。

- ①検証 1—地質図・河床縦断面図を用いて河川がつけ替わったことを検証する
- ②検証 2—古文書や古地図に基づき古地理を復原する
- ③検証 3—昭和 20 年に発生した阿久根台風による喜瀬川の浸水状況から河道の固定について検証する
- ④検証 1～3 を踏まえ天満大池築造と喜瀬川の形成史を考察する

3. 検証 1

（i）地質図の判読

地質図（図 2）において現世層（完新統）の分布をみると、現世層は、喜瀬川上流部では西から東へ伸び、細長い谷底平野を形成している。しかし天満大池付近で向きを変え、北西方向に広がり、曇川と合流している。そのため、河川は北西に向かい、曇川と合流していたと考えられる。しかし現在、喜瀬川は高位段丘層を通り抜けている。そのため、現世（完新世）に谷底平野を形成した後、流れを変え、更新世の段丘面を削るようになるには、侵食・運搬・堆積などの河川作用以外の理由を考える必要がある。

（ii）河床縦断面図の作成

次に形成史解明の手掛かりを得るため、2500 分の 1 国土基本図、地理院地図標高データから、喜瀬川の断面図を作成し、喜瀬川付近の地形面、天満大池の北西の谷底平野標高（旧曇川）を書き加えた（図 3）。横軸は河口からの距離、縦軸は海拔を示している。A・B

の青い線は喜瀬川、C・D の茶色の線は喜瀬川周辺の地形面、E・F の緑の線は旧曇川の縦断面図を示している。旧曇川の縦断面図は、天満大池を原点として描いた。A～F の地点は図 4 の A～F と対応している。この図から、現喜瀬川では、天満大池の直下に遷急点が確認できる。また、天満大池より下流の現喜瀬川では地形面との差が大きくなっている。

以上のことから喜瀬川は、はじめ B・F・E の流れであったが、人為的な開削がきっかけで河川争奪が起き、B・D・C の流れになったと考えられる。そして、下刻が進み、現在の B・D・A の流れになった。遷急点の付近で向きが変わっていることについて、日下（1980）の狭山池の事例によると、かつてため池の余った水を排水するために開削された水路である除げの河床には現在の喜瀬川と同じ遷急点がある³⁾。このことから、喜瀬川についても天満大池の除げとして開削されたと考えられる。

4. 検証 2

次に、古文書や古地図などを用いて検証した。

(i) 天満国安神社所蔵の古文書には「白鳳三年岡大池を築く」と記されている³⁾。このことから岡大池という池が西暦 675 年に築かれたことがわかる。これは日本でも有数の古いため池である。ただし、広さなど詳細は不明である。

(ii) 図 5 は 1666 年の天満大池を描いた絵図面、図 6 はこの図と国土地理院の図を元に復原した図である。これらの図から、この池は現在の天満大池とほとんど同じ大きさになっており、この頃までには川の流れは、北西方向から西方向に変わっていたことが分かる。

(iii) 1764 年の「六分一村明細帳」によると、広さが東西三百五十間(約 630m)、堤長九百三間(約 1625m)、根置拾間(約 18m)、馬踏四間(約 7.2m)となっている⁴⁾。

(iv) 1923 年では天満大池の西側に河原山池と内ヶ池が確認できる。(図 7)

(v) 1967 年では内ヶ池は埋め立てられており、河道は内ヶ池があった位置の南側を通っていた。(図 8)

(vi) 現在では川は天満大池から分かれている。

5. 検証 3

検証 3 では、1945 年 10 月に日本列島に大きな被害を出した、阿久根台風による浸水状況から検証をおこなった。喜瀬川では、上流の長法池が決壊したことをきっかけに、流域で氾濫が発生した。図 9 はその浸水状況を示している。しかしこの図からわかるように、喜瀬川は決壊しても北西方向に流れることはなく、西方向にしか水は流れなかった。このことから、喜瀬川の河道は下刻し、すでに西方向に固定されていることがわかる。

6. 考察

これまでの検証から、喜瀬川の形成史を考察する。(図 10)

①最終氷期以降河川は北東方向から天満大池付近で向きを変え、北西方向に流れ、曇川に合流していた。

②675 年に天満大池の前身となる、岡大池が築造される。このころの川の流れが西方向だったのか北西方向だったのかは定かではない。

③1666 年頃までには天満大池は拡張され、現在と同じ大きさになっており、この頃には既

に川は西方向に流れていた。

④1923年には既に天満大池の南西側に河原山池、内ヶ池が築造されていた。

⑤1967年には既に内ヶ池がなくなり、河道はその南側になっていた。現在では河川は天満大池を経由しなくなっている。

7. 結論

古代には川は北東方向から流れ、天満大池付近で北西に流れを変えて曇川と合流していた。古代から 1666 年までの間に、天満大池の除げとして開削されたことをきっかけに水を西に排水するようになった。そして、現在のように天満大池から分かれて流れるようになったのは 20 世紀以降だと考えられる。このように喜瀬川は天満大池の築造により人為的に河川争奪が起きてできた河川である。

8. 今後の展望

天満大池の西側に草谷断層が通っている。(図 11) この活断層が、今回の喜瀬川形成に影響しているか、また影響しているのだとすればどのような影響なのかについて研究していこうと考えている。また、古代から近世にかけての天満大池の拡張過程は不明であるが、池底より中世の遺物が出土したとも聞いているので、調査を進めれば拡張時期がわかるかもしれない。

謝辞

現地調査では、東播磨コミュニティープランナーズ 安部憲孝様、土山水利組合の方々に
お世話になった。また、加古川土木事務所 河川砂防課・用地第一課、稲美町役場 都市
計画課の方々、播磨町役場 都市計画グループの方々より資料提供していただいた。以上
の方々に謝意を表します。

注

- (1) 高橋学,「第2章 播磨大中遺跡の環境」,『播磨大中遺跡の研究』, pp.75-84, 播磨町教育委員会, (1989)
- (2) 日下雅義,『歴史時代の地形環境』, pp.392, (1980)
- (3) 兵庫県,『兵庫のため池誌第四編』 pp.696, (1984)
- (4) 前掲3
- (5) 田中慎吾,「加古川市付近の地形と地質」,『加古川市史1巻』, pp.102, (1989)
- (6) 内田和子,『日本のため池防災と環境保全』, 海青社, pp.270, (2003)



図1 仮説 ①



②

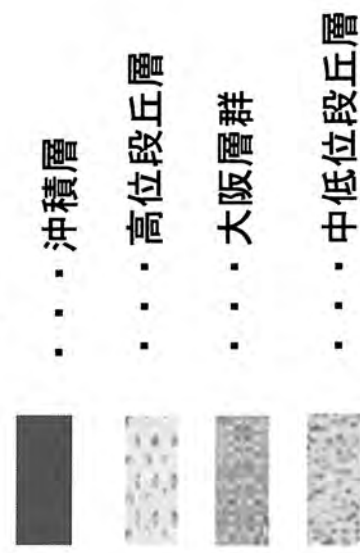
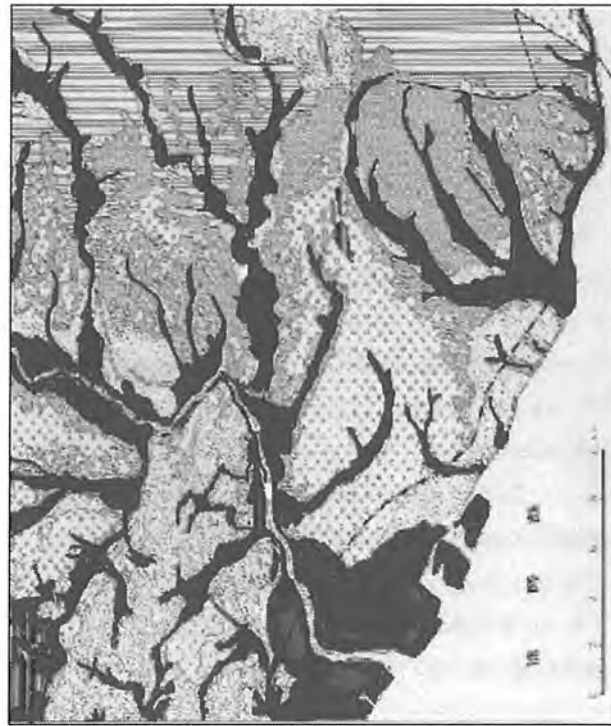
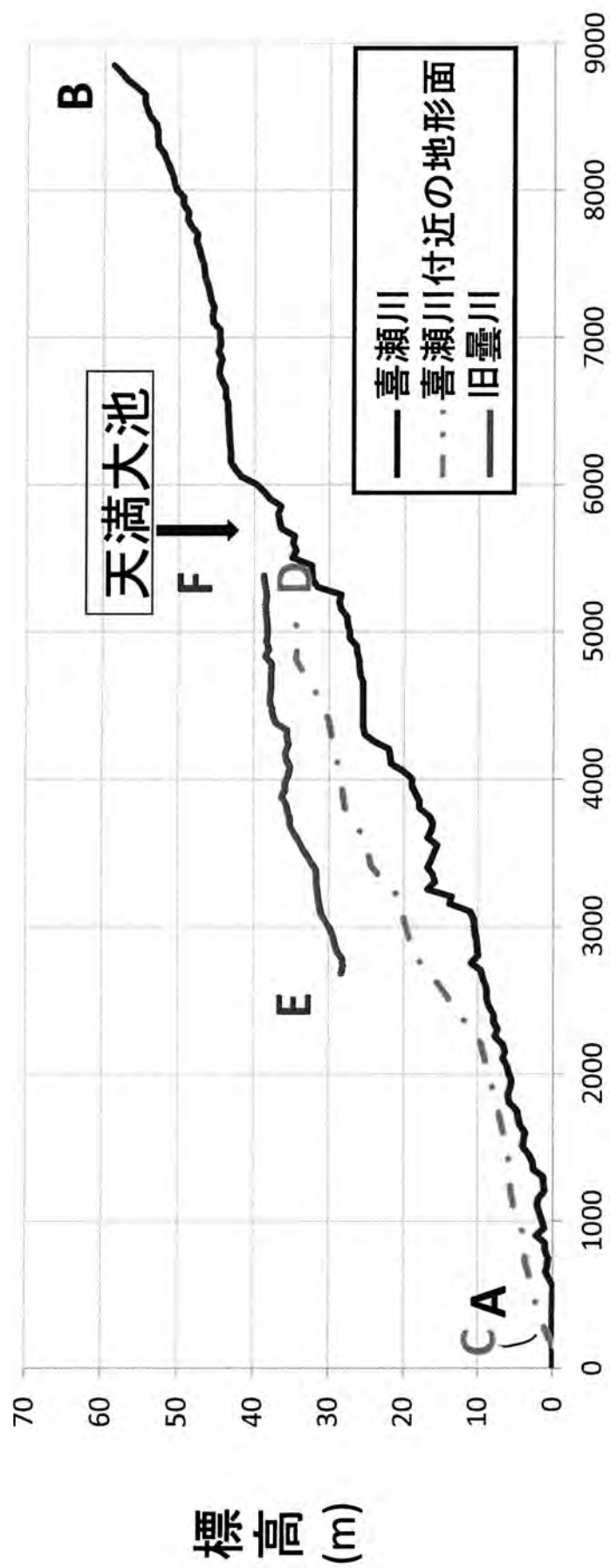


図2 地質図 出所：田中（1989）⁵⁾



河口からの距離 (m)

図3 喜瀬川の河床縦断面図

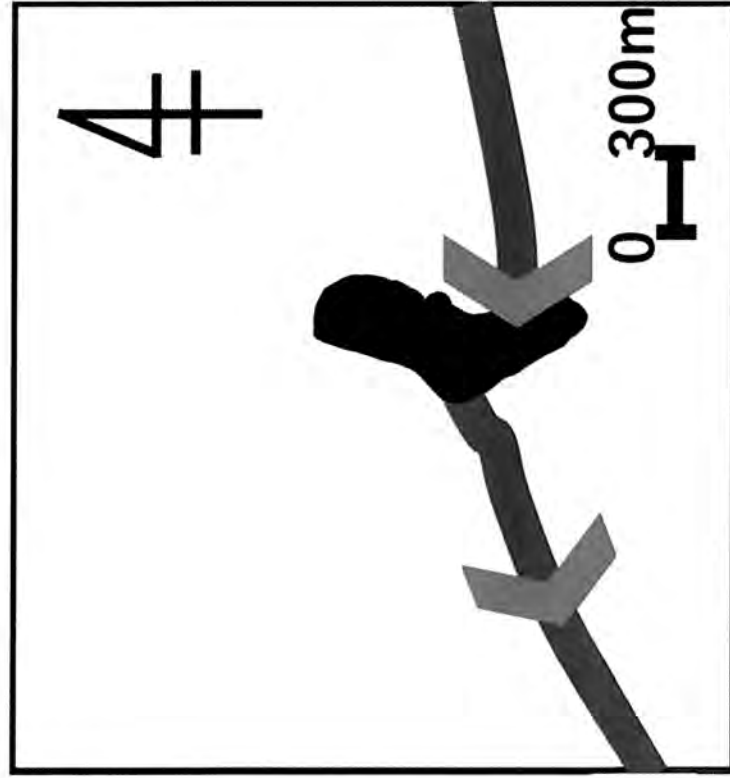
E



図4 河床縦断面図の範囲



図5 絵図面蛸草大池
出所：いなみのため池ミュージアム資料



※国土地理院より

図6 1666年ごろの復原図

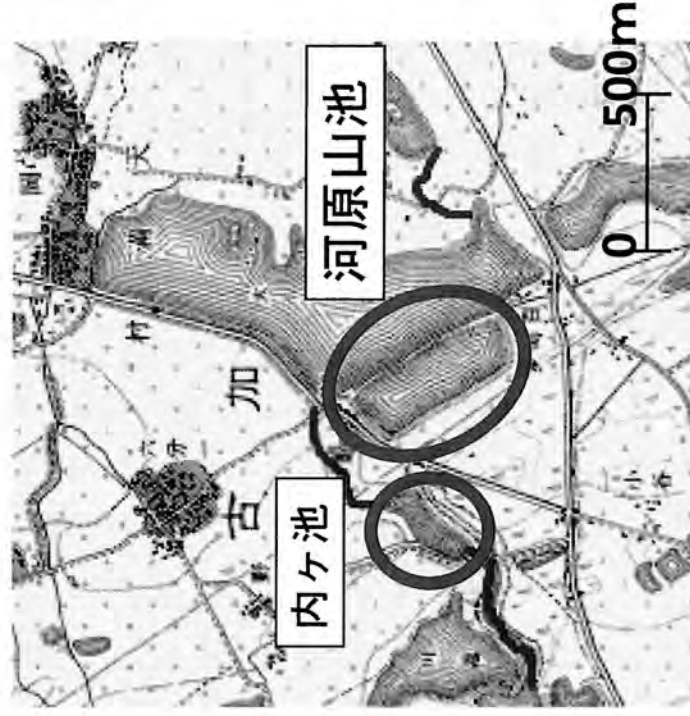


図7 1923年の天満大池



図 8 1967年の天満大池

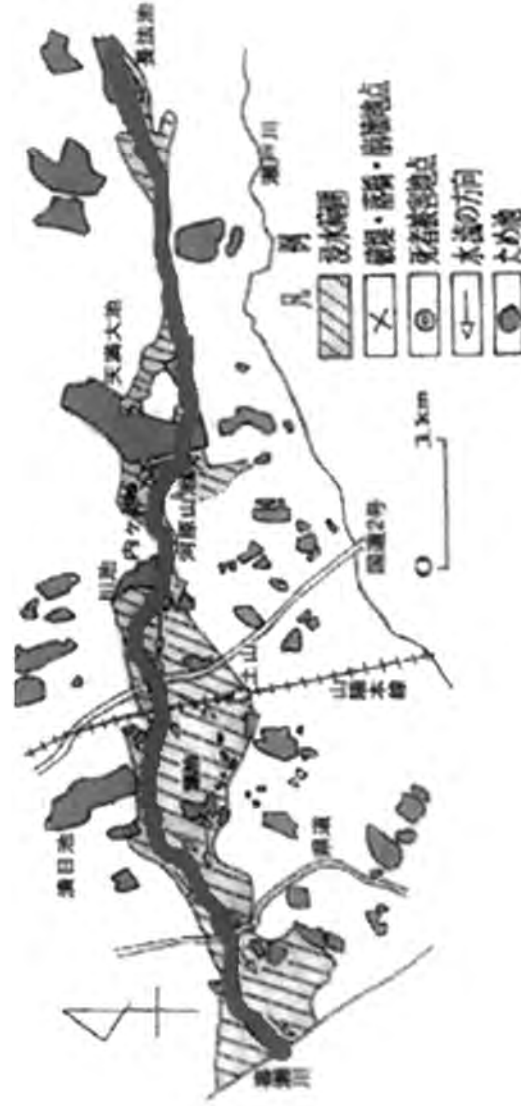


図9 阿久根台風による浸水状況 出所：内田（2003）⁶⁾

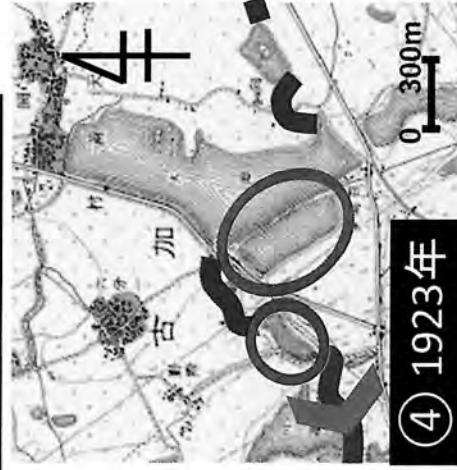
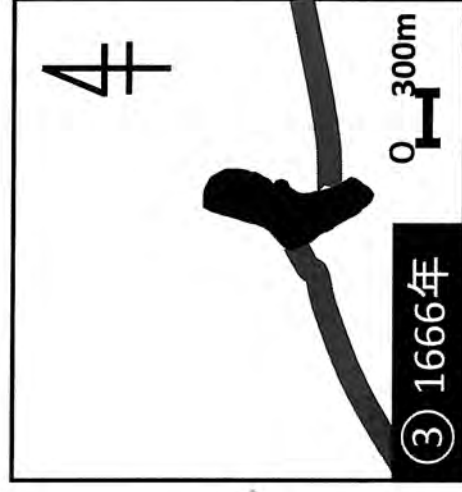
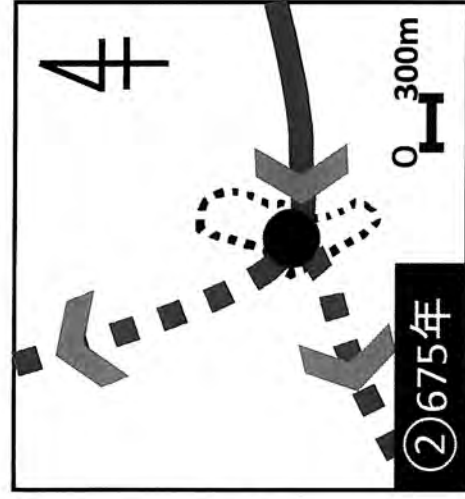
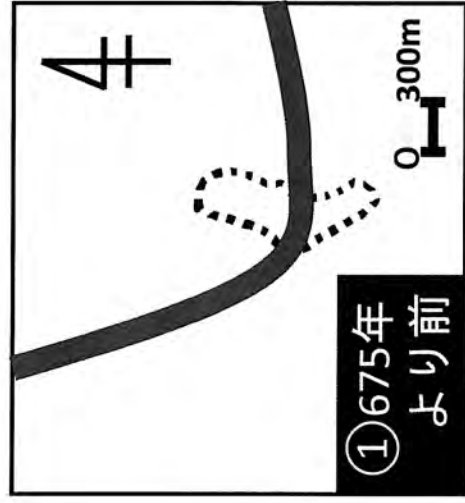


図10 喜瀬川の形成史

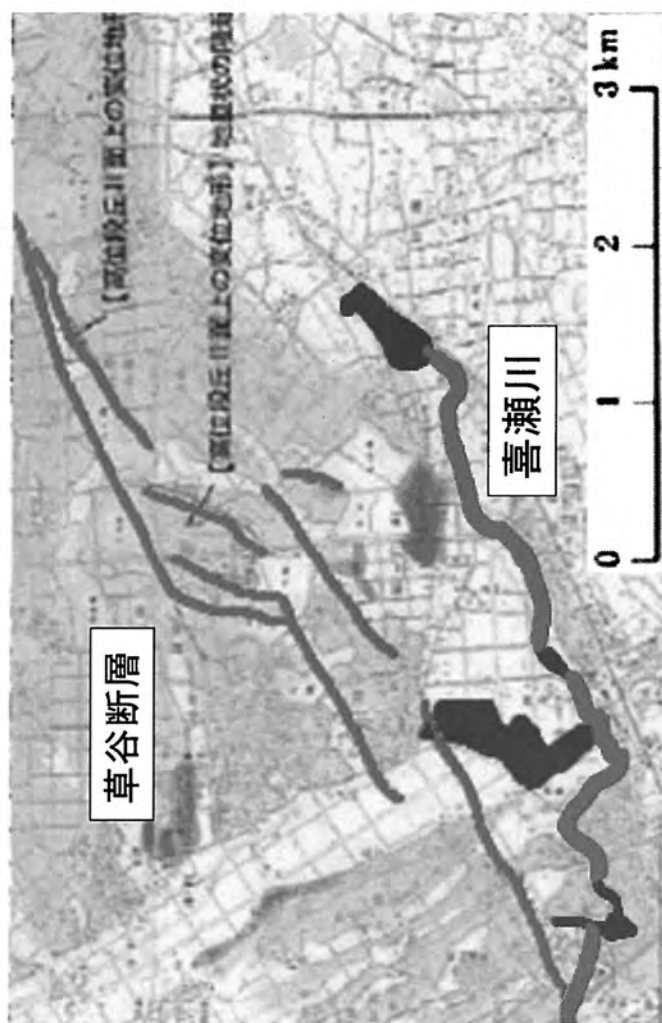


図11 草谷断層



定光寺前遺跡出土の貿易陶磁器からみた中世壱岐の研究

長崎県立壱岐高等学校

東アジア歴史・中国語コース 2年歴史学専攻

吉本 大悟 竹川 柊 富田 悠斗

益中 大輝 大島 透優



1. 研究の目的と方法

壱岐島は、九州西北海上の玄界灘にあり、昔から対馬島とともに、中国・朝鮮半島との対外交渉に重要な役割を果たしてきた。

この島には、深江田原という長崎県内で2番目に広い平野があり、ここには「魏志倭人伝」に記載される弥生時代の「一支国」の王都、原の辻遺跡が見つかっている。この遺跡では更に、古代には木簡5点が出土しており、特に「白玉六口」と書かれたものが注目される。またイスラム青釉陶器、華南産白磁といった珍しい遺物とともに、道路状遺構が確認されていることから、役所の存在が推定されるとともに、この場所が優通駅（ゆうず；現在の壱岐島の南東部に位置する印通寺港）と伊周駅（かす；島の北端に位置する勝本港）を結ぶ、重要な位置にあったと考えられている。

この深江田原平野の西端には興触（こうふれ）遺跡があるが、この周辺は国府につながる地名や、印鑰社とされる興神社があることから、壱岐国府の推定地の一つとなっている。また、ここから北東に300m程度の場所には観城（とじょう）跡がある。ここは平安末期には源義朝を殺害したことで知られる長田壱岐守平忠致が居住していたとする記録があり、また室町時代には松浦党志佐氏の代官真弓氏が居住していたとされている。壱岐には30箇所の中世の城館が存在するが（図1、表1）、そのなかでもこの観城跡は、これまで2次にわたって発掘調査がなされ、城の構造や出土遺物の組成によって、その様相の一端が明らかにされている。このように、長崎県第2位の面積を持つ穀倉地帯である深江田原の北西隅は、古代から中世にかけて、歴史的に重要な場所であったことがわかる。

さて、定光寺前遺跡は、この観城跡から北北東に直線距離300mのところにある。『壱岐名勝図誌』によると、平安時代末、長田忠致と同時期の平清盛により創建されたと言われ、また1472年の波多泰の侵攻により敗北した真弓氏の首を埋葬し、それを弔うために作られた「馬形石」があったとする記録が残るなど、観城跡と強い関連をうかがわせる（図2）。しかしながら、これまで発掘調査がなされたことがなく、考古学的な情報はまったくない。

そこで私たちは、定光寺前遺跡を発掘し、観城跡と比較検討することによって、壱岐の中世の歴史理解を深めていきたいと考えた。調査については、壱岐市にある長崎県埋蔵文化財センターの協力のもと、令和元年7月に実施し、出土遺物の整理作業を行った後、分析考察を行った。

2. 定光寺前遺跡ならびに周辺遺跡の概要

（1）定光寺前遺跡の概要

定光寺前遺跡は壱岐市芦辺町湯岳本村触の、深江田原平野を見下ろす山の中腹に立地する。周辺は谷が入りこんでいるが、現在この小さな谷の最奥部には定光寺という寺院があり、遺跡はその前面に位置する（図3）。これまで発掘調査が行われたことがなく、詳細は不明である。現在定光寺には、昭和49年に長崎県指定文化財に登録された文化財が二件ある。ひとつは木造宝冠釈迦如来坐像で、鎌倉末期から室町初期にかけて、畿内の仏師が制作した本格的仏像である。もう一つは銅製雲版で、「肥前上松浦廣瀬之村瑞宮山慶龍禪寺住持比丘首一」「嘉吉三年」の銘があり、室町期の壱岐と松浦党の交渉を示す在銘作品として貴重である。

（2）周辺の遺跡

定光寺前遺跡の付近には、興触遺跡、観城跡などの遺跡が存在する（図4）。この2つの

遺跡から発掘調査により、どちらも中世の遺構・遺物が見つかっており、定光寺前遺跡と近い時代の遺跡と考えられる。

① 興触遺跡

興触遺跡は深江田原の北西部の外縁に位置しており、遺跡周辺は地名が国府（こう）に通じることや印鑰社とされる興神社があることから国府の有力な推定地とされている。

平成9年度と10年度に長崎県教育委員会により発掘調査が行われ、山際の発掘調査地点では12世紀代と考えられる遺構・遺物が、また平野部の調査地点では律令時代の遺物がややまとまって確認された。しかしながら直接国府に結びつくような資料は出土していない。

以上のことから、古代の主体は平野部周辺にあると想定されること、中世には遺構・遺物、特に貿易陶磁器や石鍋や瓦質鍋などがまとまって出土することから生活空間と考えられること、さらに中世末期には出土量は少ないがベトナム産青磁や粉青沙器、周防系すり鉢などがみられることから観城の影響下にあったことが考えられている。

② 観城跡

『壱岐名勝図誌』によると、観城跡は元寇の後壱岐に入って統治していた松浦党五氏のうち、志佐氏の居城とされている。1472年の波多泰（はたやすし）の壱岐攻略の際、観城は戦場となり、その時焼け落ちたとされている。

平成8年に長崎県教育委員会と芦辺町教育委員会により調査が行われ、その後平成17年に壱岐市教育委員会により調査が行われた。その結果、掘立柱建物跡や溝状遺構などが見つかり、また城の主郭に当たる丘陵部周囲を囲む壕があることを確認した（図5）。出土遺物には14世紀から15世紀の貿易陶磁器、瀬戸などの国産陶器、土師器、金属器がある。遺物の量及び出土状況から遺跡の主体は14世紀から15世紀であるが、城郭としての利用は17世紀まで続いたと考えられている。壕跡は主郭の南東側で見つっており、山になっており攻めるのが難しい北および西の防御よりも、平野で攻めやすい東および南の防御を固くしていたと考えられる。出土遺物からは城主が東アジア全般にわたる活発な交易を行っていたことがうかがわれるが、特に長崎県教育委員会が実施した発掘調査の報告書においては、中世貿易陶磁器の時期ごとの数量の変化が示されており（長崎県教育委員会1997）、本研究と関連して重要な成果である。

3. 定光寺前遺跡発掘調査の概要

今回調査した定光寺前遺跡は、壱岐市芦辺町湯岳本村触にある。調査期間は令和元年7月22日、25日、26日の3日間で、トレンチを2ヶ所設定しそれぞれを1区、2区とした（図6）。1区は山門前の平坦地中央やや西よりに、2区は定光寺の位置する谷の西側斜面の平坦地に設定した。発掘調査は長崎県埋蔵文化財センター職員の指導のもと壱岐高校の東アジア歴史・中国語コースの1年生（現2年生）と2年生（現3年生）が行った。

（1）1区について

1区は2m×5m（10㎡）で、作業は表土（1、2層）を取り除いたのち3層以下をねじり鎌で丁寧に掘削し、最終的に約30cm掘り下げた。層序は図7の通りである。

（2）2区について

2区は2m×5m（10㎡）で、表土を取り除いたあとにねじり鎌で丁寧に掘削し、全体的に40cm掘り下げた。その後中世の遺物包含層の有無を確認するため、調査区の北端を表土からおおよそ90cmの深さまで掘削した。遺物は江戸時代の染付や中世の土師器、貿易陶磁器が

多く出土している。層序は図8の通りである。

4. 定光寺前遺跡出土の輸入陶磁器

私たちは壱岐の中世、特に深江田原周辺の理解を深めるために、定光寺前遺跡出土の輸入陶磁器を用いて、靉城跡との比較を行うこととした。以下にはこれらのうち代表的なもの42点を図示する(図9～11、表2)。なお、中世前期の資料は大宰府編年(太宰府市教育委員会 2000)を、中世後期の白磁は森田編年(森田 1982)、青磁は上田編年(上田 1982)を用いて分類・時期決定を行なった。また朝鮮陶磁については福岡大学古澤義久氏、釜山博物館安海成氏のご指導を得た。

1～17は白磁である。1は白磁碗Ⅷ類である。内面は釉を輪状に掻き取る。白磁皿Ⅲ類の可能性も残る。2～4は白磁碗のⅣ類である。2, 3は口縁部である。2の復元口径は20.2cm、3の復元口径は14.6cmを測る。4は底部である。外面には釉がかかっていない。肉厚な底部で内面見込に沈線状の段がある。5は白磁碗Ⅴ-1類の口縁部である。口縁端部は丸くおさめる。6は白磁碗Ⅶの胴部である。内面見込に草花文様が施される。7は白磁碗の口縁部である。Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ類のいずれかと思われる。口縁は直行し、端部を丸くおさめる。8は白磁碗Ⅷ類の口縁部である。口縁端部は外側に屈折する。9は白磁碗Ⅸ類の口縁部で、口縁端部の釉を掻き取り口禿げとする。10, 11は白磁皿の口縁部で、10はⅥ類と思われる。口縁は直行する。体部内面に沈線状の段がある。11はⅤ類で口縁が外反する。12は白磁皿Ⅸ-1類の底部である。平底で底部まで施釉する。見込と体部の境に段を有する。13は白磁皿Ⅸ-2類の口縁部である。口縁端部の釉を掻き取り口禿げとする。外面体部下位には施釉されていない。14, 15は白磁皿Ⅸ類の口縁部である。口縁端部の釉を掻き取り口禿げとしている。16は森田編年D群の白磁碗の口縁部である。釉は黄色味を帯び、口縁は大きく外反する。17は森田編年E-4類の白磁の菊皿である。白色に近い釉で、胎土は緻密である。

18～33は青磁である。18は龍泉碗Ⅰ類の胴部である。19は龍泉碗Ⅰ-2類の底部である。底部付近の内側に細い線のような模様がある。20は同安碗Ⅰ-1類の胴部である。見込みには櫛目が見られる。21～27は龍泉碗Ⅱ類である。21～25は口縁部である。中でも23, 24は鎬蓮弁の特徴がみられる。26は龍泉碗Ⅱ類の胴部である。27は龍泉碗Ⅱ-b類の底部である。28は龍泉碗Ⅲ類の底部である。29は上田編年B類の底部である。釉薬が一部剥がれている。30は同安皿Ⅰ類の底部である。31は同安皿Ⅰ-b類の口縁部である。内面に篋による文様がある。32は龍泉坏Ⅲ類の口縁部である。33は龍泉坏Ⅲ-1類の口縁部である。釉薬が厚く塗られている。

34は陶器盤Ⅰ-2b類の底部である。端部には粘土の粗雑な貼り付けの痕跡が明瞭にみられる。内面は鉄絵を施したのち全面に施釉する。外面は残存部において施釉はみられない。胎土は、0.5～1mm程度の黒色及び乳白色の砂粒を多く含み粗雑である。35は染付碗の口縁部で明青花と思われる。

36～41は朝鮮半島産の陶磁器で36, 37は高麗無釉陶器である。36は硬質で外面に横方向の工具痕、内面に強い回転ナデ痕が見られる。37は軟質で回転ナデ痕が見られる。38～40は高麗青磁である。38は八角皿の底部で、碁笥底状を呈する。内面見込に目跡が残る。外面の底部付近には施釉しない。39は碗の底部であると思われる。内面見込に二重の圈線が巡る。外面高台付近から高台畳付には釉がかからないが高台内部に釉が見られる。40は

碗の体部で象嵌が見られる。41 は粉青沙器の碗の口縁部である。単位の小さなスタンプによる印花粉青で内外面に象嵌を施している。42 は李朝陶器と思われる。高台は欠損しているが高台内部まで釉がかかる。釉の表面には気泡が多く見られる。

5. 分析（観城跡との比較）と考察

私たちは、観城跡の発掘調査報告書（長崎県教育委員会 1997）に示される棒グラフに倣い、時期ごとの貿易陶磁器の数量の変化を調べてみた。また、貿易陶磁器を白磁、青磁、朝鮮陶磁の三種類に分け、それぞれの時期の出土点数を調べ、そしてそれを観城跡出土のものと比べてみた（図 12）。時期区分については、観城跡と比較するために宮崎貴夫氏の時期区分（宮崎 1994）を用いている。

なお、表 2 に明示するように、私たちは現代の層から出土した遺物等もあわせて用いている。このため考古資料の等級にすると「第二等遺物」となるものとする（小野山 1985）。それでも本研究においては、資料の数量を確保することが観城跡との比較のために有効だと考えるため、資料の限界を認識しつつ、あえてこのような扱いをした。

図 12 を用いた比較の結果、私たちは次の①から③の時期について、貿易陶磁器の数量と種類の変化において、特徴が現れていることを読み取り、それぞれについて考察を行った。

① 2 期から 3b 期（11 世紀後半～13 世紀）：定光寺前遺跡では、この時期に貿易陶磁器の出土量が非常に多い。これに対して、観城跡ではこの時期の貿易陶磁器は少ない。また定光寺前遺跡では、2 期に主体を占める白磁の割合が 3a 期には激減し、3b 期には青磁が 4 分の 3 以上を占めるようになる。

定光寺前遺跡では、2 期から 3b 期にかけて貿易陶磁器が多く見られるが、この遺跡が谷の奥まった場所にあるという立地条件を考え合わせて、この付近には貿易陶磁器を多く入手し得る集団がいたものと判断される。また 2 期から 3b 期にかけて、遺物量に大きな増減は見られないことから、この周辺では、例えば平家の没落と鎌倉幕府の成立といった時代の変化に影響を受けたとしても、土地の利用は継続されたものと判断される。

このことは、この時期の白磁と青磁の割合からも裏付けられる。博多貿易では、2 期までは白磁が主体であったものが、3a 期には青磁が主体となり、3b 期にはさらにその比率を増すことが、博多遺跡群での調査を含め各地の事例で明らかにされているが、定光寺前遺跡においても白磁と青磁の割合において、同様の変化が見て取れるからである。

他方、観城跡では 2 期から 3b 期にかけて貿易陶磁器の出土は見られるものの、遺物の量は少ない。特に 3a 期は観城跡に長田壱岐守平忠政、忠致親子が居住したという記録が残る時代であるが、観城跡の発掘調査面積 15,000 m²において、貿易陶磁器の出土は 13 点のみであり、定光寺前遺跡の調査面積 20 m²との比較に拠らないでも、貿易陶磁器の出土量は際立って少ない。

定光寺および観城において、どちらも平家に関係する伝承が残されていること、また平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけて、定光寺前遺跡において貿易陶磁器が多く出土し、逆に観城跡ではこの時期の貿易陶磁器が非常に少ないことを考え合わせて、私たちは、定光寺前遺跡の周辺こそ、後世に平家に関連すると伝承されるような集団がいた場所ではないかと考えた（仮説 A）。

② 4 期（14 世紀～15 世紀前半）：定光寺前遺跡では、3b 期から 4 期にかけて遺物の量が減少するのに対して、観城跡ではこの時期に遺物量が大幅に増加する。また定光寺前遺跡

では4期になると中国産の白磁、青磁に加え、初めて朝鮮陶磁が登場する。

宮崎氏は長崎県の4期の特徴として貿易陶磁器の出土量が減る傾向を指摘している（宮崎 1994）。定光寺前遺跡においても、貿易陶磁器の出土量は著しく減少しており、長崎県の本土部の遺跡で見られる状況に一致している。これに対して、観城跡では、この時期に232点もの貿易陶磁器が出土しており、これは定光寺前遺跡および長崎県の本土部の遺跡の状況と明確に異なる。

観城跡では、出土した貿易陶磁器のうち26.4%を朝鮮陶磁が占めているが、このことは松浦党志佐氏の朝鮮半島との、海賊行為や正式な交易などの盛んな交流を表すものであると考えられている。これに対し定光寺前遺跡でも、4期に初めて朝鮮陶磁が出土し（図11-38）、5a期には朝鮮陶磁（図11-40, 41）のみが出土している。このことは、この時期における観城と定光寺の結びつきを示すものと思われる。しかし同時に、『壱岐名勝図誌』には、定光寺は1350年以降に成立した老松山壱岐安国寺の末寺であるという記載があり、このこととの関係は不明である。

③ 4期～5b期（14世紀～17世紀前半）：定光寺前遺跡、観城跡ともに4期～5b期にかけて貿易陶磁器の量が減少する。

前述のように、5a期に該当する1472年には、肥前上松浦の岸岳城主の波多泰が壱岐を急襲し、全島を領有するという事件がある。この時、観城は攻撃を受け炎上したとされているが、発掘調査によってこの事件の痕跡の可能性のある焼土が確認されている。この後、波多泰は現在の壱岐市郷ノ浦町にある亀丘城を修築して、入城したとする記録がある。

私たちは、この記録と、定光寺前遺跡、観城跡の両遺跡で4期から5b期にかけての貿易陶磁器の出土量が減少することから、波多泰が亀丘城に拠点を築いてから壱岐の中心が郷ノ浦町周辺に移り、それまで壱岐において歴史的に重要な場所であった深江田原が次第に衰退していったのではないかと考えた（仮説B）。

さらに私たちは、中上史行氏の著作の中に、定光寺の本山、壱岐安国寺の当初の領地三千石が、江戸時代には百石となったという記載（中上 1995）を見つけ、この時期の安国寺の領地の減少も深江田原周辺の衰退を表しているのではないかと考えた（仮説C）。

6. まとめと展望

以上のように定光寺前遺跡出土の貿易陶磁器と、観城跡出土の貿易陶磁器の時期ごとの変化を比べることによって、私たちは壱岐島の深江田原を中心とした中世の歴史について、A～Cの三つの仮説を立てることができた。しかしながらこの仮説は、令和元年度の発掘調査で得られた、限られた資料から考えたものである。展望として、これらの仮説を明らかにしていくための方法を挙げる。

仮説Aについては定光寺前遺跡において発掘調査を継続し、遺物包含層の下からこの時代の柱の跡などの遺構を見つけ、その変遷が把握されれば、仮説はより確からしくなる。

仮説Bについては亀丘城で発掘調査を行い、波多泰が修築したとする痕跡、および15世紀末以後の遺物量が増えていることが確認されれば、仮説はより確からしくなる。

仮説Cについては壱岐安国寺の領地についての文献資料を調べ、波多泰が亀丘城に入城した後に安国寺の領地が減少したという記載が見つければ、仮説はより確からしくなる。

今後こうした方法でさらに壱岐の中世について追究していきたい。

表1 彦岐中世城館、古戦場、
本研究関連遺跡一覧

番号	種類	名前
1	城跡	大岳城跡
2	城跡	イチオジロウ城跡
3	城跡	本浦城跡
4	城跡	地命寺城跡
5	城跡	右城城跡
6	城跡	勝本城跡
7	城跡	高津城跡
8	城跡	風早城跡
9	城跡	庄ノ三郎城跡
10	城跡	加賀城跡
11	城跡	鳥城跡
12	古戦場	文永の役新城古戦場
13	城跡	陣屋山城跡
14	城跡	嶽城跡
15	古戦場	弘安の役瀬戸浦古戦場
16	城跡	城の辻跡
17	城跡	生池城跡
18	城跡	鶴翔城跡
19	城跡	群城跡
20	城跡	葛城跡
21	城跡	半城城跡
22	城跡	白石城跡
23	遺跡	定光寺前遺跡
24	城跡	観城跡
25	遺跡	興触遺跡
26	城跡	鉢形城跡
27	城跡	阿城跡
28	城跡	亀丘城跡
29	城跡	大屋城跡
30	城跡	筒城跡
31	城跡	石田城跡
32	城跡	浦山城跡
33	城跡	鋸崎城跡
34	城跡	初瀬城跡

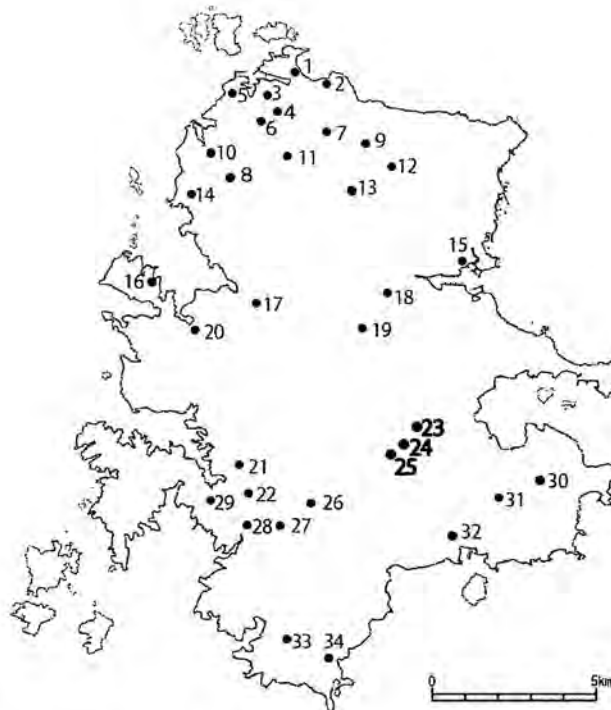


図1 彦岐中世城館、古戦場、本研究関連遺跡分布図



図2-1 定光寺周辺絵図（彦岐名勝図誌より転載、一部加筆）



図2-2 定光寺周辺絵図（図2-1 枠部分拡大、一部加筆）
赤枠①・②は令和元年度発掘調査区推定位置（①：1区、②：2区）



図3 定光寺前遺跡周辺航空写真



図4 定光寺前遺跡周辺遺跡図



図5 観城跡平成8年度調査空撮写真
(長崎県教育委員会提供)

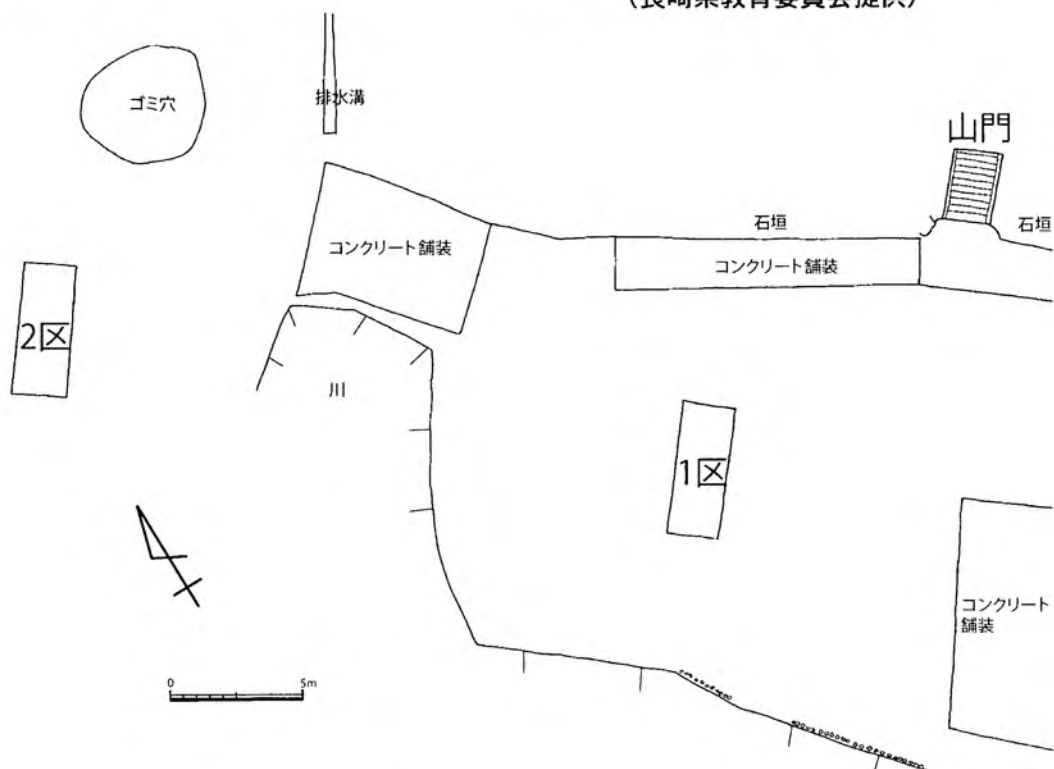
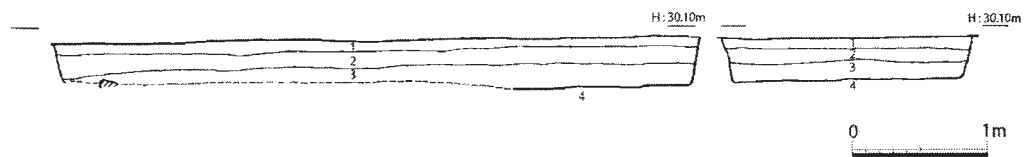


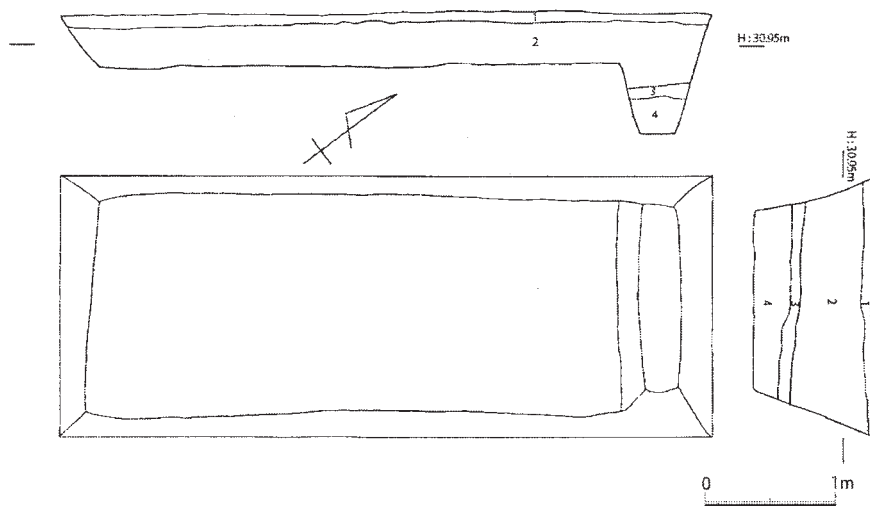
図6 令和元年度定光寺前遺跡 発掘調査区配置図



1 区層序

- 第1層 砂利整地層
- 第2層 暗褐色硬質土（中世～現代）ビニールを含む。
- 第3層 暗黒褐色硬質土 しまり強い。中世遺物包含層 遺物が多く、下部に比較的大きな破片が多い。また下層周辺に平たい石が多くみられる。人為的なものか？
- 第4層 暗灰色粘質土 しまり強い。粘性強い。鉄分が沈着する。3層に比べ遺物量が少ない。

図7 令和元年度定光寺前遺跡発掘調査1区土層断面図



2 区層序

- 第1層 表土。黄褐色風化岩を含む褐色粘質土。しまり弱い。粘性弱い。
- 第2層 暗褐色粘質土。しまり強い。粘性弱い。2cmから3cmの黄褐色の礫を多く含む。近世から中世の遺物を含む。
- 第3層 にぶい黄褐色粘質土。黄灰色の風化岩を密に含む。しまり・粘性やや強い。
- 第4層 にぶい黄褐色粘質土。しまり強い。粘性やや強い。1cm大の風化岩を含む、有機物を多く含む。中世の遺物を含む。

図8 令和元年度定光寺前遺跡発掘調査2区土層断面・平面図

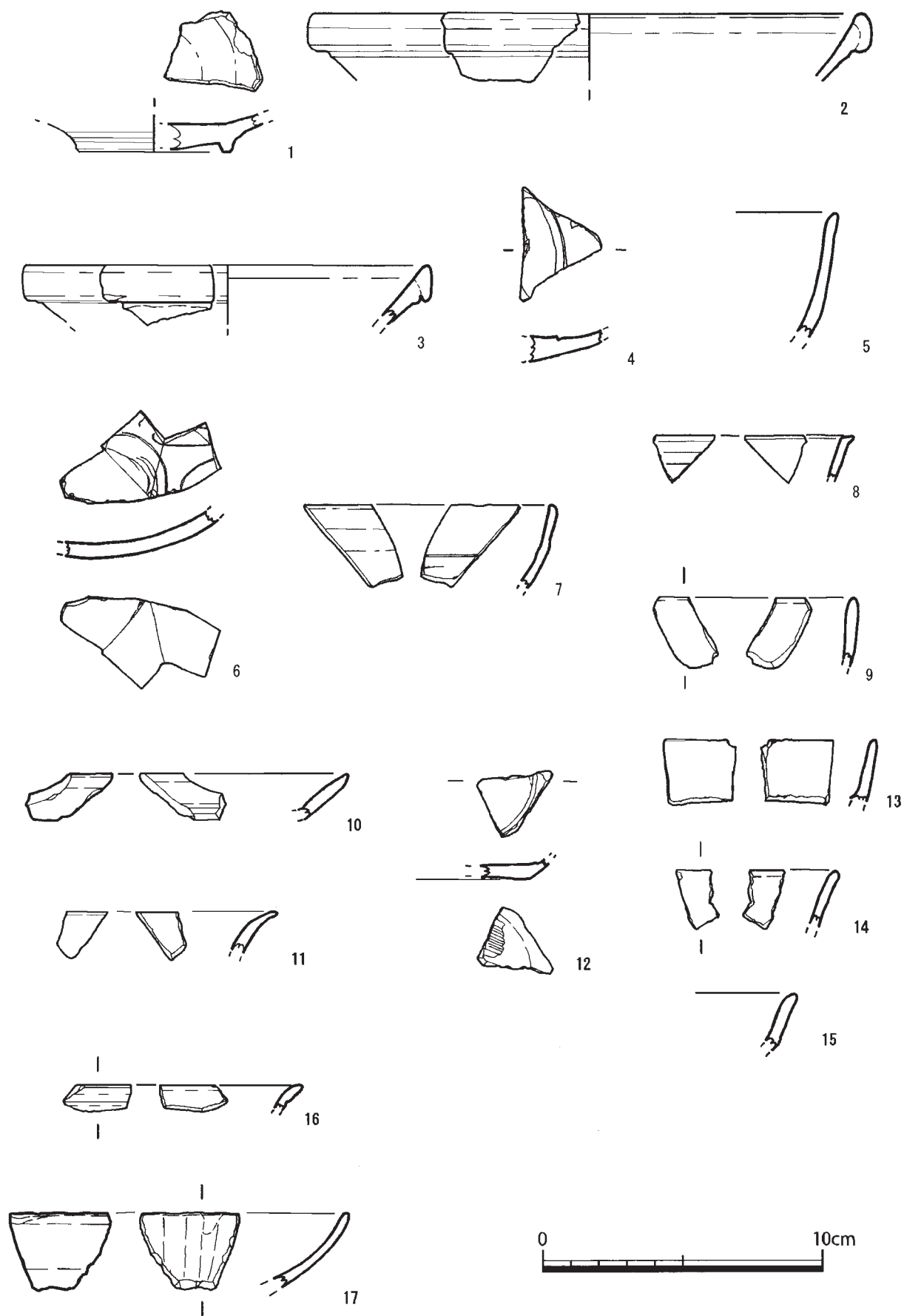


图9 定光寺前遺跡出土遺物（白磁） [S=1/2]

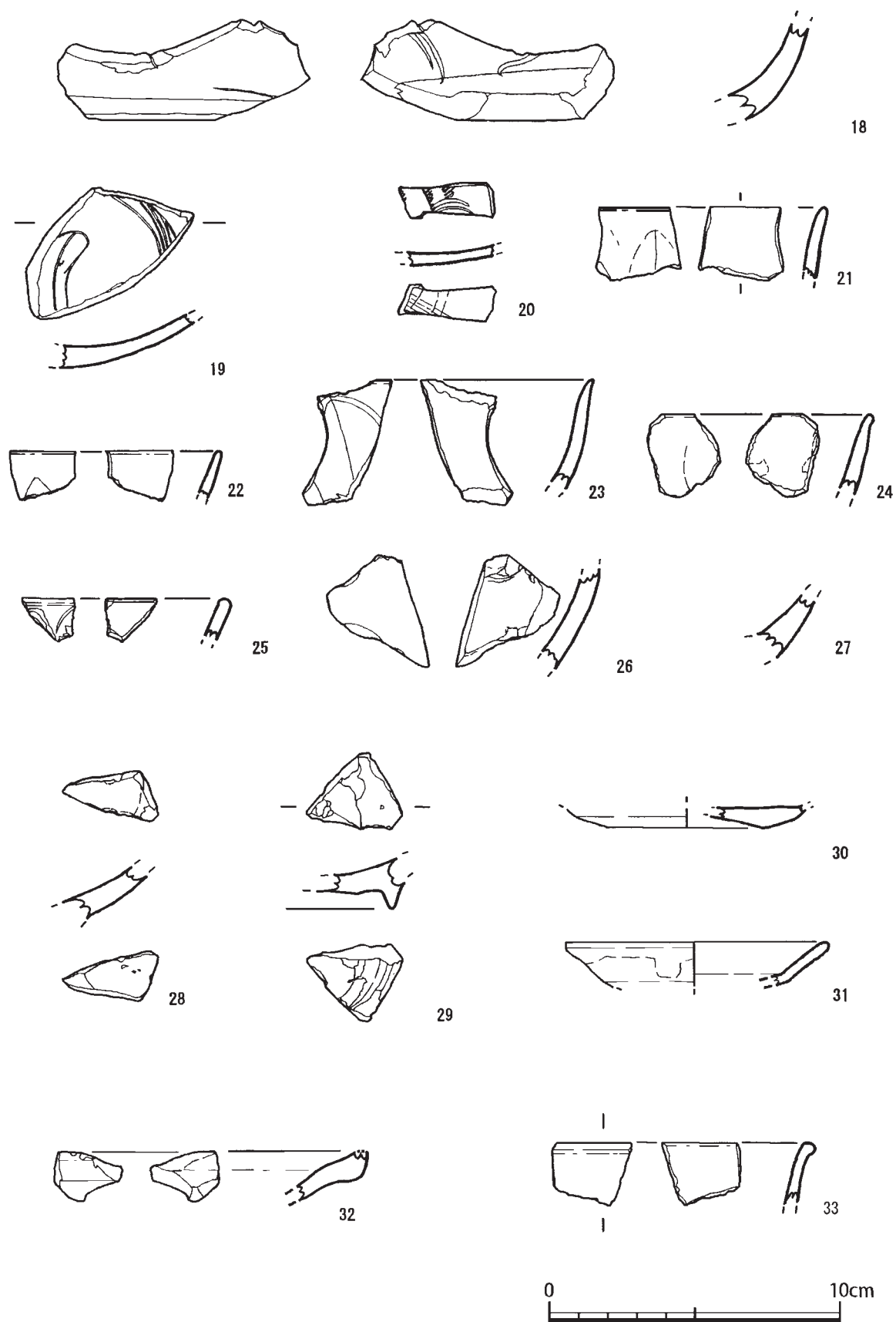


图10 定光寺前遺跡出土遺物（青磁） [S=1/2]

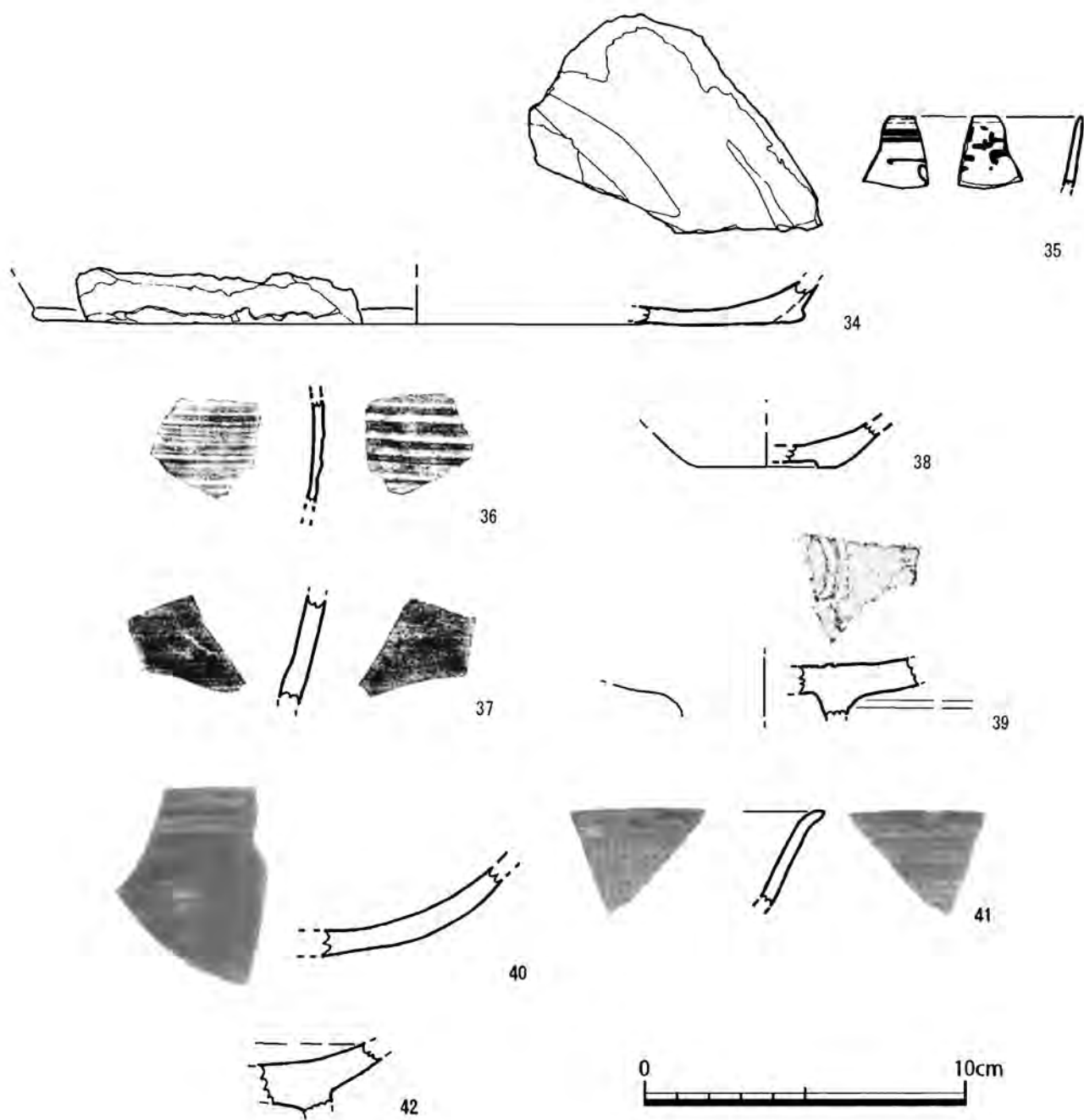
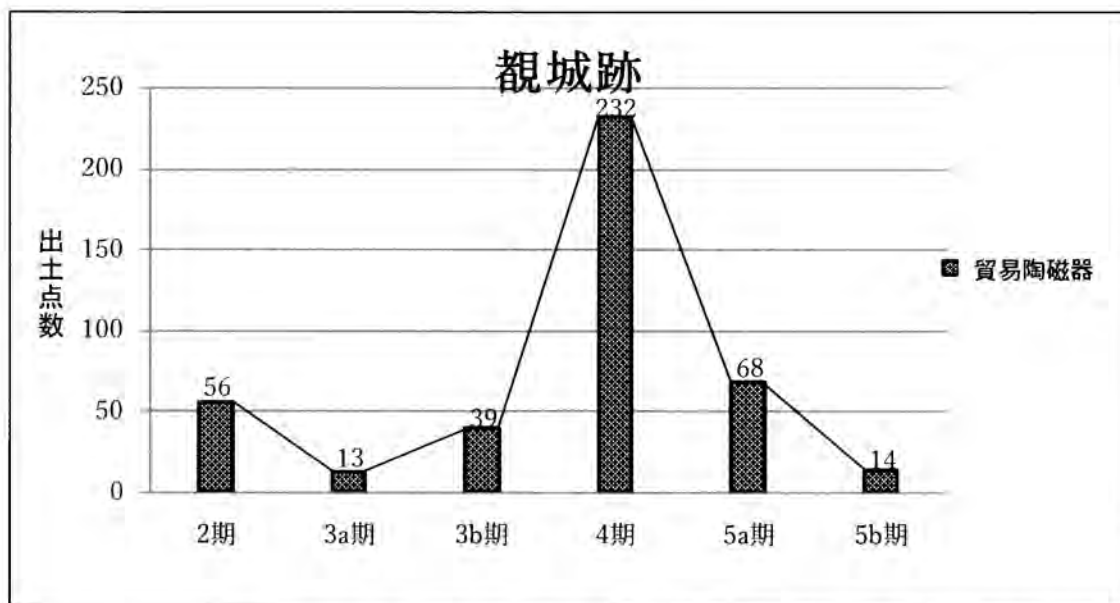
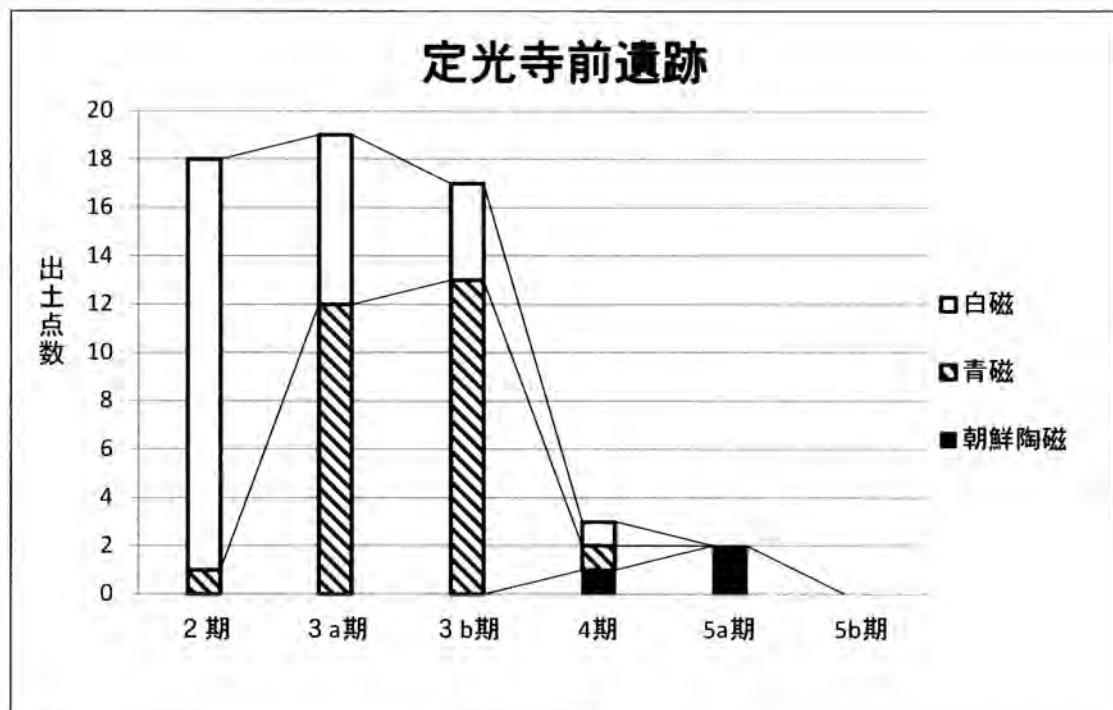


图11 定光寺前遺跡出土遺物（中国陶器・染付・朝鮮陶磁） [S=1/2]



観城跡の時期別数量表は『観城跡』（長崎県教育委員会 1997）掲載図を元に作成

※各期の実年代については以下の通り。

2期 11世紀後半～12世紀前半

3a期 12世紀後半

3b期 13世紀

4期 14世紀～15世紀前半

5a期 15世紀後半～16世紀前半

5b期 16世紀後半～17世紀前半

図12 輸入陶磁器からみた時期別数量表

表2 出土陶磁器観察表

番号	種類	出土層位	時期	器種	部位	色調		
						外	内	粘土
1	白磁	2区排土	12世紀中頃	碗Ⅸ類	底部	灰白7.5Y7/2	灰白7.5Y7/2	
2	白磁	1区表土	11世紀後半～12世紀前半	碗Ⅳ類	口縁部	灰白7.5Y8/1	灰白5Y8/1	
3	白磁	1区2層	11世紀後半～12世紀前半	碗Ⅳ類	口縁部	灰白5Y8/1	灰白5Y8/1	
4	白磁	1区2層	11世紀後半～12世紀前半	碗Ⅳ類	底部	灰黄2.5Y7/2	灰白2.5Y7/1	
5	白磁	1区2層	11世紀後半～12世紀前半	碗Ⅴ-1類	口縁部	灰白5Y7/2	灰オリーブ5Y6/2	
6	白磁	1区2層・1区3層	12世紀中頃～12世紀後半	碗Ⅳ類	胴部	灰オリーブ5GY6/1	灰オリーブ5GY6/1	
7	白磁	2区北壁深掘	12世紀中頃～12世紀後半	碗Ⅵ類かⅦ類かⅧ類	口縁部	灰オリーブ5Y6/2	灰オリーブ5Y6/2	
8	白磁	1区北壁黒褐色	11世紀後半～12世紀後半	碗Ⅸ類	口縁部	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	
9	白磁	1区2層	13世紀中頃～14世紀初頭前後	碗Ⅹ類	口縁部	灰白10Y8/1	灰白10Y8/1	
10	白磁	2区排土	11世紀後半～12世紀前半	皿Ⅵ類	口縁部	灰10Y6/1	灰白10Y7/1	
11	白磁	2区表土	11世紀後半～12世紀前半	皿Ⅴ類	口縁部	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	
12	白磁	2区2層	13世紀後半～14世紀前半	皿Ⅹ-1類	底部	灰白10Y8/1	灰白10Y8/1	
13	白磁	2区北壁深掘	13世紀後半～14世紀前半	皿Ⅹ-2類	口縁部	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	
14	白磁	1区3層	13世紀後半～14世紀前半	皿Ⅹ類	口縁部	灰白5Y7/2	灰白5Y7/2	
15	白磁	2区北壁深掘	11世紀後半～12世紀前半	皿Ⅹ類	口縁部	灰白5Y8/1	灰黄2.5Y7/2	
16	白磁	1区2層	15世紀	森田編年D群碗	口縁部	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2	
17	白磁	1区2層	16世紀	森田編年E-4類菊皿	口縁部	灰白5Y8/1	灰白5Y8/1	
18	青磁	1区3層	12世紀中頃～12世紀後半	龍泉碗Ⅰ類	胴部	灰オリーブ5Y5/2	灰オリーブ5Y5/2	
19	青磁	2区北壁深掘	12世紀中頃～12世紀後半	龍泉碗Ⅰ-2類	底部	灰オリーブ5GY6/1	灰オリーブ5GY6/1	
20	青磁	2区北壁深掘	12世紀中頃～12世紀後半	同安碗Ⅰ-1類	胴部	灰オリーブ7.5Y6/2	灰オリーブ7.5Y6/2	
21	青磁	2区北壁深掘	13世紀初頭～13世紀前半	龍泉碗Ⅱ類	口縁部	灰オリーブ5Y5/2	灰オリーブ5Y5/2	
22	青磁	1区北壁黒褐色	13世紀前半	龍泉碗Ⅱ類	口縁部	灰オリーブ5Y5/3	灰オリーブ5Y5/3	
23	青磁	1区2層	13世紀前半	龍泉碗Ⅱ類	口縁部	灰オリーブ5Y5/3	灰オリーブ5Y5/3	
24	青磁	1区2層	13世紀前半	龍泉碗Ⅱ類	口縁部	灰オリーブ2.5GY6/1	灰オリーブ7.5Y5/2	
25	青磁	2区北壁深掘	13世紀中頃～14世紀前半	龍泉碗Ⅱ類	口縁部	明灰オリーブ5GY7/1	明灰オリーブ2.5Y7/1	
26	青磁	2区排土	13世紀初頭～13世紀前半	龍泉碗Ⅱ類	胴部	灰オリーブ10Y6/2	灰オリーブ10Y6/2	
27	青磁	1区2層	13世紀前半	龍泉碗Ⅱ-b類	底部	黄褐2.5Y5/3	暗灰黄2.5Y5/2	
28	青磁	2区2層	13世紀中頃～14世紀初頭前後	龍泉龍泉碗Ⅲ類	底部	緑灰7.5GY6/1	緑灰7.5GY6/1	
29	青磁	1区3層	14世紀～16世紀	上田編年B類	底部	明灰オリーブ5GY7/1	明灰オリーブ2.5Y7/1	
30	青磁	2区表土	12世紀中頃～12世紀後半	同安皿Ⅰ類	底部	オリーブ黄5Y6/3	オリーブ黄5Y6/3	
31	青磁	1区3層	12世紀中頃～12世紀後半	同安皿Ⅰ-1b類	口縁部	灰オリーブ7.5Y6/2	灰オリーブ5Y6/2	
32	青磁	2区2層	13世紀中頃～14世紀初頭前後	龍泉杯Ⅲ類	口縁部	明緑灰10GY7/1	明緑灰10GY7/1	
33	青磁	1区2層	13世紀中頃～14世紀前半	龍泉杯Ⅲ類-1類	口縁部	灰オリーブ5GY6/1	灰オリーブ2.5GY6/1	
34	陶器	1区3層	11世紀後半～12世紀前半	罎Ⅰ-2b類	底部	灰黄褐10YR8/2	灰黄2.5Y6/2	
35	染付	1区2層	中世	明青花?碗	口縁部	明緑灰7.5GY8/1	明緑灰7.5GY8/1	
36	高麗無釉陶器	2区2層	中世	杵もしくは杵	胴部	オリーブ黒5Y3/1	オリーブ黒7.5Y3/1	暗赤褐色5YR3/3
37	高麗無釉陶器	2区北壁深掘	中世	杵もしくは杵	胴部	黄灰2.5Y6/1	灰黄2.5Y7/2	
38	高麗青磁	2区2層	14世紀	八角皿?	底部	灰黄2.5Y6/2	灰オリーブ7.5Y4/2	
39	高麗青磁	2区2層	中世	碗	底部	灰黄2.5Y7/2	緑灰10G6/1	
40	高麗象嵌青磁	2区2層	15世紀～16世紀	碗	底部	灰オリーブ7.5Y6/2	オリーブ灰10Y6/2	
41	粉青沙器	2区2層	15世紀	碗	口縁部	オリーブ灰2.5GY6/1	明オリーブ灰2.5GY7/1	
42	李朝陶器	2区2層	中世	碗	底部	灰白10YR7/1	灰白10YR7/1	明褐色7.5YR5/6



写真1 定光寺前遺跡遠景



写真2 令和元年度発掘調査作業状況



写真3 1区調査前状況



写真4 1区作業風景



写真5 1区掘削状況



写真6 2区調査前状況



写真7 2区作業風景



写真9 作業風景（時期別数量表作成）



写真8 2区掘削状況

〔参考文献〕

- 長崎市教育委員会 2006『観城跡・車出遺跡』長崎市文化財調査報告書第8集
 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会
 小野山節 1985「2 資料論」『岩波講座日本考古学1 研究の方法』岩波書店
 片山まび 2013「高麗・朝鮮時代の陶磁生産と海外輸出」『陶磁器流通の考古学』高志書院
 川口洋平 2004「中世後期の対馬・長崎・松浦」『中世日本の流通と交通』高志書院
 後藤正恒 1861『長崎名勝図誌』（1975『長崎名勝図誌』上 名著出版）
 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡 XV』－陶磁器分類編－
 中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』
 中上史行 1995『長崎の風土と歴史』
 長崎県教育委員会 1997『観城跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第3集
 長崎県教育委員会 1999『興触遺跡・興触川上遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第12集
 長崎県教育委員会 2003『興触遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第7集
 宮崎貴夫 1994「長崎県における貿易陶磁器研究の現状と課題」『長崎県の考古学一中・近世研究特集一』
 長崎県考古学会
 森田勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会

佳作ポスター

(高等学校等コード順に掲載)

※ポスター発表は任意のため、ポスターを掲載していない研究レポートがあります。

上毛野地域の発展と交通路の関係 ～地域内全域の包括的考察～

菊池悠真

伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校(群馬県)

I はじめに

「東国文化のふるさと」と呼ばれる群馬県には大小13,249基の古墳が存在した。古墳総数は東日本2番目の多さとなる。また、大和政権との関係を示す前方後円墳は全国3番目の多さを誇る。加えて、上毛野は仏教受容が迅速であった。それは仏教色の強い総社古墳群【図1】や、初期寺院の山王庵寺【図2】に代表される。背景には、畿内との時間差を置かずに入来してきた渡来人による文化の伝来がある。このことから、古代上毛野は東日本において際立って畿内や大陸との関係が強く、先進的な地域であったといえる。その要因を探るにあたり、筆者は陸と川の「交通路」に着目した。



図1 宝塔山古墳の割立式家形石棺とその特異な加工



図2 山王庵寺出土 石製騎馬

II 陸路について

4世紀後半の馬の普及と共に全国で陸上交通網が整備された。上毛野を通る代表的なものが、主として蝦夷征討に用いられた東山道である【図3】。上毛野には5つの駅家がおかれ、なかでも新田駅は東海道駅路と東山道駅路を繋ぐジャンクションの働きをもっていた。これにより、東山道のみで東北に向かうのではなく、東海道を使って上毛野まで移動する、といった戦略的多様性が生まれた。つまり、上毛野は朝廷の対蝦夷政策に不可欠な地域だったのである。

上毛野地域の大豪族、上毛野氏【図4】も東北経営に貢献していた。始祖の豊城入彦命の孫にあたる彦彦島王は「東山道十五国都督」の地位を大和政権から承認された。この地位は蝦夷征討を含めた東国支配を担う武官としての位置づけである。その子の御諸別王は父の遺志を継いで蝦夷征討など東国経営に努めた。その子孫は上毛野に在地するようになった。このことは、上毛野氏および上毛野地域が以後長い間、蝦夷征討の通過点のみならず、実際の軍事的中核も担うようになったいきさつを物語する。

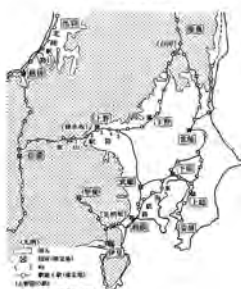


図3 五畿七道の駅路上と上毛野
前沢和之『豊城入彦命系譜と上毛野地域—その歴史的特徴をめぐって—』p.168

上毛野氏系図	豊城入彦命系譜	名	事績
上毛野氏始祖	豊城入彦命	豊城入彦命	豊城により東国統治を担う
上毛野氏始祖	彦彦島王	彦彦島王	谷間として東国統治の基盤を築く
上毛野氏始祖	彦彦島王の子	彦彦島王	東山道十五国都督、東山道に在る
上毛野氏始祖	彦彦島王の子	彦彦島王	東山道に在る
上毛野氏始祖	彦彦島王の子	彦彦島王	東山道に在る
上毛野氏始祖	彦彦島王の子	彦彦島王	東山道に在る
上毛野氏始祖	彦彦島王の子	彦彦島王	東山道に在る
上毛野氏始祖	彦彦島王の子	彦彦島王	東山道に在る
上毛野氏始祖	彦彦島王の子	彦彦島王	東山道に在る

図4 上毛野氏系図

前沢和之『豊城入彦命系譜と上毛野地域—その歴史的特徴をめぐって—』p.155

東山道を用いた上毛野への移住者の最たる例が、金井東裏遺跡出土の「甲を着た古墳人」【図5】である。武器から付近の有力者であったといわれ、渡来系と判定されている。幼少期を長野県南部の伊那谷で過ごした可能性が指摘されており、東山道を用いて上毛野に至ったと考えられる。途中の碓氷峠は高低差の激しい難所、馬が活躍したことだろう。この人物は東国へ馬生産技術を伝える目的で上毛野に移住してきたと考えられる。このような人物が地域の有力者となったことと上毛野氏の支配を関連づけて考えていく。

上毛野氏に関する日本書紀の記述には時代の不一致がみられるため、考古学的手法で年代を推定しよう。太田天神山古墳とお富土山古墳では、大玉級の古墳にのみみられる長持型石棺が出土している。また、どちらも畿内の豊田御厨山古墳と相似形である。他方、大室古墳群の前二子古墳には朝鮮半島との関係を示す出土品がみられる。隣接する中二子古墳も石室こそ未発見だが、規模が相応に大きい。よって、これらの古墳の築造年代も考慮し、豊城入彦命の陵墓は太田天神山古墳かお富土山古墳のいずれかで、4、5世孫の墓が大室の二つの古墳であると推測する【図6】。したがって【図4】の上毛野氏族らは、5～6世紀に上毛野に在地していたといえる。これは前述の「甲を着た古墳人」の時代と合致し、他地域からの移住者が上毛野を発展させたことと結論付けられる。それを促したのが東山道、すなわち「陸路」である。



図5 「甲を着た古墳人」
発掘時の様子(上)と復元図(下)
群馬県埋蔵文化財調査事業団HPより



築造年代:5世紀前半から中頃
特徴:長持型石棺の出土

豊城入彦命陵墓?



築造年代:6世紀初頭から前半
特徴:対朝鮮半島交渉を示す出土品

荒田別や竹葉瀬らの墓?

図6 上毛野氏陵墓の推定

III 航路について

群馬県は利根川水系に代表される河川が充実し、現在428の一級河川を数える。前項の五畿七道が整備される以前、上毛野で最初に発達したのは利根川を利用した航路であった。畿内から東海地方を経由し、東京湾から利根川を遡上するルートで大和政権との交流があり、上毛野の開発が為され、その後の発展の下地が作られた。

旧利根川沿いに位置する朝倉・広瀬古墳群は南北約5kmに渡って154基の古墳が確認されている。とりわけ4世紀前半に築造された八幡山古墳と前橋天神山古墳は初期東国文化の豪勢さを物語る。前者は東日本特有の前方後円墳であるが、2枚の三角縁神獣鏡が出土している。この旧利根川沿いの古墳群は、古墳時代初期において水上交通が人々の移住や技術の導入をもたらした、東国文化の発祥・発展に寄与したことを示す。

陸上交通網の整備後も、上毛野では川沿いの古墳築造が相次いだ。ここでは西方に井野川が流れる扇状地に位置する保渡田古墳群に着目したい。特筆すべきは全長100m級の前方後円墳が3つも並び、その全てに舟形石棺が用いられている点である【図8】。舟形石棺は全国で分布に極端な偏りがあり、特別なネットワークを想定すべきである【図9】。また、その地域は河川または海という形で航路が確保されており、実際の舟と何らかの関連があると予測される。車持氏と思われる保渡田古墳群の豪族は、そこから南東約1kmに位置する三ツ寺1遺跡の館を拠点にしたと考えられている。車持氏は大和政権と非常に親密であった。以上のことから、航路を利用した交流が文化や技術の流入を促し、上毛野の発展に寄与したと考えられる。

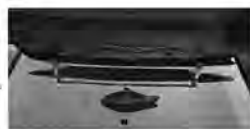


図7 当時の舟と同形とされる舟形石棺
下田遺跡(上) 元総社寺田遺跡(下)



図8 保渡田八幡塚古墳出土舟形石棺



図9 舟形石棺の分布
(保渡田八幡塚古墳土器展示資料)

筆者撮影

IV おわりに—上毛野地域と道—

古代において、馬や舟は移動手段として重宝された。それらの発達に伴い陸水両方の道が発達してきたことは先に述べた通りである。

現代において、高度経済成長期を経た後、群馬県では盛んに交通網が整備されていった。その際、古代の遺跡が発掘される事例が多い。古代に交通によって栄えた「上毛野」が、現代に再び交通によって姿を現すとは、実に面白い。

しかし、その全てが十分に保護されているとは言い難い。例えばお富土山古墳は線路が貫通し、前橋天神山古墳は埋設施設を除いて全て削られてしまった。今後の課題として、進み行く開発の中で価値ある遺跡、「上毛野」の息吹を絶やさないための策を考えていきたい。

<主な資料・参考文献>

- ・松島崇治(2020)『東国文化副読本—古代ぐんまを探検しよう』群馬県
- ・前沢和之(1992)『豊城入彦命系譜と上毛野地域—その歴史的特徴をめぐって—』国立歴史民俗博物館
- ・群馬県埋蔵文化財調査事業団(2019)『金井東裏遺跡の奇跡—古墳人、現る』上毛新聞社

福井県の軽部氏と「講」及び伝統文化の存続

福井南高等学校 前田遥南 軽部由菜

I はじめに

1. 動機と目的

軽部氏は関東地方に多く、特に茨城県つくば市や山形県寒河江市付近に集中している。一方で西日本において軽部氏は福井県鯖江市下新庄町【資料1】に集中しているということを知り、なぜ福井県の軽部氏がこの小さな集落に集中しているのか興味を持ち調べた。私たちは調査の過程で、下新庄町の軽部家のみには伝わる「軽部念仏講」の存在を知る。ここでは地元の伝統的な文化を記録するとともに、多くの伝統文化が直面している「存続」問題について考察する。

2. 研究概要

下新庄町の軽部家を中心に聞き込み調査を行った。また、鯖江市教育委員会文化課や公民館へのインタビューも行い、市内の今後の伝統文化のあり方についてのアドバイスをいただいた。この過程で見つかった文書の解読は私たち高校生のみでは困難をきわめたため、くずし字に知識のある国語科や地歴科の先生方に依頼し解読を手伝っていただいた。フィールドワークにおいては、実際に下新庄町軽部氏一族である軽部由菜が軽部氏への聞き込み調査や周縁部の調査を、前田遥南が記録や資料の体系化および研究レポートの作成を担当した。



【資料1】軽部氏の小地区分布図
出典：日本姓氏語源辞典 <https://name-power.net/>



【資料3】下新庄町軽部氏家紋 【資料4】左：上杉家 右：伊達家
出典：戦国ガイド <https://sengoku-g.net/>

II 研究

1. 下新庄町軽部氏

起源

下新庄町軽部氏や軽部念仏講に詳しい新横江公民館長の軽部市郎右衛門さんにお話を伺いに訪れた際、いくつかの資料をいただいた。およそ160年前に書かれたとされる書物【資料2】では下新庄町軽部家と軽部念仏講の由来に言及しているが、この時点ではすべてが解読されているようではなかった。軽部氏は第十代崇神天皇の第三皇子であった彦彦親王より軽部姓を賜ったと記されている。しかし、第十九代允恭天皇の皇子である木梨皇子（キナシカルノミコ）の御名代部からついたといわれているのが軽部姓の一般的な説であり下新庄町軽部氏の起源とは大きく異なっている。

家紋

下新庄町軽部氏の家紋は「竹に雀」【資料3】であるが、一般的にある竹に雀ではない。竹に雀といえ、やはりその支配領域に軽部氏が集中している上杉家や伊達家などの家紋【資料4】が連想されるが、下新庄町軽部氏の家紋と比べればその違いは一目瞭然である。線対称が特徴である一般的な竹に雀に対し、下新庄町軽部家の竹に雀はその形容と全く異なっている。家紋についての調査中、形容が類似する家紋が他にも見つかったが、下新庄町軽部氏との関係は分からない。下新庄町軽部氏の家紋の研究は今後の課題である。



【資料2】軽部念仏講についての古文書（筆者撮影）

2. 念仏講

軽部念仏講

講とはほぼ全国の村に存在した相互扶助を目的とした地域コミュニティである。しかし人の往来が活発になると、そのほとんどが潰れていった。現在に残るのは信仰心が強い集落や、エンターテインメント性の強い独特な伝統が残る講のみである。「安政二年十二月始テ軽部念仏〇始マリ」【資料2】。安政二年は西暦1855年であり軽部念仏講は165年前に始まったようである。この文書からは「軽部茂左衛門の長男が出家し僧侶兼学者になった」という記述があり、この茂左衛門が軽部念仏講を始めた中心人物のようである。「念仏を唱えることで極楽浄土へまいることができ、続けていくことにより未来永劫軽部家が栄えることになる」という旨のことも同時に記されている。

念仏講の現在

現在、軽部念仏講は各家の当主や年長者が一人ずつ集い、数時間念仏を唱えその後食事をを行うものである。集会場所は各家が当番制で指定され、食事を含めた準備はその家の女性たちが担う。1995年までは下新庄町軽部氏の9家に参加していたが、2018年には1家減り、更に現在は7家で行っている。参加する家も年々減少し、春と秋に行っていた講を今年からは年1回に減らし、食事から茶菓子のみと簡素化された。このような一族限定の「講」というのは文献も少なく、また情報共有の場も容易には見当たらない。非常に閉鎖的な空間で行われているがゆえに公にもならず、ひっそりと消えていくものが多いと推察する。まさにいま、軽部念仏講もまたその途を辿ろうとしているのである。

III まとめ

伝統文化の中には「手段を重んじるあまり目的と手段が逆転しているどころか、現代においては目的へのマイナスな作用を及ぼしている」というような場合が往々にしてある。講を挙げると、本来「人々の結束を強める」というものが目的であり講はそのための手段である。しかし、その手段を伝統として形式を重んじるあまり結果的にそのような古臭い縛りが嫌で積極的に村から出ていこうとする若者も少なくない。ここでの軽部念仏講は、一族の結束を強めるという目的のための手段である「講」がむしろ新しい後継者となる若者を遠ざけてしまっているのだと捉えることもできる。このような負の連鎖のなかでは「伝統だから残さなければならない」という考えに後継者はますます距離をとってしまう。私たちはこのような文化を継承していくためには、従来の手法に固執するだけではなく、現代に即したものと見直す必要もあると考えている。しかしながら昔ながらの大切な部分を残していくことも重要だ。鯖江市の藤田彩学芸員によれば、現時点で現実的な伝統文化の存続方法は「細かく正確な記録を残すこと」。後世で興味を持った人が復活させる可能性があるそうだ。我々は今後の研究の一環として軽部念仏講についての記録も作っていきたいと考えている。また、このような地域の相互扶助を目的とした「講」は、高齢者問題や貧困問題を解決するためのヒントにもなると考えている。記録を残すことは「講」だけではなく社会の諸問題を解決するヒントにもなるのではないだろうか。

軽部念仏講のように、コロナ禍の中で時代に適応できなくなってきた表立って議論されない伝統文化や習慣はたくさんあるだろう。私たちは、全国の組織が繋がり、相談し、模索しあえるようなネットワークをオンラインで構築していく必要があるのではないかと考える。これは新規ではなく既存のSNSを活用することで実現可能だ。これは後継者となる若者側にとってもメリットとなる。学校で郷土の調べ学習をする小中学生は多い。インターネットを使って簡単にアクセスできる場にこのような情報があれば、少なくとも現段階よりは認知される文化が増えるだろう。

今回の研究で私たちは、伝統について強い想いを持つ方々の話を聞くことができ、若者側の目線だけではなく伝統を続けたい人たちの思いも理解できたように思う。この経験は今後の様々な課題研究に役に立つかけがえのないものであった。今後も多様な視点をこころがけて研究に励んでいきたい。

二億年前からのたからもの

～光礁と五色浜～

鹿児島県立鶴翔高等学校 地域文化研究同好会
倉津優奈 下平拓真 的場翔 入徳舞衣

研究の概要

本校の所在する鹿児島県阿久根市には阿久根の七不思議という民話があり、その一つである光礁と近接する五色浜は、不思議な光を発する岩、そして色とりどりの石のある海岸で、そこには宝が埋まっていると信じられ、たびたび探索されたと伝わっている。その光礁（ひかるぜ）・五色浜（ごしきはま）が、今年、県指定文化財に指定された。光礁や五色浜に露出しているチャートという地層は、鹿児島県内では最古の地層であり、プレートテクトニクスとの関わりもある貴重なものだという。

まず、光礁・五色浜がどのようなものと描かれているのか、古文書や風土誌などの文献を調査した。次に、地学に関する書物から、日本列島のなりたちや南九州の地質の特徴について確認した。そして、県立博物館による光礁・五色浜の地質調査報告書をもとにフィールドワークを行い、さらに市内の他の地域でのフィールドワークも行い、対照として光礁・五色浜と比較した。

光礁・五色浜フィールドワーク

調査報告によると、光礁・五色浜付近は、チャート、砂岩、泥岩、玄武岩質溶岩が互層となっているとされる。

実際に注意深く石を観察すると…



◎チャート◎

黄味がかったものが多いが、赤っぽいものや緑っぽいものもあり、やや透明感がある。



◎泥岩・砂岩◎

泥岩は、黒く、大きめの割にずっしりしており、比重が高い。砂岩は灰色で細かい粒が見える。



◎玄武岩質溶岩◎

光礁から連なる茶色の岩礁がつづいているが、一部分だけ黒く異質な部分が南北に平行している。整然と板状になっており、破片を見ると真っ黒であり、不純物もない。

海岸に落ちている石を集めてみると、実に色とりどりの石がある。特にチャートは黄・赤・緑などの色も多彩で、透明感があり、美しい。江戸時代の資料である『三国名勝図会』には、「種々異彩の砂石敷連る、其状鮮明にして佳麗なり、光彩目を奪ふ、遊覧の徒、沙石を採て珍玩とす、（種々異彩の石は敷き連なっている。それは鮮明で佳麗であり、鮮やかさは目を奪うほどである。遊覧する人々は、石を拾って珍しい土産とした。）」とあるが、この記述はまさに色とりどりのチャートを指しているだろう。

チャートはどのように生まれた？

チャートとは、海底で海洋プレートに「放散虫」という微生物の遺骸が沈殿して形成された地層である。顕微鏡で見ると、放散虫の化石が確認できるという。

下図にあるように、日本の南の太平洋の海底（南海トラフ）では、海洋プレートが日本列島のある大陸プレートの下に沈み込んでいる。そのときにチャートの層は削られて、大陸プレートにくっつき（付加体になり）、プレートの動きによって長い歳月をかけて陸地に運ばれてくる。

付加体は海溝（トラフ）から順々に形成されるので、右図にあるように、阿久根付近は「秩父帯」と呼ばれるジュラ紀の付加体であるチャートの地層になっているはずである。

資料：『九州の大地とともに』土井二朗／1999年5月／鹿嶋書館



図4 付加体がつくられるプロセス

光礁

不思議な光を発するとも、黄金が埋まっているとも言われる



J2b, J2c, J2mなどは、ジュラ紀（約2億1,000万年前～約1億4,000万年前）の地質を表す。

他の場所はどうだろう？

他の地域では、このチャートの地層は見られないのだろうか。調査をしてみると…



◎黒之瀬戸・梶折鼻（上★）◎

テーブル状の黒い岩盤。一部赤い部分を含む。Nko（礫岩安山岩、溶岩及び火砕岩）を示す。



◎倉津港（中★）◎

黒や灰色、赤みを帯びた小石が多い。Nko（礫岩安山岩、溶岩及び火砕岩）を示す。



◎尻無川河口（下★）◎

河口の北側は、黒くテーブル状の塊になった大岩となっている。Pt（デイサイト溶結凝灰岩）を示す。

他の場所では、黒や赤茶色などの岩や石が多く、透明感のあるチャートのような石は見られない。それは、阿久根を含む南九州一帯が火山に由来する山地であるためである。

ちなみに、鹿児島県の大部分はシラス（約2万2,000年前の始良カルデラ噴火の入り火砕流）であるが、阿久根一帯に残る火山性の地質は、それより古い約100～200万年前に北陸で活動した火山の痕跡であると考えられる。



資料：『九州の大地とともに』土井二朗／1999年5月／鹿嶋書館
『九州の山地』阿久根近辺火山山地であるとされている。

研究のまとめ

遠い南の海の底から2億年もの長い年月をかけ、はるばるこの地へたどりついたチャートだが、そのほとんどは南九州の激しい火山活動にさらされ、今の私たちが目にすることはできない。しかし、その中でかろうじて地表にその姿を残してくれている光礁・五色浜は、私たちにとって、まさに「二億年前からのたからもの」なのである。

参考文献：『三国名勝図会』／1843年、『出水風土誌』／中村一正／1915年、『鹿児島県地質のガイド（上）』／昭和33／1958年／コロナ社
『鹿児島県立博物館研究報告（第23号）』／鹿児島県阿久根市五色浜地区の先古第三系から産出した放散虫化石／委水成澤／2004年 ほか

第14回全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧

(高等学校等コード順に掲載)

研究タイトル	高等学校名
上川盆地は北海道の中心都市を置くのに適しているのか	北海道旭川東高等学校
縄文時代は楽で平和だったのか？	市立函館高等学校
先住民アイヌの文化とその保護について ～チョマトーの沼の変遷を踏まえて～	帯広大谷高等学校
高校生縄案内人の活動を通して	青森県立青森南高等学校
津軽為信の軌跡 たか丸くんとタメノブーンによる考察	弘前学院聖愛高等学校
春日流鹿踊りについて ～実態の報告、及び花巻市との関連～	岩手県立花巻北高等学校
宮沢賢治ワールド	//
ふるさとタイムトラベル	//
花巻人形について	//
烏海柵跡について	//
花巻と北上における山車の相関性について	//
男鹿市のナマハゲ行事について	秋田県立秋田北高等学校
新庄藩の生き残りをかけて ―戸沢正実を中心として―	山形県立新庄南高等学校
磐梯山大噴火と裏磐梯緑化の父「遠藤現夢」 ～子に孫に 残せ自然の 美しさ～	福島県立会津高等学校
福島県の新聞史 ～黎明期日本と福島新聞～	福島県立喜多方高等学校
下妻藩における参勤交代について	茨城県立古河中等教育学校
土浦における海軍航空隊と予科練の歴史 ～海軍航空隊が施した教育及び当時の土浦地方との関係～	茨城高等学校
土浦海軍航空隊で教育・訓練を受けた若き予科練生について	土浦日本大学高等学校
武茂川流域の金産出とその価値	栃木県立矢板東高等学校
新選組 ～和魂洋才の思想	群馬県立高崎女子高等学校
魔の山、谷川岳 ひとびとを魅了し続ける山	//
繭と生糸は日本一 ～萩原鏝太郎と碓氷社～	//
上毛野地域の発展と交通路の関係 ～地域内全域の包括的考察～	伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校
古代上毛野の土地における巨大古墳の出現・意義とその変遷 ～群馬が『古墳大国』と呼ばれるまで～	高崎商科大学附属高等学校
戦時下の海南島 ―海南海軍警察訓練所と二枚の絵―	昌平中学・高等学校
宇佐山城の戦い ―織田信長の窮地を救った戦いについて―	西武学園文理高等学校
安土城天主の平面復元の試案に基づく「天守指図」の史料価値の検討	千葉敬愛高等学校
下総国生実藩主森川氏の菩提寺の研究	千葉明德高等学校(中高一貫コース)
東金御殿山発、軍艦多摩の光と影 ～紡がれる記録、消えゆく記憶～	市原中央高等学校
祖父の体験から見るシベリア抑留	東京大学教育学部附属中等教育学校
源満仲はなぜ、多田に本拠地を置いたのか ～最初期の武士の生き方を読み解く～	東京都立白鷗高等学校
戦跡を調査する ―旧日立立川航空機株式会社変電所―	東京都立保谷高等学校
東京遷都とその実態 ～京都の動乱と日本が変わった日～	東京都立本所高等学校
四谷怪談でみる怪談の成立	女子学院高等学校
妖怪の出現と人々の考え方	和洋九段女子高等学校
妖怪(予言獣)の存在理由と役割 ～現代に復活したアマビエを中心に～	普連土学園高等学校
天文学的観点から見る天岩戸伝説 ～神話は史実なのか～	東京電機大学高等学校
江戸時代の火消「し」組の謎 ～死生観から謎を解明する～	恵泉女学園高等学校
裴松之注内の佚文から見える陳寿の排斥事実 ―董卓の「霊帝の事跡」継承に対して―	武蔵高等学校
地域の歴史から考える源頼朝 ～頼朝が真鶴に救われた理由とは～	神奈川県立足柄高等学校
靖国神社の真実	//
関東大震災による南足柄市の被害と復興	//
秀吉の小田原攻め ～北条氏100年支配の最後とは～	横浜共立学園高等学校
「寺子屋必下書院」の歴史 ～必下書院と生涯を教育に捧げた人々から学ぶ、現代の教育の在り方～	金沢大学附属高等学校
福井県の軽部氏と「講」及び伝統文化の存続	福井南高等学校

研 究 タ イ ト ル	高等学校名
歴史的建造物について	山 梨 県 立 甲 府 東 高 等 学 校
教圓寺の沿革とその終焉	長 野 県 屋 代 高 等 学 校
宝暦騒動から見た義民の里 青木	長野県上田染谷丘高等学校
ナッツ割りから考える700万年の人類史 ～チンパンジー、現代の子ども、飛騨の縄文人を比較する～	岐 阜 県 立 関 高 等 学 校
応永年間、関鍛冶に何が起きたのか ～関鍛冶成立期に関する探究～	//
明智光秀の謎の前半生を追う 史料とフィールドワークからの検証	//
菰山代官江川坦庵の功績と評価について	静 岡 県 立 菰 山 高 等 学 校
ハンセン病療養所の歴史とその問題	//
萩の歴史にせまる ～萩反射炉・萩城・萩城下町～	//
出島の立地条件と長崎港を中心としたその後の発展	//
戦争に縛られた庶民の暮らし	//
小説「夜行」から尾道を探る	//
国宝 松江城	//
九州から学び活かす ～火山と雨の恩恵と損害～	//
広島・長崎の復興について	//
ハンセン病と個人の関わり	//
文学作品から考える原爆の人体被害	//
ハンセン病と療養所	//
戦争と平和 ―広島と長崎の悲劇―	//
太平洋戦争	//
戦争と平和について 現代にいたる原爆問題	//
明治日本の産業革命遺産（九州や山口の世界遺産）や先覚者について	//
島原の乱	//
九州・中国地方の歴史的背景について	//
歴史・地理的視点による静岡県内交通発展への道 ～御厨駅から考える静岡空港駅着工への可能性～	静 岡 県 立 榛 原 高 等 学 校
国宝「風神雷神図屏風」誕生の背景を追う ～江戸初期の豪商と伝染病がもたらしたもの～	愛 知 県 立 岡 崎 高 等 学 校
杉原千畝と日本 ～偉大な功績とつながる未来～	愛 知 県 立 一 宮 興 道 高 等 学 校
讃岐高松藩「塩硝製法並びに筒薬調合方」 未解説古文書から考察する幕末高松藩の火薬製造	南 山 国 際 高 等 学 校
かむかぜの伊勢のなりたち	鈴 鹿 高 等 学 校
丹波波多野氏における戦国大名化の考察 ～無名大名波多野一族が築いた栄華と没落までの百年の軌跡～	大 阪 府 立 生 野 高 等 学 校
書翰から見た橋本左内 ～大坂が左内に与えた影響について～	明 星 高 等 学 校
戦国武将にとって滋賀県の果たした役割とは	大 阪 青 凌 高 等 学 校
茨木隠れキリシタンの研究	関 西 大 学 高 等 部
鳴尾義民についての史実と伝承	兵 庫 県 立 鳴 尾 高 等 学 校
天満大池築造と喜瀬川形成に関する地理学的検討	兵 庫 県 立 加 古 川 東 高 等 学 校
古墳信仰と周辺豪族 ～古代播磨をふりかえる～	兵 庫 県 立 姫 路 東 高 等 学 校
古代瓦からみた法隆寺の存在とは	奈良女子大学附属中等教育学校
身近な石造物 ～小谷古墳と益田岩船～	奈 良 県 立 橿 原 高 等 学 校
室生の地に根付く竜神信仰 ～室生大野海神社の祭礼を中心に～	奈良県立法隆寺国際高等学校
呪禁師 ～律令国家における道教呪術の衰退と再興～	//
大和五條の地侍、辻本氏の系譜 ～先祖の足跡を系図から辿る～	//
奈良県全域の『絵馬』分布状況	奈 良 県 立 奈 良 朱 雀 高 等 学 校
平安の南都の僧兵に迫る ～興福寺を中心に～	東 大 寺 学 園 高 等 学 校
波太神社と大鳥居の関係 ～駅前にある鳥居の正体とは～	智 辯 学 園 和 歌 山 高 等 学 校
和歌の浦が私たちに見せてくれた世界 ～山部赤人、聖武天皇らと和歌の浦～	近畿大学附属和歌山高等学校
出雲神話とたたら製鉄との関連性 ～ヤマタノオロチ伝説とたたら製鉄を中心に～	島 根 県 立 大 東 高 等 学 校
岡山市北区津高台 皿池と頌徳碑	岡 山 県 立 岡 山 朝 日 高 等 学 校

研 究 タ イ ト ル	高等学校名
士族授産事業と企業統治 ―篤好社の事例分析	岡山県立岡山朝日高等学校
広島市安佐北区安佐南区の神楽について	広島県立安西高等学校
南海地震碑と古の教訓 ～忘れさせない記憶～	徳島県立城北高等学校
西条陣屋と城下町の今昔	愛媛県立西条高等学校
新谷藩の軌跡	愛媛県立大洲高等州学校
中江 藤樹	//
小川地区の行事の変遷 ～共同体の苦悩と挑戦～	愛媛県立松山西中等教育学校
伊予の関ヶ原と雄郡神社	//
源氏の重宝の在り方について ～二振一具の刀は源氏の「重代」だったのか～	//
ロシア兵捕虜について（愛媛県松山市） ―日露の友好のかけ橋―	済 美 高 等 学 校
八田堰・弘岡井筋建設の意義と春野平野発展についての研究 ―土佐藩家老 野中兼山の業績から読み解く―	高 知 学 芸 高 等 学 校
高校生による学校資料の保存と活用について ～佐賀県立鹿島高等学校所在の学校資料を題材にして～	佐 賀 県 立 鹿 島 高 等 学 校
島原高校敷地内における島原城遺構に関する調査 ～「三の丸絵図」を通して～	長 崎 県 立 島 原 高 等 学 校
定光寺前遺跡出土の貿易陶磁器からみた中世壱岐の研究	長 崎 県 立 壱 岐 高 等 学 校
山城と丘城の南小国町・小国町との関わり ～平城と動馬木城の距離関係から見えるもの～	熊 本 県 立 小 国 高 等 学 校
―大分空襲を見直す―防空演習と民衆統制	大 分 東 明 高 等 学 校
太陽とアメノウズメ	宮 崎 県 立 宮 崎 大 宮 高 等 学 校
地域における島津義弘の評価を再考する ～木崎原合戦にみる人間性～	宮 崎 県 立 飯 野 高 等 学 校
野口遵による近代化学工業の発展	鹿 児 島 県 立 大 口 高 等 学 校
志布志湾岸の古墳群 ～日本南端の志布志湾岸に、なぜ九州最大級の前方後円墳が存在するのか～	鹿 児 島 県 立 志 布 志 高 等 学 校
二億年前からのたからもの ～光礁（ひかるぜ）と五色浜（ごしきはま）～	鹿 児 島 県 立 鶴 翔 高 等 学 校
陸の海「ウンブキ」の謎を追って ～日本最大級の海底鍾乳洞～	鹿 児 島 県 立 徳 之 島 高 等 学 校

※個人情報に配慮して、研究タイトルと高等学校名のみを記載しています。

〈 審 査 委 員 〉

清水 哲郎（審査委員長・奈良大学 学長）

角谷 常子（実行委員長・奈良大学 文学部史学科 教授）

木村 圭司（奈良大学 文学部地理学科 教授）

小林 青樹（奈良大学 文学部文化財学科 教授）

武田 一郎（奈良大学 文学部地理学科 教授）

三宅 晶子（奈良大学 文学部国文学科 教授）

渡辺 晃宏（奈良大学 文学部史学科 教授）

相原 嘉之（奈良大学 文学部文化財学科 准教授）

卜部 敬康（奈良大学 社会学部心理学科 講師）

中坊 勇太（奈良大学 社会学部総合社会学科 講師）

山田 昇平（奈良大学 文学部国文学科 講師）

笹岡 勇也（奈良県教育委員会 指導主事）

第14回（2020年） 全国高校生歴史フォーラム 発 表 集

編集・発行 第14回全国高校生歴史フォーラム実行委員会
〒631-8502 奈良市山陵町1500 奈良大学 広報室内
TEL 0742-41-9588
印刷 共同精版印刷株式会社
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6



主催

奈良大学・奈良県